

建築物の言語描写における白と透明性と間の 多義性からみる実像と虚像

Actual Reality and Virtual Reality from the Viewpoint of Polysemy
on White, Transparency and *Ma* in Textual Descriptions of Buildings

2014 年

米澤 隆

概要

【背景・目的】 本論文は、現代日本の建築家による言説を通して、建築物の言語描写における多義性の側面から実像と虚像の関係を論じたものである。従来、建築をとらえる観点として、物の性質や空間スケール、空間構成、建築によってつくりだされる光、風、温度などの環境現象などに重きを置くものが多かったが、同じ物、空間、現象でも人の認識、体験、慣習、文化、社会背景などの違いにより、つくりだされる像（印象）、そこから受け取る意味内容は異なる。実体としての建築にとどまらず、その実像がつくりだす虚像まで含めた水準で建築を検討することは重要であると考えられる。建築家の創作行為の一部としての言説活動に着目し、建築家が物、空間、現象をどのようにとらえ、そこにどのような性質、効果、ストーリー（意味）を創出しようとしてきたかを、多数の建築家の言語描写を相互に比較検討することにより、実像と虚像の関係を明らかにすることを目的とする。古来、建築家は実体としての建築に、その性質として以上の意味を付与させてきた。宗教建築においては、その宗教がもつ理念、精神性を建築の実体に表象させ、王族、貴族の邸宅では、権威、文化を表象させてきた。それとは逆に、それらを捨象し抽象化することにより民主主義やインターナショナルスタイルを打ちだしモダニズムを誕生させた。また無名化し過ぎたモダニズムへの反発から近未来的なイメージや土着的、歴史的イメージを借用することにより、建築にイメージを付与させてきたポストモダニズム建築にいたっては顕著である。本論文は虚像を生み出す実像の多義性の観点から、表層の次元として「白」、ものの次元として「透明性」、空間の次元として「間」の3つの次元で捉え、「白」、「透明性」、「間」それぞれにおいて、文章構造を比較考察し多義性を明らかにするとともに、建築における実像と虚像の関係を検証するものであり、建築をとらえる新たな評価軸を示すものである。

【研究の構成】 本論文は「建築物の言語描写における多義性からみる実像と虚像」と題し、以下の7章により構成される。序論（1章）、研究の理論と進め方（2章）、建築物の言語描写における＜白＞の多義性（3章）、建築物の言語描写における透明性の多義性（4章）、建築物の言語描写における＜間＞の多義性（5章）、多義性からみる実像と虚像（6章）、結論（7章）

【概要】 以下に各章の概要を示す。

第1章では、本研究の目的と意義を示した。また、関連する既往研究を整理した。

第2章では、研究の理論として、分析を進める上で基盤となる考え方を説明する。まず、分析対象の位置づけを行い、各章の課題の位置づけと分析方法を設定した。次に研究の流れと構成を示した。

第3章では、建築家が自身の作品において述べた言語描写の中から白に関する記述を対象とし、建築分野における白という概念の多義性に着目した。そこで、白という言葉の文章中の意味を特定するため、白という言葉を取り巻く周辺語句として概念表象・種類・性質・効果を定義し、それぞれの相関をコレスポンデンス分析を用いて模式化することで傾向を把握し、傾向を重ね合わせることで白の多義性を導出した。

第4章では、第3章と同じく建築家が自身の作品において述べた言語描写の中から透明性に

関する記述を対象とし、建築分野における透明性という概念の多義性に着目した。そこで、透明性という言葉の文章中の意味を特定するため、透明性という言葉を取り巻く周辺語句として主体・度合い・性質・効果を定義し、それぞれの相関をコレスポンド分析を用いて模式化することで傾向を把握し、傾向を重ね合わせることで透明性の多義性を導出した。

第5章では、前章までと同じく建築家が自身の作品において述べた言語描写の中から間に関する記述を対象とし、建築分野における間という概念の多義性に着目した。そこで、間という言葉の文章中の意味を特定するため、間の種類・間を生み出す状況・間が空間に作用する効果に着目した。間を生み出す状況は、間を生み出すふたつの事象の組合せから導出し、間が空間に作用する効果は、効果を受ける対象となる様態と効果が及ぼす作用のふたつの側面の組合せから導出した。そして、間の種類・間を生み出す状況・空間効果のそれぞれの相関をコレスポンド分析を用いて模式化することで傾向を把握し、傾向を重ね合わせることで間の多義性を導出した。

第6章では、3章から5章までで導出した多義性から、表層の次元として「白」、ものの次元として「透明性」、空間の次元として「間」という3つの次元の観点からその総体を把握し、建築における実像と虚像の関係に対する論考をした。

第7章では、各章の流れと結論を総括し、実像と虚像の関係を建築史、日本建築、現代建築、社会のそれぞれの中に位置づけることにより広く論考を展開するとともに、今後の課題と展望を述べた。

目次

1 序論	1
1-1 研究の背景と目的	1
1-2 関連研究	2
2 研究の理論と進め方	7
2-1 研究の理論	7
2-2-1 実像と虚像についての考え方	7
2-2-2 白, 透明性, 間についての考え方	7
2-2-3 多義性についての考え方	7
2-2-4 分析方法についての考え方	8
2-2-5 分析対象についての考え方	8
2-2 研究の構成	9
3 建築物の言語描写における<白>の多義性	13
3-1 分析の背景と目的	13
3-1-1 分析の背景	13
3-1-2 分析の目的	13
3-1-3 既往の研究	14
3-1-4 分析の手順	15
3-1-5 分析対象の選定	16
3-2 用語定義と抽出・分類	17
3-2-1 用語の定義	17
3-2-2 <白>の種類の分類	18
3-2-3 概念表象の分類	18
3-2-4 性質の分類	19
3-2-5 効果の分類	20
3-3 関連の整理	21
3-3-1 <白>の種類と概念表象の相関分析	21
3-3-2 性質と概念表象の相関分析	23
3-3-3 効果と概念表象の相関分析	26
3-4 語義の種類からみる<白>の多義性	29
3-5 小結	39
4 建築物の言語描写における透明性の多義性	43
4-1 分析の背景と目的	43
4-1-1 分析の背景	43
4-1-2 分析の目的	43
4-1-3 既往の研究	44
4-1-4 分析の手順	45
4-1-5 分析対象の選定	46
4-2 用語定義と抽出・分類	47
4-2-1 用語の定義	47
4-2-2 透明性の度合いの分類	48
4-2-3 主体の分類	48
4-2-4 性質の分類	49
4-2-5 効果の分類	50
4-3 関連の整理	51
4-3-1 透明性の主体と度合いの相関分析	51
4-3-2 透明性の主体と性質の相関分析	53

4-3-3 透明性の主体と効果のコレスポネンス分析	55
4-4 語義の種類からみる透明性の多義性	58
4-5 小結	66
5 建築物の言語描写における〈間〉の多義性	69
5-1 分析の背景と目的	69
5-1-1 分析の背景	69
5-1-2 分析の目的	69
5-1-3 既往の研究	70
5-1-4 分析の手順	71
5-1-5 分析対象の選定	72
5-2 用語定義と抽出・分類	73
5-2-1 用語の定義	73
5-2-2 間の種類の分類	74
5-2-3 事物の分類	74
5-2-4 作用の分類	75
5-2-5 様態の分類	75
5-3 間を生み出す状況と空間効果の導出	76
5-3-1 事物と事物の組合せの傾向と相関	76
5-3-2 事物と事物の組合せからみる間を生み出す状況	78
5-3-3 作用と様態の組合せからみる空間効果	79
5-4 相関の整理	84
5-4-1 間の種類と間を生み出す状況のコレスポネンス分析	84
5-4-2 間の種類と空間効果のコレスポネンス分析	87
5-5 語義の種類からみる間の多義性	92
5-6 小結	104
6 建築物の言語描写における多義性からみる実像と虚像	107
6-1 建築物の言語描写における多義性からみる実像と虚像	107
6-1-1 背景と目的	107
6-1-2 白と透明性と間の多義性の比較考察	108
6-2 各水準からみる実像と虚像の関係性	109
6-2-1 媒介となる認識からみる実像と虚像	109
6-2-2 主体と客体からみる実像と虚像	110
6-2-3 無と有からみる実像と虚像	111
6-2-4 虚像の発生プロセスからみる実像と虚像	112
6-2-5 虚像の固有性からみる実像と虚像	113
6-3 小結	115
7 結論	119
7-1 各章のまとめ	119
7-2 実像と虚像	122
7-2-1 建築史の中での実像と虚像（原始建築から様式建築、モダニズム、ポストモダニズムまで）	122
7-2-2 日本建築における実像と虚像	123
7-2-3 現代の日本建築における白と透明性と間	124
7-2-4 近代以前の秩序形成と神、宗教、妖怪、幽霊	124
7-2-5 グローバリズム社会の到来による前近代土着文化の限界と終焉	125
7-2-6 近代における多義的統合の分化と虚像の解体	125
7-2-7 現代合理主義の脆弱性と新たな虚像	126
7-2-8 多義化する建築、つくると生まれるの間	126
7-3 総括と今後の展望	128
8 謝辞	129
9 付録資料	130

表目次

表 3- 1 年別研究対象数 14

表 3- 2 <白>の種類分類 16

表 3- 3 概念表象分類 17

表 3- 4 性質分類 18

表 3- 5 効果分類 18

表 3- 6 概念表象と<白>の種類クロス集計表 19

表 3- 7 概念表象と性質クロス集計表 22

表 3- 8 概念表象と効果クロス集計表 24

表 3- 9 建築物の言語描写における<白>の多義性 36

表 4- 1 年別研究対象数 44

表 4- 2 透明性の度合い分類 46

表 4- 3 主体分類 46

表 4- 4 性質分類 47

表 4- 5 効果分類 48

表 4- 6 主体と度合いクロス集計表 49

表 4- 7 主体と性質クロス集計表 50

表 4- 8 主体と効果クロス集計表 52

表 4- 9 建築物の言語描写における透明性の多義性 63

表 5- 1 年別研究対象数 70

表 5- 2 間の種類分類 72

表 5- 3 事物分類 72

表 5- 4 作用分類 73

表 5- 5 様態分類 73

表 5- 6 事物と事物クロス集計表 74

表 5- 7 間を生み出す状況 76

表 5- 8 作用と様態クロス集計表 78

表 5- 9 様態と作用の組合せによる空間効果 81

表 5- 1 0 間の種類と間を生み出す状況クロス集計表 82

表 5- 1 1 間の種類と空間効果クロス集計表 86

表 5- 1 2 建築物の言語描写における透明性の多義性 101

表 6- 1 多義性の類型一覧 105

表 6- 2 白, 透明性, 間における差異 109

図目次

図 2- 1 研究の構成	9
図 3- 1 <白>からみる実像と虚像の概念	12
図 3- 2 建築物の言語描写における<白>の流れ	15
図 3- 3 キーコンテキストの抽出例	15
図 3- 4 概念表象と<白>の種類のコレスポネンス分析	20
図 3- 5 概念表象と性質のコレスポネンス分析	23
図 3- 6 概念表象と効果のコレスポネンス分析	25
図 3- 7 概念表象・<白>の種類・性質・効果からみる<白>の多義性	28
図 4- 1 透明性からみる実像と虚像の概念	42
図 4- 2 建築物の言語描写における透明性の流れ	45
図 4- 3 キーコンテキストの抽出例	45
図 4- 4 主体と度合いのコレスポネンス分析	49
図 4- 5 主体と性質のコレスポネンス分析	51
図 4- 6 主体と効果のコレスポネンス分析	54
図 4- 7 主体・度合い・性質・効果からみる透明性の多義性	56
図 5- 1 <間>からみる実像と虚像の概念	68
図 5- 2 建築物の言語描写における<間>の流れ	71
図 5- 3 キーコンテキストの抽出例	72
図 5- 4 事物の組合せ傾向と相関	75
図 5- 5 間の種類と間を生み出す状況のコレスポネンス分析	84
図 5- 6 間の種類と空間効果のコレスポネンス分析	88
図 5- 7 間の種類と間を生み出す状況と空間効果からみる透明性の多義性	90
図 6- 1 白, 透明性, 間の多義性からみる概念図	106

1 序章

1 - 1 研究の背景と目的

本論文は、現代日本の建築家による言説を通して、建築物の言語描写における多義性の側面から実像と虚像の関係を論じたものである。

従来、建築をとらえる観点として、物の性質や空間スケール、空間構成、建築によってつくりだされる光、風、温度などの環境現象などに重きを置くものが多かったが、同じ物、空間、現象でも人の認識、体験、慣習、文化、社会背景などの違いにより、つくりだされる像（印象）、そこから受け取る意味内容は異なる。実体としての建築にとどまらず、その実像がつくりだす虚像まで含めた水準で建築を検討することは重要であると考えられる。

建築家の創作行為の一部としての言説活動に着目し、建築家が物、空間、現象をどのようにとらえ、そこにどのような性質、効果、ストーリー（意味）を創出しようとしてきたかを、多数の建築家の言語描写を相互に比較検討することにより、実像と虚像の関係を明らかにすることを目的とする。

古来、建築家は実体としての建築に、その性質として以上の意味を付与させてきた。宗教建築においては、その宗教がもつ理念、精神性を建築の実体に表象させ、王族、貴族の邸宅では、権威、文化を表象させてきた。それとは逆に、それらを捨象し抽象化することにより民主主義やインターナショナルスタイルを打ちだしモダニズムを誕生させた。また無名化し過ぎたモダニズムへの反発から近未来的なイメージや土着的、歴史的イメージを借用することにより、建築にイメージを付与させてきたポストモダニズム建築にいたっては顕著である。

本論文は虚像を生み出す実像の多義性の観点から、表層の次元として「白」、ものの次元として「透明性」、空間の次元として「間」の3つの次元で捉え、「白」、「透明性」、「間」それぞれにおいて、文章構造を比較考察し多義性を明らかにするとともに、建築における実像と虚像の関係を検証するものであり、建築をとらえる新たな評価軸を示すものである。

1 - 2 関連研究

既往研究との相違点から本研究の位置づけを書く。

設計者や建築家の言説活動に関する研究や、白、透明性、間という多義性で着目している概念に関する研究は、これまでに数多く行われている。本研究の研究対象または分析方法と関連が見られる研究論文を大別し、その傾向を概観する。関連研究論文リストを章末に記す。

【建築家の創作論・設計論】これまで、建築家の創作論・設計論に関する研究としては、奥山信一らによる建築家の言語的活動を建築設計の論理を表現する重要な手段として捉え、建築家の言説を分析することで建築物の創作論・設計論を論じた一連の研究^{1~5)}が挙げられる。これらの研究は、建築家の言語表現において、主題や設計手法といった建築の作り方を読み取ることにより、建築家の住宅観や都市観、そこから生じる設計の論理などを考察している。また、建築家の設計論における建築的思考に関する研究としては、塩崎太伸らによる建築家の設計論の中で思考の対象となる概念に着目し、その概念が用いられる文脈と論理展開における形式を明らかにすることを目的とした一連の研究^{6~9)}が挙げられる。これらの研究は、建築家の言説内で意識的に用いられてきた対概念、幾何図形、空間、スケールという概念に着目し、その文脈の差異や特徴を捉え、論理展開や概念構成との関係を考慮した上で、その概念が用いられた設計論の形式を考察している。さらに、建築家の設計論における設計意図に関する研究として、横山天心らによる現代日本の建築に関する設計論を対象とし、言説内から抽出した設計意図と建築として構築していく手法との関係を分析することで、技術と意匠に対する建築家の思考を明らかにすることを目的とした一連の研究^{10~12)}が挙げられる。これらの研究は、内外の境界面のデザインが重要なオフィスビルの建築ファサード、空間構成から仕上げにまで関わる住宅の構法、公共性や象徴性を表象した巨大空間をもつアトリウムといった技術と意匠が密接に関わる作品を対象として考察している。

【建築家の言説における修辞】これまで、建築家の言説における修辞に関する研究としては、成瀬徳行による建築家の言説の構造的な分析を行うことにより、多彩な内容の言説が如何にして生成されるかを明らかにしようとしたレトリックに関する一連の研究^{13~15)}が挙げられる。これらの研究は、建築家の言説に出現する受動態、自動詞、補助動詞に着目し、多様な内容の言説の構造的な分析を経て、建築家の文章表現・語り口や表現に対する建築家の認識や読み手の印象を考察している。

【言説からみる建築思潮】これまで、言説における建築思潮に関する研究としては、近藤正一らによる大正から昭和の建築家の言説を対象にカテゴライズし、統計的に分析することで、建築思潮の変遷の大筋を捉えることを目的とした研究¹⁶⁾や、夏目欣昇らによる建築批評誌『OPPOSITIONS』を、高い批評性をもち、当時の建築思潮に影響を与えたものと位置づけ、この中の評論において1970年から1980年の建築批評の傾向の一端を明らかにする研究¹⁷⁾や、姜涌らによる、中国の建築雑誌を資料とし、1950年から1970年の近代化の過程における中国の建築思潮について統計的分析と思想の変遷を明らかにすることを目的とした研究^{18,19)}などが挙げ

られる。

【建築と色彩】これまで、建築ファサードにおける色彩に関する研究としては、中山和美らによる多様な色彩で構成されている建築の外観が単一色で形容されることに着目し、建築表面仕上げ材による印象評価実験を通して定性的に分析することにより、建築表面の色彩と等価に扱われる単一色との関係を明らかにすることを目的とした研究²⁰⁾や、その続稿として、同じく中山和美らによる建築表面の色彩計画の単純化と印象評価の関係性に着目し、段階的に単純化した建物や街並の画像を用いた印象評価実験を通して、単純化に伴う印象変化の傾向を明らかにすることを目的とした研究²¹⁾が挙げられる。また、特定の建築家の色彩計画を含む意匠に関する研究として、奥佳弥による G.Th. リートフェルトの初期バンガロー型住宅を対象とし、特徴的な部材の構成法と配色法を考察することにより、G.Th. リートフェルト独自のデザインを決定する構成原理を明らかにすることを目的とした研究²²⁾や、ル・コルビュジェの言説を対象とし、建築作品における色彩理論の変容過程を分析することで、環境概念の変容との関係性を明らかにした研究²³⁾が挙げられる。

【建築と透明性】これまで、ガラスという建築材料の特性や技術的側面から建築物の透明性を論じた研究としては、井上朝雄らによる高透過ガラスと強化ガラスのガラス製品を対象として、素材としての開発経緯、使用制限、再注目の要因について明らかにすることを目的とした研究²⁴⁾、ドンダル・ムラツによるブルーノ・タウトのガラスについての思索を考察することで、ガラス建築の概念を明らかにすることを目的とした研究²⁵⁾が挙げられる。また、特に光が透過する透過性に着目した研究としては、北浦かほるによる物質が透けて見える「透かし」の効果に着目し、格子の見付幅と隙間幅寸法と心理的見え合いの関係が視覚効果や心理効果にどのような影響をもたらすかを明らかにしようとした研究²⁶⁾、小泉隆らによる入射光と障子がもたらす「見えの現象」の実験的評価から、障子面から受ける落ち着き感の要因や作り出し方を探る研究²⁷⁾が挙げられる。

【建築と間】これまで、間と空間に関する研究としては、内藤昌による「間」の概念を通して、わが国の伝統的なモデューラーコーディネーションが、どのような過程をたどって成立したかを検証し、それがいかなる建築理念として発展、変転したかを究明することを目的とした一連の研究²⁸⁾や、柴田晃宏らによる清家清の非住宅作品における柱梁表現が清家清の立面表現における重要な要素の一つと考え、柱と梁のあいだにあたる部分を間と定義し柱梁と間の関係性から清家清の設計手法の一端を明らかにすることを目的とした研究²⁹⁾や、鈴木隆によるパリの中層、高密度市街地における建物および街区の空間構成と間の関係を間の結合の原理として提示し、近代初期のパリの画地分譲地区の中庭型共同住宅の多様な形態構成を明らかにすることを目的とした研究³⁰⁾が挙げられる。また、建築家の言説における時間に関する研究として、水谷友也らによる現代における哲学的な時間の概念に着目し、時間に対する創作の方向性や表現手法を分析し、事例検証を通して時間の概念と表現手法の関係を明らかにすることを目的とした研究³¹⁾や、大嶽陽徳らによる増改築建築の設計論を対象として、時間を認識した根拠と時間のイメージに関する記述の意味内容を分析することで、建築家の時間の概念に関する思考の枠組みを明らかにすることを目的とした研究³²⁾が挙げられる。

【建築と多義性】本論文の内容には記載がないが、建築家の言語描写から特定の言葉の多義性

に関する研究の初稿として、北川啓介らによる光の多義性を、光という言葉がもつ形容的側面と作用的側面との相互関係から明らかにすることを目的とした研究³³⁾が挙げられる。

関連研究リスト

【建築家の設計論や創作論を研究した論文】

- 1) 奥山信一，坂本一成：戦後「新建築」誌にみられた建築家の住宅観 建築家の住宅論に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第 428 号，pp.125-135, 1991.10
- 2) 奥山信一，斉藤千尋，坂本一成：戦後「新建築」誌にみられた建築家の都市観 建築家の住宅論・都市論に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第 444 号，pp.49-59, 1993.2
- 3) 奥山信一，持田英明，坂本一成：戦後「新建築」誌にみられた建築家の創作の主題 建築家の創作論に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第 454 号，pp.77-86, 1993.12
- 4) 奥山信一，山田深，坂本一成：建築家の言説にみられる現代住宅作品の空間モデル 建築家の創作論に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第 456 号，pp.123-134, 1994.2
- 5) 奥山信一，坂本一成：戦後「新建築」誌にみられた建築家の創作論 建築家の住宅観・都市観・創作の主題・空間モデル，日本建築学会計画系論文集，第 477 号，pp.101-108, 1995.11
- 6) 塩崎太伸，奥山信一：現代日本の建築家の設計論にみられる対概念 一対照性を利用した建築的思考の文脈と形式に関する研究一，日本建築学会計画系論文集，第 610 号，pp.79-86, 2006.12
- 7) 塩崎太伸，中島俊明，奥山信一：現代日本の建築家の設計論にみられる幾何概念 一幾何図形による建築的思考の文脈と形式に関する研究一，日本建築学会計画系論文集，第 615 号，pp.53-60, 2007.5
- 8) 塩崎太伸，奥山信一：現代日本の建築家の設計論にみられる空間をもちいた創作言語 一空間という語を利用した建築的思考の文脈と形式に関する研究一，日本建築学会計画系論文集，第 633 号，pp.2333-2340, 2008.11
- 9) 塩崎太伸，山本洋一郎，奥山信一：現代日本の建築家の設計論にみられるスケール言語 一スケールに着目した建築的思考の文脈と形式に関する研究一，日本建築学会計画系論文集，第 651 号，pp.1087-1095, 2010.5
- 10) 横山天心，奥山信一：オフィスビルのファサードにおける建築家の設計意図と実現手法 現代日本の建築における技術と意匠の関係に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第 600 号，pp.65-72, 2006.2
- 11) 横山天心，山根美紀，奥山信一：建築家による構法をテーマとした住宅の設計論にみられる設計意図と構築モデル 現代日本の建築における技術と意匠の関係に関する研究（2），日本建築学会計画系論文集，第 610 号，pp.71-77, 2006.12
- 12) 横山天心，遠田博史，奥山信一：アトリウムにおける建築家の設計意図とその領域的拡がり 現代日本の建築における技術と意匠の関係に関する研究（3），日本建築学会計画系論文集，第 621 号，pp.21-28, 2007.11

【建築家の言説における修辭関係を研究した論文】

- 13) 成瀬徳行：建築家の言説における受動態の研究 SD REVIEWに見られる建築家のレトリック（その1），日本建築学会計画系論文集，第 538 号，pp.277-284, 2000.12
- 14) 成瀬徳行：建築家の言説における自動詞の研究 SD REVIEWに見られる建築家のレトリック（その2），日本建築学会計画系論文集，第 553 号，pp.325-332, 2002.3
- 15) 成瀬徳行：建築家の言説における補助動詞の研究 SD REVIEWに見られる建築家のレトリック（その3），日本建築学会計画系論文集，第 577 号，pp.217-224, 2004.3

【言説により建築思潮を研究した論文】

- 16) 近藤正一，村瀬宏典，太田英和，夏目欣昇，若山滋：大正から昭和中期における建築家の言説 キーワードのカテゴリ化による建築思潮の変遷，日本建築学会計画系論文集，第 578 号，pp.207-212, 2004.4
- 17) 夏目欣昇，萬川直壯，若山滋：建築批評誌『OPPOSITIONS』の批評対象，日本建築学会計画系論文集，第 624 号，pp.487-494, 2008.2
- 18) 姜涌，近藤正一，北川啓介，若山滋：1950 年～1970 年代の中国における建築雑誌に現れる建築思想の変遷 中国建築の近代化過程における建築家の言説に関する研究 その2，日本建築学会計画系論文集，第 525 号，pp.319-326, 1999.11
- 19) 姜涌，近藤正一，北川啓介，張健，若山滋：1950 年～1970 年代の中国における建築雑誌に現れる建築用語の統計的分析 中国建築の近代化過程における建築家の言説に関する研究 その1，日本建築学会計画系論文集，第 516 号，pp.273-280, 1999.2

【建築と色彩の関係を研究した論文】

- 20) 中山和美, 佐藤仁人, 白神健三, 山本早里, 乾正雄: 多色で構成される建築表面の色の見え方に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第 544 号, pp.1-7, 2001.6
- 21) 中山和美, 山本早里, 佐藤仁人, 乾正雄: 建築ファサード色彩の単純化に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第 565 号, pp.9-16, 2003.3
- 22) 奥佳弥: G.Th. リートフェルトの初期バンガロー型住宅の意匠に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第 457 号, pp.253-260, 1994.3
- 23) 千代章一郎, 鈴木基紘: ル・コルビュジエの建築色彩理論と環境概念, 日本建築学会計画系論文集, 第 582 号, pp.185-191, 2004.8

【建築と透明性の関係を研究した論文】

- 24) 井上朝雄, 松村秀一: 高透過ガラスおよび強化ガラスの開発と日本における建築への適用の史的経緯に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第 575 号, pp.55-60, 2004.1
- 25) ドンダール・ムラツ: ブルーノ・タウトの思索における「ガラス建築」の意図, 日本建築学会計画系論文集, 第 596 号, pp.199-205, 2005.10
- 26) 北浦かほる: 透かしにおける 2 つの視覚タイプ 透かしの視覚的心理効果の研究 (その 1), 日本建築学会計画系論文集, 第 470 号, pp.105-110, 1995.4
- 27) 小泉隆, 藤井俊洋, 鈴木信宏: 入射光の性質からみた落ち着きをもたらす透過光障子面のイメージと連結感及びその作り出し手法, 日本建築学会計画系論文集, 第 457 号, pp.117-123, 1994.3

【建築と間の関係を研究した論文】

- 28) 内藤昌: 「間」に関する一連の研究, 日建築雑誌, 第 91 集, 第 1111 号, pp.659-661, 1976.8
- 29) 柴田晃宏, 芳本晃大朗, 府中拓也, 是永美樹: 清家清の非住宅作品における柱梁表現と間の関係からみた立面表現, 日本建築学会計画系論文集, 第 630 号, pp.1833-1838, 2008.8
- 30) 鈴木隆: 「間の結合の原理」による建物および街区の空間構成 十九世紀前半のパリの中層・高密度市街地の成立に関する都市計画的な研究 (1), 日本建築学会論文報告集, 第 342 号, pp.83-93, 1984.8
- 31) 水谷友也, 末包伸吾: 現代建築における時間の概念とその表現手法に関する研究 —1990 年代以降の美術館・博物館・劇場の事例分析を通して—, 日本建築学近畿支部研究報告集. 計画系, 第 49 号, pp.801-804, 2009.5
- 32) 大嶽陽徳, 奥山信一, 塩崎太伸, 稲用隆一, 四ヶ所高志: 現代日本の建築家による増改築建築の設計論にみられる〈時間〉の認識, 日本建築学会大会学術講演梗概集. F-2, pp.715-716, 2010.7

【建築物の言語描写における言葉の多義性を研究した論文】

- 33) 北川啓介, 内藤拓也, 寺田享平: 建築物の言語描写における光の多義性, 日本建築学会計画系論文集, 第 680 号, pp.2345-2353, 2012.10

2 研究の理論と進め方

2 - 1 研究の理論

2 - 1 - 1 実像と虚像についての考え方

もの、こと、現象、空間などが本来それ自体にもち備えている物理的性質を実像と定義し、そこに人の認識、体験や置かれている状況、慣習、歴史、文化などの社会的背景が介在することにより実像を超えて、派生し、つくりだされる像を虚像と定義する。つまり、実像は唯一絶対的な存在であるのに対して、虚像は人、状況、コンテキストにより変化し揺れ動く像の総体であるといえる。

例えば、ディズニーランドなどのテーマパークについて考えてみると、ひとたびその空間に立ち入れば、アニメーションのストーリーが浮かび上がり、現実とは違う、もうひとつのファンタジーの世界に誘ってくれる。これは実像としての建築、街並みがアニメの世界観を表象することにより、ファンタジックな虚像をつくりだし、訪れた人々にその世界観を体験させ楽しませることになる。建築による実像と虚像の関係を積極的に用いた最もポピュラーな例だといえるであろう。

上記は実像と虚像の関係を意図的に用いた例ではあるが、日常生活において考えてみると、日本人には馴染のある畳は、どこか懐かしさとともに、温かさ、肌合いのよさ、優しさ、家族の団欒を表象したり、日本らしさや、そこで生活により積み重ねられてきた時間などのイメージを喚起させてくれるが、畳に対して馴染のない外国の人がそれを見れば、藁で編まれた質素な床に見えるかもしれない、もっといえば床としてすら認識しないかもしれない。これは慣習、文化が実像とあいまってつくりだされる虚像といえるであろう。

普段なにげなく生活している身の回りのひとつひとつのもの、ことに揺れ動く固有のストーリーが付随しており、建築はそういった虚像の組み合わせの総体として立ち上がっているといえる。

人々が日本の歴史的な町、海のある町、山のある町や、海外の様々な国々を旅して歩くとき、建築、都市がその風土、歴史的背景とともに実像を超えてつくりだす虚像の世界、ストーリーを楽しむことになるのである。

建築は単なる素材の集合体というのではなく、そうやって建築は実像としてのものの意味を超えて、虚像を獲得することにより社会の中、歴史の中で役割を果たしてきたのである。

2 - 1 - 2 白，透明性，間についての考え方

実像と虚像のあいだには，人の認識，体験や置かれている状況，慣習，歴史，文化などの社会的背景などの変数が入り込むための余地のようなものが必要となる。つまり，実像と虚像の関係を考えるとき，その間には両者の関係をつなぐ抽象という概念が必要となると考える。抽象という観点から本稿では，表層の次元として＜白＞，ものの次元として＜透明性＞，空間の次元として＜間＞の3つの次元を設定し，表層，もの，空間のそれぞれの次元から実像と虚像の関係を考察する。実像に＜白＞，＜透明性＞，＜間＞が介在することにより多様な解釈の挙動，多義性が生まれ，虚像をつくりだすと考え。

＜白＞は，表層の次元において抽象性を示す概念である。ものの表層からその色彩を捨象することにより素材感を抽象化し，形態だけを浮かび上がらせる。色彩や光，自然，建築部位などの周囲に存在する実像と関係を結び，揺れ動く多義が生まれ，虚像をつくりだす。＜白＞は近代において，それまでの色彩，彫刻などの装飾に民族性，宗教などの意味をもたせる様式建築に重きをおいてきた建築の世界において，そこから脱却し，インターナショナルスタイルをうちだす際に，最も注目された概念のひとつである。＜白＞がもつ抽象性がそれまでの建築がもつ特化した虚像を捨象し，広く多様な人種，多様な文化の受け皿として求められた。ル・コルビュジェの建築に代表されるように，＜白＞はモダニズムを象徴する概念として定着することとなる。現代でもリチャード・マイヤーをはじめ多くの建築家がその抽象性に魅せられ多様な使われ方がなされ，様々な虚像をつくりだしている。

＜透明性＞はものの次元において抽象性を示す概念である。実体としてのものは存在するが，そこから視覚的存在を捨象することにより，視線の抜け，光の透過，周囲の事象の映り込みを可能にする。視覚的な抽象性を有するがゆえに，周囲に存在する実像と関係を結び，揺れ動く多義が生まれ，虚像をつくりだす。＜透明性＞は，近代に入りガラスの普及とともに広くその概念も浸透する。新しい建築空間の構築に寄与し，建築空間と人，自然などの新たな関係を構築することとなる。ミース・ファン・デル・ローエの建築に代表されるように，＜白＞と同様に＜透明性＞は，近代を象徴する概念として定着することとなる。現代でもフィリップ・ジョンソン，SANAAをはじめ多くの建築家がその抽象性に魅せられ多様な使われ方がなされ，様々な虚像をつくりだしている。

＜間＞は空間の次元において抽象性を示す概念である。それ自体には実体としての存在は有さず，それを取り囲む周囲に存在する事象と事象のあいだに存在する場である。つまり，実像と実像の関係のあいだに存在する虚像としての概念である。周囲に存在する実像と実像が関係を結び，揺れ動く多義が生まれ，虚像をつくりだす。＜間＞は，日本に古来から存在する空間をとらえる概念である。

＜白＞，＜透明性＞，＜間＞の多義により揺れ動く虚像の挙動を観察することにより，実像と虚像の関係にせまる。

2 - 1 - 3 多義性についての考え方

建築家の創作活動は、建築物を設計することだけにとどまらず、言説活動もその一部として重要である。ル・コルビュジエの「住宅は住むための機械である」や、ミース・ファン・デル・ローエによる「Less is more.」, 「God is in the detail」などの言葉は有名である。モダニズムという時代を象徴する言葉として、建築界のみならず、社会的にも大きな影響を与えた言語描写である。本研究では、建築家が思考や理念を表明する上で重要な創作活動のひとつであると考えられる言語活動を対象とする。

言語描写には、ただ建築物を叙述的に描写するのみならず、認識や情感などが入り込む叙情的な描写をともしなう。また、叙述的な描写においても、風土、文化などその社会的な背景が合わせて語られることにより、ある一側面、考えが強調されたり、付加的な意味づけが行われたりする。創作された建築物が即物的な実像という側面をもつものに対して、言説活動はその実像に人の認識、体験や置かれている状況、慣習、歴史、文化などの社会的背景を介在させ、揺れ動く虚像をともしなうという側面をもつといえる。

ある言葉が、言語描写の中で語られる際、前後にある様々な言葉との関係の中で固有の意味合いが形成され、その文脈ならではの彩りが与えられ表現される。このように、ある一つの言葉の意味が文章内で他の語句との関わり合いにより形成され、文章毎に変化する性質を「多義性」と定義する。

ここでいう「多義性」は、多様な意味合いの集合体という解釈ができるが、決してそれは、曖昧というものではなく、ひとつひとつは明確な意味合いを有し、それらが文脈の中においてひとつの意味を形成するというものである。そのため英語での訳語としては曖昧を表す ambiguity を用いるのではなく polysemy を用いていることにする。

本研究では、ひとつの言葉で表すことのできる事象や現象が、建築領域において様々な意味を形成することに着目し、建築家の建築物に対する言語描写を通して、そこで語られる〈白〉、

〈透明性〉、〈間〉のそれぞれにおける多義性を分析することにより、実像と虚像の関係にせまる。

2 - 1 - 4 分析対象についての考え方

本研究では、建築家による言語表現が自身の設計思想や設計手法を他者に伝えるための重要な役割を担っているという考えから、建築家による言語表現が建築家の建築的思考を研究する上で有効な対象であると考ええる。そこで、論説や批評、著書など多岐にわたる建築家の言語活動の中から、自身の設計に対する思想が最も表現されていると考えられる、自身の建築作品に対しての作品解説文を扱う。そして、実際の建築空間について描写されている言説として、時代に対して文献の量に偏りがなく、建築家の言説として十分な資料を得ることができる点を考慮して、現代まで継続的に建築作品及びその解説文を掲載している建築専門誌である『新建築』¹⁾を研究資料とする。その上で、3章では白、4章では透明性、5章では間について記述された箇所を抽出し研究している。また、対象期間を1950年代から2000年代とすることでより多くの分析対象を抽出することができ、言葉の多義性としてより一般性をもった知見が得られると考える。

2 - 1 - 5 分析方法についての考え方

人がある事象について言葉により描写する際、複数ある言葉の選択肢の中から取捨選択を行い、文を構成する。また、同じ言葉を用いたとしても、その言葉に込められる意味は様なものとは限らない。これは、人間の言葉の意味形成を行う過程が、精神的活動に基づくためであり、これにより、一つの言葉に対して複数の意味が形成され、言語の多義性が生まれる。これは、設計者が実空間を言語により描写する際も同様であり、設計者の建築物に対する言語描写は、設計者独自の設計思想により、解釈され、意味付けられたものであるといえる。そこで、本研究では、建築家の言語表現を分析する方法として、言葉の取捨選択性と修辞関係に主軸をおいている。そのため、着目する対象となる白、透明性、間についての記述を要素に分解し、分類した上で修辞関係に基づく組合せの相関を把握することで、特定の意味形成の枠組みを導いていくという方法をとっている。

詳細な分析方法については、該当各章において説明する。

2 - 2 研究の構成

本研究は、建築物の言語描写を通して、白、透明性、間の多義性について分析し、多義性から実像と虚像を考察するものであり、以下の7章により構成される。

- 1 章 序論
- 2 章 建築の理論と進め方
- 3 章 建築物の言語描写における〈白〉の多義性
- 4 章 建築物の言語描写における透明性の多義性
- 5 章 建築物の言語描写における〈間〉の多義性
- 6 章 建築物の言語描写における多義性からみる実像と虚像
- 7 章 結論

研究の構図を図 2-1 に示す。

参考文献

- 1) 新建築社：新建築，1951.1-2010.12

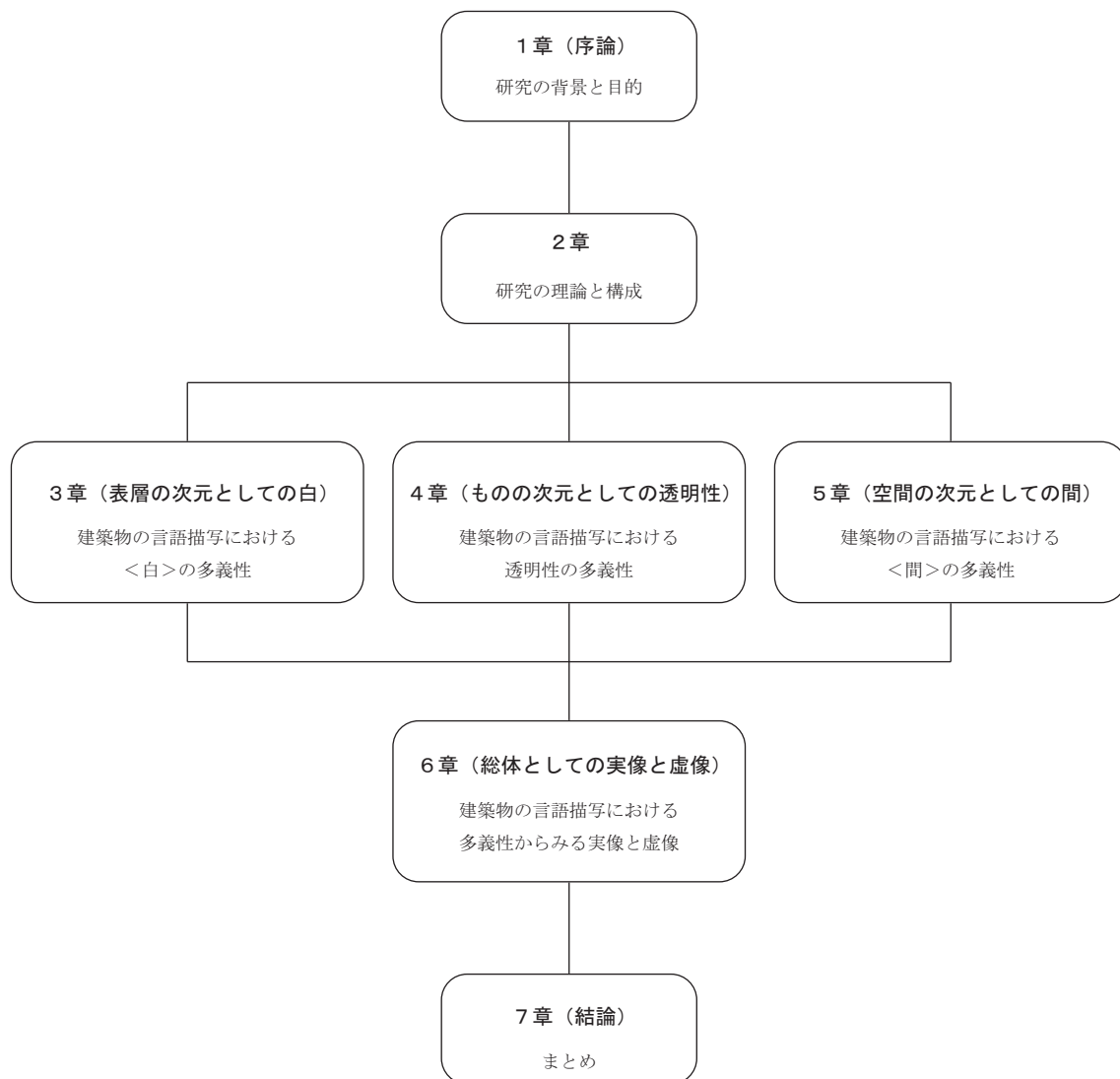


図 2-1 研究の構成

3 建築物の言語描写における ＜白＞の多義性

3 - 1 分析の背景と目的

3 - 1 - 1 分析の背景

色彩は、これまで建築物において装飾的な意味が付与されてきた。そして近代以降、モダニズム建築の理念が普及したことにより、白は機能主義、合理主義の象徴として地域性や民族性を超えた普遍的なデザインとして捉えられてきた。現代の建築家にとっても、白は建築物における構成や形態の合理性や機能性を内在する色彩として認識されている。例えば、空間を白で統一することにより装飾性を排除し、洗練された形態を際立たせる色彩として利用している。また、モダニズム建築の理念により白に付加された合理性や象徴性だけでなく、白という色彩そのものがもつ反射性を活かし、自然光を効果的に取込む白壁として利用していたり、霞や煙のような自然現象において捉えられる白を、幻想的な景観や光や視線の透過性をコントロールするものとして転用したりというように、色彩としての性能や現象としての性能などを巧みに利用し、建築空間を構成している。このように、建築領域において、白は物質の色彩を表現するだけでなく、白さを帯びた事象が様々な性質や効果を空間に及ぼすものとして用いられていることがわかる。つまり、建築家独自の思考、解釈の基に建築空間へと用いられてきた白さを帯びた事象には、その性質や効果の担う役割の差異により、多様な意味が形成されてきたといえる。

3 - 1 - 2 分析の目的

本章では、色彩としての側面だけでなく、現象としての側面や白色という色彩が帯びる象徴性や抽象性を比喩する表現としての側面なども含んで語られる＜白＞という言葉に焦点をあてる。そして、＜白＞という言葉を含む文章から、白さを帯びる事象とその周辺の語句同士の関係性を分析することにより、建築家の様々な解釈の基に生まれた＜白＞の多義性^{注1)}を導出する。そして本稿における成果は、建築家の創作活動の一側面として重要であると考えられる、自身の作品に対する言説活動を通して行われてきた＜白＞と建築空間

に関する思考と解釈の枠組みの一端を明らかにすることにつながると考える。そしてそれは、これまで為されてきた＜白＞に対する建築家の論考を総合的な知見から再評価する上で有効な手掛かりとなると考える。さらに、本研究における＜白＞は、多義性からみる実像と虚像の観点において「表層」の次元を構成するものであり、実像の「表層」において＜白＞が用いられる際に生み出される虚像を明らかにする際の手掛かりとなるものである（図3-1）。そこで本章では、建築家による建築物の言語描写における＜白＞の多義性について明らかにすることを目的とする。

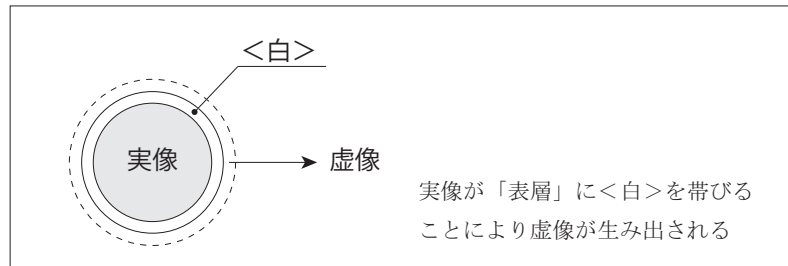


図3-1 <白>からみる実像と虚像の概念

3 - 1 - 3 既往の研究

これまで、建築ファサードにおける色彩に関する研究としては、中山和美らによる多様な色彩で構成されている建築の外観が単一色で形容されることに着目し、建築表面仕上げ材による印象評価実験を通して定性的に分析することにより、建築表面の色彩と等価に扱われる単一色との関係を明らかにすることを目的とした研究¹⁾や、その続稿として、同じく中山和美らによる建築表面の色彩計画の単純化と印象評価の関係性に着目し、段階的に単純化した建物や街並の画像を用いた印象評価実験を通して、単純化に伴う印象変化の傾向を明らかにすることを目的とした研究²⁾が挙げられる。本稿では、建築家の言説を対象として、文章における修辞関係を用いて語句の意味内容を分析することで建築家による思考や解釈の違いにより生じる白のもつ意味の多様さを探ることを目的とする点で異なる立場をとるものである。

次に、特定の建築家の色彩計画を含む意匠に関する研究として、奥佳弥による G. Th. リートフェルトの初期バンガロー型住宅を対象とし、特徴的な部材の構成法と配色法を考察することにより、G. Th. リートフェルト独自のデザインを決定する構成原理を明らかにすることを目的とした研究³⁾や、ル・コルビュジェの言説を対象とし、建築作品における色彩理論の変容過程を分析することで、環境概念の変容との関係性を明らかにした研究⁴⁾が挙げられる。本稿では、特定の建築家の色彩理論を扱うのではなく、複数の建築家の白に対する思考や解釈の違いを扱っている点で異なる立場をとるものである。

さらに、建築家の設計意図に関する研究として、横山天心らによる現代日本の建築に関する設計論を対象とし、言説内から抽出した設計意図と建築として構築していく手法との関係を分析することで、技術と意匠に対する建築家の思考を明らかにすることを目的とし

た一連の研究^{5~7)}が挙げられる。これらの研究は、内外の境界面のデザインが重要なオフィスの建築ファサード、空間構成から仕上げにまで関わる住宅の構法、公共性や象徴性を表象した巨大空間をもつアトリウムといった技術と意匠が密接に関わる作品を対象として考察している。本稿では、建築家の言説を扱う点では既往の研究と同様だが、特定の用途や部分に着目するのではなく、総体的に建築領域の中で語られてきた白に対する建築家の思考の枠組みを探ることを目的としている点で異なる立場をとるものである。

以上より、本稿では、建築家の思考、解釈の差異から生じる白の多義性について明らかにすることを目的としている。そのため建築空間と係わる白についての記述を抽出し、白の概念表象・種類・性質・効果を定義した上で語句同士の相関を分析する。そして、その結果を重ね合わせて語義における類型を導出し、言語描写の中で帯びる白の多義性について追求するものである。

3 - 1 - 4 分析の手順

以下に、本章における分析手順を段階的に示す。

3-1) 本章では、建築物の言語描写における〈白〉の意味の一側面を決定づけるための要素として、〈白〉の種類・概念表象・性質・効果を定義する。

3-2) 1950年から2010年までに建築専門誌『新建築』⁸⁾に掲載された作品解説文の中で、建築空間と係わる〈白〉について記述された箇所を研究対象として選出する。研究対象とした記述のうち、〈白〉の種類・概念表象・性質・効果についての記述が含まれる文章をキーコンテキスト^{注2)}とする。

3-3) キーコンテキストから〈白〉の種類・概念表象・性質・効果に該当する語句を抽出し、カテゴリー分けを行う。カテゴリー分けを行うことにより、日本語の表記における漢字表現、平仮名表現、送り仮名の差異を解消し、建築領域における〈白〉を考察することができる。また、カテゴリー分けの方法については、個人による独断や恣意を避け、妥当な分類基準を設定できるよう、著者を含む複数人による合議制のKJ法^{注3)}を採用するものとする。

3-4) 並列化した語句を統計処理することで、見えにくくなった多数の語句の相互関係を総体的に把握するために、概念表象と〈白〉の種類、概念表象と性質、概念表象と効果において、それぞれコレスポンデンス分析^{注4)}を行い、分類同士の傾向を考察する。

3-5) 3-4) で得られた〈白〉の種類・性質・効果の傾向の組み合わせを基に全ての資料を相互に比較検討しながら意味内容の枠組みを捉え、〈白〉がもつ側面を相対的に位置づけることにより、それらの類型化及び考察を行い結論を導く。

3 - 1 - 5 分析対象の選定

本章では、建築領域における〈白〉の多義性を考察する上で、研究対象を実際の建築空間の言語描写がされている言説とした。これを踏まえた上で、時代に対して文献の量に偏りがなく、建築家の言説として十分な資料を得ることができる点を考慮して、現代まで継続的に建築作品及びその解説文を掲載している建築専門雑誌である『新建築』を研究資料とする。そして、執筆者の作品に対する解説文の文責が明確である1950年から2010年までを対象期間とし、掲載された建築家自身の作品に対する解説文の中で、建築空間と係わる〈白〉について記述された1,586箇所を研究対象とする（表3-1）。なお、本章における〈白〉とは、物質自体やその表面における色を表した色彩としての側面だけでなく、物質や光景の濁り具合や透明性の変化により表象する現象としての側面、及びそれらから派生する副次的な視覚効果や概念としての側面を含むものとして定義するものとする。

表3-1 年別研究対象数

年	対象数	年	対象数
1950～1954	53	1980～1984	196
1955～1959	30	1985～1989	177
1960～1964	33	1990～1994	161
1965～1969	90	1995～1999	203
1970～1974	91	2000～2004	197
1975～1979	133	2005～2009	193
		2010	29
		計	1,586

3 - 2 用語定義と抽出・分類

3 - 2 - 1 用語の定義

建築物の言語描写における＜白＞の意味の一側面を決定づけるための要素として、＜白＞の種類・概念表象・性質・効果を定義する。＜白＞の種類とは、建築家が白さを帯びた事象について記述していることを示す根拠となる語句であり、建築家が認識した白さの純度や他の色との混ざり具合を表す。概念表象とは、主に＜白＞の種類により修飾される名詞が該当する語句であり、建築家が白いと認識する事象や白から連想する事象などを表す。性質とは、主に概念表象を修飾する形容詞や形容動詞が該当する語句であり、白さを帯びた概念表象に内在する役割や状態を表す語句である。効果とは、主に概念表象を修飾する動詞が該当する語句であり、概念表象が白さを帯びることにより引き起こす、または受ける現象や作用を表す語句である。

キーコンテキスト内において、これらの＜白＞の種類・性質・効果が、概念表象と組み合わせることにより、白さを帯びた概念表象の性質により、建築空間や体験する人に対して特別な効果を引き起こすという一連の流れを表現しているため、建築領域における＜白＞の意味の一側面を捉えることができる（図3-2）。そこで、キーコンテキスト内において、＜白＞の種類・性質・効果に該当する語句を抽出し、分類する（図3-3）。

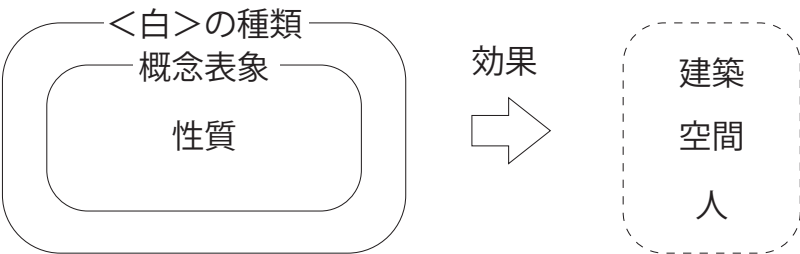


図3-2 建築物の言語描写における＜白＞の流れ

新建築 2008 年 11 月号 p.99 「カタガラスの家」 武井誠+鍋島千恵／TNA ぼんやりとした乳白のスクリーンを外周にまといわせ、内と外を隔てることにした。14の部屋は、その性格に応じて平面の縦横比を調整した4つのスペースに振り分け、天井高を変えながら螺旋状に積み重ねている。							
概念表象		＜白＞の種類		性質		効果	
抽出例	分類	抽出例	分類	抽出例	分類	抽出例	分類
スクリーン	【面】	「乳白の」	{乳白}	「ぼんやり」	[茫漠]	「隔てる」	[分断]

図3-3 キーコンテキストの抽出例

3 - 2 - 2 <白>の種類の分類

<白>の種類は、色彩としての白の濁り度合いや他の色やものとの混ざり具合を指し示す語句である。抽出した<白>の種類を、色彩としての純粋性や不純物の有無に着目して分類を行い、9種のカテゴリーに分類した（表3-2）。<白>の種類を抽出・分類することにより、建築家が建築物について解説する際に、概念表象と共に認識している<白>の状態がわかる。例えば、{白} がもっとも多く抽出できたことから、濁り具合などまでは考慮しないで認識している場合が多いといえる。しかし、{純白} が {白} の次に多く抽出できたことから、白さを強調したい場合などには区別されているといえる。

表3-2 <白>の種類の分類

分類	定義内容説明	記述例	箇数
{白}	特に生成過程のない白	白, 白い	1,356
{純白}	不純物や濁りのない状態の白	純白, 真っ白	92
{乳白}	黄色を帯びた, 透明度や濃淡が変化する白	乳白, 乳白色	60
{青白}	青色を帯びた白	青白, 蒼白い	16
{灰白}	物や景色などの上に生じる透明度の変化する白	灰白い, 白々	15
{淡白}	色彩や印象等をうっすらとさせる白	淡白, 白っぽい	15
{漂白}	色のついた素材などが天日などにさらされた白	漂白された	13
{灰白}	灰色を帯びた白	灰色を帯びた白	12
{白銀}	銀を強調し, ぎらぎらと光沢をもつ白	白銀, 白銀色	7
小計			1,586

3 - 2 - 3 概念表象の分類

概念表象は、<白>を帯びた事象や<白>から連想される事象などを指し示す語句である。語句の意味内容を判断しながら、建築物を構成する要素、空間が示す領域、自然の現象、建築の示す様態、人の理念に着目して大別し、そこからさらに35種のカテゴリーに分類した（表3-3）。概念表象を抽出・分類することにより、建築家が建築物について解説する際に、ある物体や概念の特徴として<白>であることを表現する必要があると判断したことがわかる。例えば、<白>に修飾される概念表象として【素材】がもっとも多く抽出できたことから、天然で白色を帯びている材料を用いることが建築物の特徴になりやすいといえる。そして、建築物の構成要素や空間といった具象的な事象から、光や心象などの抽象的な事象まで様々な事象と共に<白>が認識されているといえる。

表 3-3 概念表象の分類

分類	定義内容説明	記述例	箇数
構成要素	【屋根】	雨露を防ぐために建物の上部にある覆い	屋根 14
	【天井】	室内空間の上限を構成する面	天井 40
	【壁】	建物の外周の部分や部屋同士を仕切るもの	壁 304
	【柱】	材を垂直に立てて建築物の支えとしたもの	柱 20
	【床】	室内空間の下限を構成する面	床 20
	【室】	建築物の中の区切られた単位空間	寝室 19
	【庭】	屋敷内である広さをもって空けてある地面	庭 7
	【植栽】	光合成をする生物	植物 13
	【添景】	空間内に副次的に添えられた物	家具 23
	【設備】	建物に必要な機器など、備えつけられたもの	ルーバー 17
	【構造】	物体の骨格となるものやその組合わせ方	架構 42
	【表層】	表面の層、外壁のテクスチャ	目地 25
	【都市】	建築物群や地域など社会構造の基盤	都市 6
空間	【建築】	居住などの目的に供する空間を構成するもの	住宅 110
	【境界】	事物や領域などを分ける境目	間仕切 16
	【内部空間】	機能に関わらず、建築物の内部	内部空間 106
	【外部空間】	機能に関わらず、建築物の外部	外部空間 17
	【動線空間】	廊下や通路など、移動を目的とした空間	通路 8
	【領域】	テリトリー、事物の力の及ぶ範囲	スペース 12
自然	【気象】	天候や、自然現象など人為を超えた現象	波、霞 31
	【風景】	目に見える広範な景色	海、山 30
	【時間】	時の流れ、時の概念を表現しているもの	夜 8
	【素材】	構築物のもとになる材料や原料	漆喰 323
	【自然光】	人工の光でない光	自然光 16
	【人工光】	人工的な光源から発せられた光	照明 26
様態	【加工材】	材料などに加工する塗料や、塗布剤	塗料 34
	【彩色】	花の色や色彩に関わるもの	色 62
	【線】	二次元として点が連続して細長くのびたもの	輪郭 9
	【面】	二方向に広がりをもつもの	幕 35
	【形態】	生物や構造物などを外から見た形や有り様	立方体 72
	【模様】	ものの表面に装飾として施す図形	パターン 14
	【内部意匠】	室内に施される装飾等の仕上げ	内装 30
	【外部意匠】	建築の外側に施される装飾等の仕上げ	外観 51
理念	【心象】	心の中に描き出されるイメージ	イメージ 14
	【概念】	ある事物の概括的な意味内容や思考形式	記号 12
小計			1,586

3 - 2 - 4 性質の分類

性質は、概念表象に内在する役割や状態からみた＜白＞の一側面を指し示す語句である。抽出した＜白＞の性質を、概念表象に内在する状況や状態、物理的側面や印象的側面を表す句に着目して分類を行い、46 種のカテゴリーに分類した（表 3-4）。性質を抽出・分類することにより、建築家が建築物について解説する際に、＜白＞と認識している概念表象に見出した役割や状態がわかる。例えば、[美醜]が多く抽出できたことから、概念表象そのものの形態的な美しさだけでなく、白であることにより概念表象に性状的な美しさを見出しているといえる。また、[包囲]が多く抽出できたことから、建築や空間を規定する概念表象が白である状態が多いということがわかる。

表 3-4 性質の分類

分類	記述例	箇数	分類	記述例	箇数	分類	記述例	箇数
〔安穩〕	穏やかな	18	〔繊細〕	繊細な	10	〔反射性〕	反射する	53
〔一体的〕	一体となる	74	〔材質〕	タイルの	92	〔美醜〕	美しい	86
〔映写〕	映し出す	35	〔出現〕	現れた	22	〔表象〕	シンボリックな	7
〔縁取〕	切り取る	16	〔新旧〕	新しい	24	〔浮遊〕	浮かんだ	27
〔開放性〕	開放された	16	〔親近感〕	親しみ易い	10	〔包囲〕	囲う	103
〔乖離〕	分断した	21	〔積層〕	重ねられた	29	〔方位〕	西の	11
〔閑静〕	静かな	16	〔増強〕	強い	17	〔茫漠〕	曖昧な	46
〔含有〕	覆う	18	〔想像性〕	想起させる	34	〔明確〕	明らかな	21
〔基調〕	基調とした	63	〔粗滑〕	滑らかな	41	〔明暗〕	明るい	50
〔輝煌〕	輝き	49	〔大小〕	大きい	27	〔抑制〕	抑える	15
〔均質的〕	均質な	33	〔単純〕	単純な	58	〔流動性〕	なびく	25
〔空虚〕	何もない	17	〔適合性〕	呼応し	23	〔量感〕	重い, 厚い	22
〔形状〕	矩形の	84	〔透明性〕	透明な	45	〔冷温〕	暖かい	22
〔広狭〕	広い	10	〔塗布〕	塗られる	84	〔連続性〕	連なる	22
〔硬軟〕	柔らかい	30	〔濃淡〕	濃い	24	小計	1,586	
〔高低〕	高い	12	〔場所〕	日本の	24			

3 - 2 - 5 効果の分類

効果は、概念表象が引き起こす、または受ける現象や作用からみた＜白＞の一側面を指し示す語句である。抽出した＜白＞の効果を、概念表象がもつ性質によって引き起こされる能動的側面や建築計画において操作される＜白＞の受動的側面を表す句に着目して分類を行い、47 種のカテゴリーに分類した（表 3-5）。効果を抽出・分類することにより、建築家が建築物について解説する際に、＜白＞と認識している概念表象により引き起こされると考えている、または概念表に与える現象や作用がわかる。例えば、〔計画〕が多く抽出できたことから、概念表象を効果的に用いるために計画することが多いといえる。また、〔変化〕が多く抽出できたことから、良くも悪くも白さを帯びた概念表象は周辺環境や時間の流れなどによる変化を目立たせることが多いといえる。

表 3-5 効果の分類

分類	記述例	箇数	分類	記述例	箇数	分類	記述例	箇数
〔相反〕	対比する	64	〔向上〕	向上させる	12	〔伝播〕	伝える	12
〔印象〕	印象に残る	85	〔混在〕	混ざる	10	〔投影〕	映る	25
〔演出〕	演出する	32	〔思考〕	考えさせる	58	〔配置〕	配置する	20
〔加工〕	仕上げる	47	〔示唆〕	示す	20	〔表出〕	表出する	49
〔拡張〕	広がる	14	〔視認〕	見せる	44	〔浮上〕	浮かぶ	43
〔獲得〕	確保する	15	〔重合〕	重ね合わす	7	〔付与〕	与える	34
〔感知〕	感じさせる	55	〔充滿〕	満たす	32	〔振舞〕	振舞う	10
〔緩和〕	和らげる	21	〔主張〕	目立つ	63	〔雰囲気〕	気配がする	25
〔強調〕	強調する	53	〔消失〕	消える	29	〔分断〕	遮断する	40
〔具体〕	具現する	19	〔照射〕	照らす	35	〔変化〕	変化する	76
〔経過〕	過ぎる	11	〔浸透〕	滲む	13	〔包括〕	包む	47
〔軽快〕	軽快にする	13	〔創造〕	つくり出す	87	〔保持〕	持たせる	18
〔計画〕	計画する	110	〔存在〕	存在する	18	〔誘引〕	取り込む	44
〔経験〕	経験する	5	〔対応〕	対応する	17	〔利用〕	利用する	9
〔形成〕	形づくる	23	〔抽象〕	曖昧にする	19	〔連続〕	連続する	17
〔交錯〕	行き交う	8	〔調整〕	調える	78	小計	1,586	

3 - 3 相関の整理

3 - 3 - 1 <白>の種類と概念表象のコレスポンドンス分析

概念表象と<白>の種類との相関の傾向を把握するため、コレスポンドンス分析を行う。そのため、概念表象と<白>の種類を抽出し、キーコンテキスト内の組合せを基にクロス集計を行った。その結果、組合せ総数として延べ1,586の組合せを得ることができた。クロス集計の結果からクロス集計表を作成する（表3-6）。

表3-6 概念表象と<白>の種類のコロス集計表

	分類	{白}	{純白}	{乳白}	{青白}	{灰白}	{淡白}	{漂白}	{灰白}	{白銀}	総計
構成要素	【屋根】	14									14
	【天井】	36	2				1		1		40
	【壁】	278	14	7		1	1		2	1	304
	【柱】	18	1			1					20
	【床】	19	1								20
	【室】	16	3								19
	【庭】	5	1				1				7
	【植栽】	10	3								13
	【添景】	21	1					1			23
	【設備】	14	1	2							17
	【構造】	39	3								42
	【表層】	20	3		1		1				25
空間	【都市】	5				1					6
	【建築】	96	10	1	1				1	1	110
	【境界】	13		2					1		16
	【内部空間】	79	19			3	1	2	2		106
	【外部空間】	14	2							1	17
	【動線空間】	5	2			1					8
	【領域】	11	1								12
自然	【気象】	28	1		2						31
	【風景】	21	1	1		4	1	1		1	30
	【時間】	6	1			1					8
	【素材】	261	10	32	4	1	6	5	3	1	323
	【自然光】	14		2							16
	【人工光】	21		1	3	1					26
様態	【加工材】	32			1				1		34
	【彩色】	55	2	1	1		1			2	62
	【線】	7		1			1				9
	【面】	29	1	5							35
	【形態】	66	3	3							72
	【模様】	14									14
	【内部意匠】	26	1			1	1	1			30
	【外部意匠】	45	3	1	1				1		51
理念	【心象】	9	2	1	1			1			14
	【概念】	9			1			2			12
	総計	1,356	92	60	16	15	15	13	12	7	1,586

クロス集計表を基にコレスポンデンス分析を行い、概念表象と〈白〉の種類の関連の強さをグラフ上の距離に転換して模式化することで傾向を整理する^{注5)}。そして、グラフ上に布置されたカテゴリーの位置関係から領域の方向性を定め、グラフの原点から周縁部までのカテゴリーを、原点からの距離に比例して比重を置き、周縁部同士の組合せに重点をおいて解釈した結果、景観の変化を示す〈白〉、空間を融和する〈白〉、事象を抽象化する〈白〉の3つの傾向に整理することができた（図3-4）。

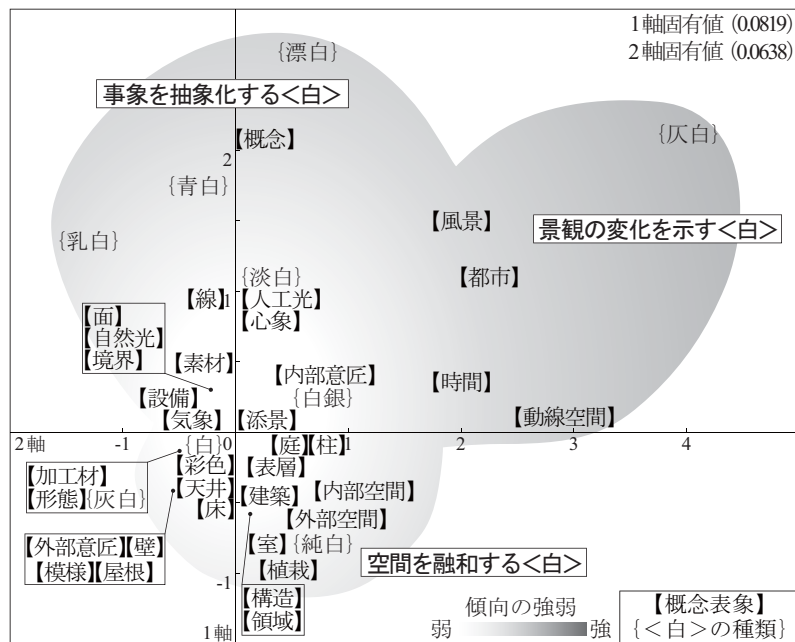


図3-4 概念表象と〈白〉の種類のコレスポンデンス分析散布図

以下にそれらの傾向を構成する要素の組合せについて述べる。

景観の変化を示す〈白〉：{白} は、もっとも抽出することのできた箇数が多く、全ての概念表象と組み合わせる。【風景】、【都市】、【時間】と組み合わせる場合、「砂浜の白さ」^{注6)}などの描写のように、目の前に広がる自然や都市、季節が本来もつ色彩に白のイメージを喚起するかたちで表現されている。また、これらの概念表象は{灰白}、{白銀}とも関連が強く、「夜が白々と」^{注7)}などの描写のように、夜が明けていく様子やうっすらと霧に包まれた景観を白の濃淡や透明性の変化により表現している。つまり、以上の組合せは、景観の変化を示す〈白〉として概念表象を意味付けているといえる。

空間を融和する〈白〉：{純白}、{灰白}、{白} は【壁】、【内部空間】、【建築】などと組み合わせる。これらは、「白一色の室内」^{注8)}などの描写のように、建築や建築を構成する部材、空間を特徴づけるため施された色彩として白を表現している。また、白の純度の違いにより、周囲との協調性や空間の簡潔性を表現している。つまり、以上の組合せは、空間を融和する〈白〉として概念表象を意味付けているといえる。

事象を抽象化する〈白〉：{漂白}、{青白}、{白} は【概念】、【心象】、【素材】などと組み合

わさる。とくに【概念】は、この3種としか組み合わせがみられなかった。これらは、「日産のVIを象徴する白」^{注9)}などの描写のように、記号や理念、素材などがもつ性質を白のもつイメージにより抽象、象徴して表現している。また{乳白},{淡白}も【素材】との関連が強く、さらに【線】,【人工光】,【自然光】などとも組み合わせる。これらも、「乳白色の結晶化ガラス」^{注10)}などの描写のように色彩の濃淡による素材感や光の強弱などを白のイメージにより抽象、象徴して表現している。つまり、以上の組合せは、事象を抽象化する<白>として概念表象を意味付けているといえる。

3-3-2 性質と概念表象のコレスポネンス分析

概念表象と性質の相関の傾向を把握するため、コレスポネンス分析を行う。そのため、概念表象と性質を抽出し、キーコンテキスト内の組合せを基にクロス集計を行った。その結果、組合せ総数として延べ1,586の組合せを得ることができた。クロス集計の結果からクロス集計表を作成する(表3-7)。

クロス集計表を基にコレスポネンス分析を行い、概念表象と性質の関連の強さをグラフ上の距離に転換して模式化することで傾向を整理する。そして、グラフ上に布置されたカテゴリーの位置関係から領域の方向性を定め、グラフの原点から周縁部までのカテゴリーを、原点からの距離に比例して比重を置き、周縁部同士の組合せに重点をおいて解釈した結果、様相の印象を示す<白>、面材の意匠性を示す<白>、状態の非日常性を示す<白>の3つの傾向に整理することができた(図3-5)。

以下にそれらの傾向を構成する上で重要な周縁部の要素同士の組合せについて述べる。

様相の印象を示す<白>:[冷温]は、【人工光】との関連が強く、【彩色】,【内部意匠】などとも組み合わせる。これらは、「白熱灯の暖かい光」^{注11)}、「冷たくなりがちな白い床」^{注12)}などの描写のように、概念表象が実際に放射する熱量だけでなく、概念表象に内在するイメージとしての暖かさや冷たさも表現している。これらの概念表象は、[抑制],[基調],[明暗]とも組み合わせる。これらは、「外装は白を基調とし」^{注13)}などの描写のように、意図した様相を実現するため、概念表象の色調や明度、形態の複雑さなどが制御されている状態を表現している。また、[一体的],[想像性]はこれらの概念表象以外に、【時間】,【模様】とも組み合わせる。これらは、「教会のような白い家」^{注14)}などの描写のように、概念表象の様相と他の事象の様相とを結びつけて表現している。つまり、以上の組合せは、概念表象の様相から受ける印象を表現しているといえる。

状態の非日常性を示す<白>:[閑静]は、【形態】との関連が強く、【内部空間】,【風景】などとも組み合わせる。これらは、「白い寡黙なヴォリューム」^{注15)}などの描写のように、日常の雑音から離れ、静けさに包まれた概念表象の状態を表現している。これらの概念表象は、[出現],[茫漠]とも組み合わせる。これらは、「霧がかかったような白い内部空間」^{注16)}などの描写のように、概念表象が突如現れるような状態や、曖昧で抽象的な状態を表現している。また、[大小],[明確]も【形態】との関連が強く、【外部空間】などとも組み合わせる。これらは、「白く大き

表 3-7 概念表象と

分類	安穩	一体的	映写	縁取	開放性	閉鎖性	含有	基調	輝煌	均質的	空虚	形状	広狭	硬軟	高低	材質	出現	場所	新旧	親近感	積層	繊細	粗滑
【屋根】					1			1				3	1			1							1
【天井】		2	1	2			1	1		1		3		1	1	2							1
【壁】	4	12	9	4	2	1	2	3	6	3	4	21		3	2	31	1	8	10	1	6	2	12
【柱】		1		1	1	1			1			3				3							1
【床】		2	2													9							
【室】		1			1			1			1								1		1		
【庭】						1						2											
【植栽】		2								1		2					1						
【添景】		1	1						2			1				2			1				1
【設備】		2					1	2			1	2				2							
【構造】	1		1	2		1		1				2	1	1		1		1			1	1	3
【表層】			1				1		1		1			1		1					1		
【都市】	1	1	1					1		1		1											
【建築】		8	1		1	2	4	3	5	2	1	4	1	4		5	4	1	4	3			2
【境界】									3			2									2	1	
【内部空間】		9	4	1	1	2	3	11	1	4		2	4	2	4	3	3	1					1
【外部空間】			1						1	1							1	1					1
【動線空間】												2				1							
【領域】		1					2		2			1											
【気象】	1	2				1			1	1		2			1			3		1			
【風景】	2		1		1	1		1	3		1	2					3	2			1		
【時間】		2															1						
【素材】	4	8	6	2	3	1		17	11	8	3	14	3	5	1	14	4	5	5	3	12	4	10
【自然光】	1		1						3	2		1		2								1	
【人工光】	1	1	1					1	2	1				3									
【加工材】		1		2			1	1		1		1		1				1					3
【彩色】	1	8						5	2			1		1		2				1		1	1
【線】									1	1		1		1					1	1			
【面】	1		2						1	1	1	2		2		3					1		2
【形態】	1	2	1	1	1	3	3		2	1	3	6		1	1	3	2				1		
【模様】		2	1	1				1				1									1		1
【内部彫刻】		3			2	1		6		1				2		2							1
【外部彫刻】		3			2	1		6			1	1			2	4	2		1		1		1
【心象】									1	1		1				2					1		
【概念】								1		2						1		1	1				
	18	74	35	16	16	16	18	63	49	33	17	84	10	30	12	92	22	24	24	10	29	10	41

な直方体」^{注17)}などの描写のように、概念表象のスケールや輪郭を強調、調整して表現している。一方で、[流動性]、[浮遊]は、【柱】、【内部空間】、【気象】などとも組み合わせる。これらは、「乳白フィルムで浮遊感を漂わせた空間」^{注18)}などの描写のように、無機物である概念表象から動きや浮遊感などを感じとることや、「白い雲をふわ一つと」^{注19)}などの描写のように、雲や霧などの概念表象の印象的な動きを表現している。つまり、以上の組合せは、概念表象の状態の非日常性を表現しているといえる。

面材としての意匠性を示す<白>:[材質],[量感],[新旧]は、【壁】との関連が強く、【素材】、【添景】などとも組み合わせる。これらは、「大理石貼りの白い床」^{注20)}などの描写のように、概念表象や概念表象を構成する要素が本来もっている物質としての性質を表現している。一方で、[粗滑]、[繊細]、[塗布]なども、【壁】、【素材】など、建築物を構成する要素と組み合わせる。これらは、「白く粗い肌理の内壁に」^{注21)}などの描写のように、概念表象が本来もっている物質としての質感や、「漆喰塗りの白壁」^{注22)}などの描写のように、特徴的な質感を加工により付加した状態を表現している。また、[包囲]、[積層]、[縁取]も【壁】との関連が強く、【構造】、【境界】、【面】などとも組み合わせる。これらは、「白く包囲された空間」^{注23)}などの描写のように、枠をつくる概念表象を操作することにより、規模や構成を規定している状況表現している。つまり、以上の組合せは、建築を構成する概念表象の面材としての意匠性を表現しているといえる。

3-3-3 効果と概念表象のコレスポンド分析

性質のクロス集計表

想像性	増強	大小	単純	適合性	塗布	透視性	濃淡	反射性	美醜	表象	浮遊	包囲	方位	明暗	明確	抑制	流動性	量感	冷温	連続性	乖離	茫漠	総計
1			1		1	1		2	7	1		2		2			1	1				1	14
8	2	8	14	7	17	4	6	12	18	2	3	20	5	8		2		7		4	4	6	304
		1			2	1		2			1	2					3			1			20
			1		1			1	1			2		2	1		1				2	1	19
			1								1	1								1			7
1				1			1		2								1					1	13
			1		4		2		2		1					1					1	2	23
					1			1				2			1					1			17
1		1	2	2	7			1	1			4			1		2	1				2	42
2	2		1	1	1	1			3	1		1	1	1	1	1	1						25
																							6
5	1	4	5		3		1	2	12	1		7	1	1	3		1	3		2	1	2	110
		1			1	2	1	1						1								1	16
1	2	2	6	1	2	3	2	3	1		4	4		9		1	4	1		1		3	106
	1	2			2				1		1			2	1							1	17
1									1		1			2									8
		1	1					1				1							2				12
1	1				1	1		1	1		2	3			1		4					2	31
					1	2		1	1	1		1					1		1	1		2	30
1						1								1				1				1	8
1		1	9	4	18	19	4	10	20	2	5	41	3	6	3	3	3	5	8	7	4	4	323
1						1					1	1		1									16
3			1					2	2			1		2		1			3		1		26
2	3		1	1	5		3	1	4										2				34
3	1		5	3	2	4		2	5					3	1	4	1		1	1	2	1	62
	1											1									1		9
		1	1		4		1	1	1			3		2			1	1		1		2	35
	1	5	3	2	1	4		2	1		3	1		1	4	1	1			1		9	72
1							1		1					2				1					14
1			2						2					2	1	1			1	1		1	30
	1		3		4		1		4			1	1		2			1	1		4	3	51
				1										2	1				2	1		1	14
	1					1		1			1	2											12
34	17	27	58	23	84	45	24	53	86	7	27	103	11	50	21	15	25	22	22	22	21	46	1,586

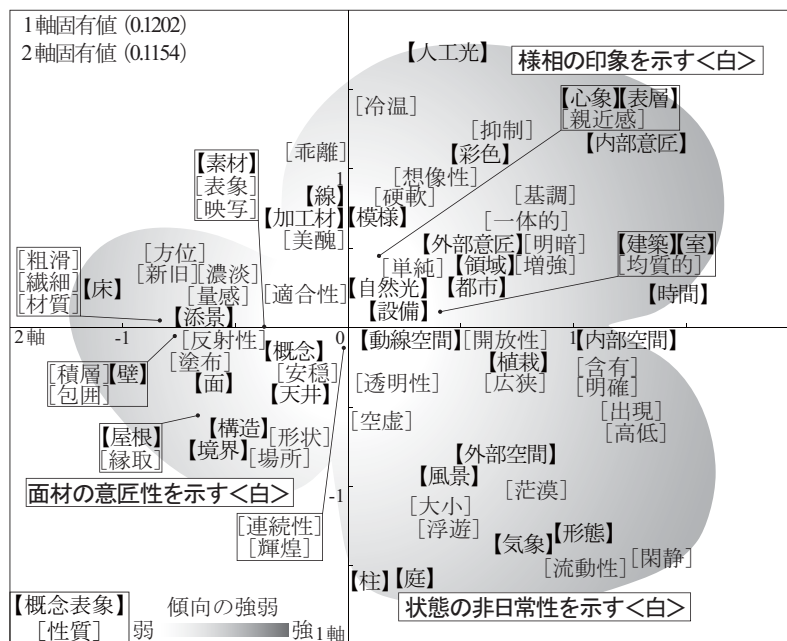


図 3-5 概念表象と性質のコレスポネンス分析散布図

概念表象と効果の相関の傾向を把握するため、コレスポンデンス分析を行う。そのため、概念表象と効果を抽出し、キーコンテキスト内の組合せを基にクロス集計を行った。その結果、組合せ総数として延べ1,586の組合せを得ることができた。クロス集計の結果からクロス集計表を作成する（表3-8）。

クロス集計表を基にコレスポンデンス分析を行い、概念表象と効果の関連の強さをグラフ上の距離に転換して模式化することで傾向を整理する。そして、グラフ上に布置されたカテゴリーの位置関係から領域の方向性を定め、グラフの原点から周縁部までのカテゴリーを、原点からの距離に比例して比重を置き、周縁部同士の組合せに重点をおいて解釈した結果、構想を実現する〈白〉、様態を管理される〈白〉、対照物を調停する〈白〉の3つの傾向に整理することができた（図3-6）。以下にそれらの傾向を構成する上で重要な周縁部の要素同士の組合せについて述べる。

構想を実現する〈白〉:〔形成〕,〔重合〕は【外部意匠】、【構造】などと組み合わせり、〔形成〕

表3-8 概念表象と

分類	印象	演出	加工	拡張	獲得	感知	緩和	強調	具体	形成	経過	経験	計画	軽快	交錯	向上	混在	思考	視認	示唆	主張	充満	重合	消滅
【屋根】			1										1					1			1	1		
【天井】	1	1	5					1					1			1				1	1	2		
【壁】	20	3	8	2	4	10	4	8	3	9	1		22	1	1	3	1	10	9	3	11	6	1	
【柱】	2					1		2		3			1					2						
【床】	1				1		1	1					2			2		1			2	2		
【室】	1		1								1	1	1									1		
【庭】		1				1							2						1		1			
【植栽】		1		1							1		1					3	2					
【添景】	1		2			2							4						1		3			
【設備】	2										1								1		3			
【構造】	2					2	1	2		1			1	1				2	3	2	1		1	
【表層】	3		1			2							2						1		1			
【都市】								1					1											
【建築】	6	2		1	1	8	1	4	2	3	1	1	5	1				6	3	1	10		1	
【境界】	1				1		2							1				1			1		1	
【内部空間】	6	2	4	2		3		3	6	1	3	1	7	1				3	3		4	5		
【外部空間】		1						1					1	1				1	2	1				
【動線空間】	1	1																1			1			
【領域】						1							1							1				
【気象】	1					3		1		1	1		1	1				2	1	1	1			
【風景】	1	2		1		1							2											
【時間】	1	1				1													1					
【素材】	12	7	13	6	4	3	6	10	5	1		1	20	5	6	3	8	11	3	3	11	12	1	
【自然光】	3	1					1	1					1					1				2		
【人工光】	1	1				2	1	1					1	1		1	1	2			1			
【加工材】	2		7		1	1	1	2					3					1			1			
【彩色】	5	1	1			2	2	3			2		10			1		3		1	5			
【線】																					1			
【面】			2	1	1	2		1					3					2			1			
【形態】	4	3				1	4	1	4	2	1		1	8		1	1	4	6	2				
【模様】					1			1		1			1						2		1			
【内部空間】	2		2			2		1		1			4					1	1	1				
【外部空間】	1	1				2		2	1	1			3					1	3	1	1		1	
【心象】	4					2		1										1					1	
【概念】	1	3						2												1			1	
総計	85	32	47	14	15	55	21	53	19	23	11	5	110	13	8	12	10	58	44	20	63	32	7	2

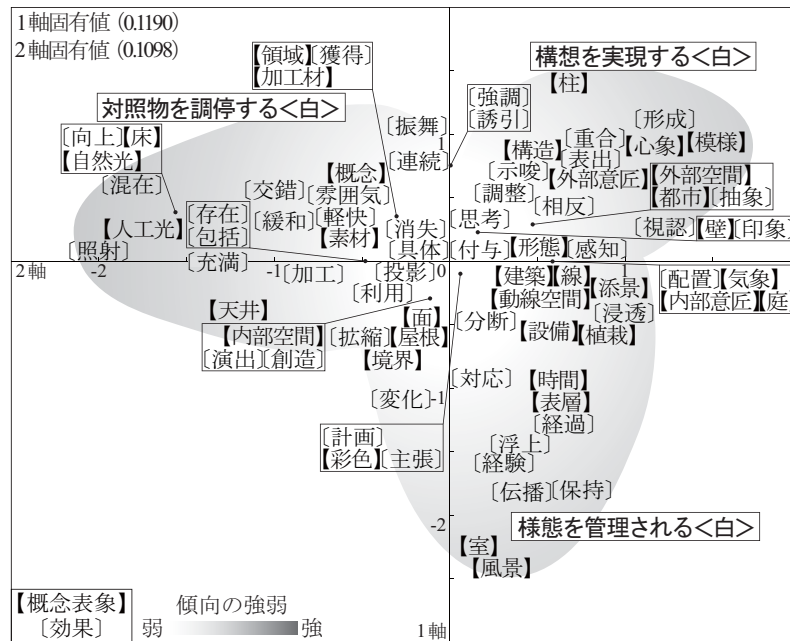


図 3-6 概念表象と効果の相関分析散布図

効果のクロス集計表

失	照明	振舞	浸透	創造	相反	存在	対応	抽象	調整	伝播	投影	配置	表出	付与	浮上	分断	霧気	変化	保持	包括	誘引	利用	連続	総計
			1			1		1	1					1		1		2				1		14
1	5			4	1		1		2		2	1		1	1	1		3	1	1	1			40
2	3	2	5	19	16	3	4	4	18	3	6	2	12	8	7	10	3	11	4	5	12	1	4	304
		1												1	1	1	1			3			1	20
1	2					1			1					1				1						20
1				1		1									2	3		3	2					19
				1									1		1			1						7
				1	3				1			1	1	1	1			1	1					13
																								23
1		1				1			1					2	1			1	1	1				17
3	1	1		1	3			2	2				3	1		1	1	1		1	2			42
			1	2	2		1				1			1	2	1		3	1					25
																								6
	2		1	8	5	2			4	1	2	5	3		5		1	6	1	2	2	2	1	110
				1							1				2	1		2		1				16
4	1		1	8	3	1	2		3	1	1	3	1	2		3	3	6		5	4			106
1				1	1	1						1	1				1	2						17
1						1									1						1			8
											1			1	1	1				4	1			12
2				1				1	1			2	1	2		1		2	1	1	1			31
	1		1	2			1	1		3				1	4			6	2	1				30
															1	1		1		1				8
8	10	4	1	21	11	6	3	4	17	1	5	3	10	5	7	7	6	11	1	11	9	3	8	323
2				1																2	1			16
	5			1										1		1	3	2						26
		1							4		1			2	1			3			1			34
1				3	3		2	1	5					1			1	3	1	3	1	1		62
				1				1	1					1				1	1	1	1			9
	1			1	2				3	1	2				2	1	2	3		2	1	1		35
2	1			3	2	1		1		2		2	4	2	4	1		1		1			2	72
			1						2			1	2			1								14
				6	2		1	1	2						1	2								30
	1		1		7			2	8		1		2	3		1	1	1	1	1	2		1	51
1							1		1				2											14
																				2	1			12
9	35	10	13	87	64	18	17	19	78	12	25	20	49	34	43	40	25	76	18	47	44	9	17	1,586

は【柱】と特に関連が強い。これらは、「白い外観を重ね」^{注24)}などの描写のように、建築形態を特徴づける要素となる概念表象の構成を操作している様子を表現している。また〔誘引〕,〔強調〕,〔示唆〕も上記の概念表象と組み合わせる。これらは、「白い壁は光や影を捉え」^{注25)},「白いマリオンを強調」^{注26)}などの描写のように、内外環境の一体化や装飾を際立たせるなど、概念表象の構成により設計者の意図を建築として具現化している様子を表現している。一方で〔視認〕,〔表出〕は【模様】との関連が強く、上記の概念表象とも組み合わせる。これらは、「パターンを白く表出する」^{注27)}などの描写のように、概念表象の構成だけでなく、概念表象自体の形状により視覚的に意図した状態を実現している様子を表現している。つまり、以上の組合せは、設計者の構想を効果的な概念表象の操作により実現している様子を表現しているといえる。

様態を管理する<白>:〔保持〕,〔浮上〕,〔変化〕は、【風景】と関連が強く、【室】,【表層】とも組み合わせる。これらは、「純白の雪面へと変化する」^{注28)}などの描写のように、目の前に広がる概念表象の状景が自然現象や人工的な操作により維持、変容していく様子を表現している。また,〔伝播〕,〔浸透〕も、【風景】と関連が強く、【表層】,【建築】などとも組み合わせる。これらは、「白く連なる海岸線が五感に働きかけてくる」^{注29)}などの描写のように、目の前に現れる概念表象の存在が見る者の知覚に能動的に働きかける様子を表現している。一方で,〔経験〕,〔経過〕は【室】,【内部空間】などと組み合わせるが、【風景】,【表層】などとは組合せがみられない。これらは、「白い展示室を体感できる」^{注30)}などの描写のように、領域を示す概念表象において経時変化や第三者が体験する様子を表現している。つまり、以上の組合せは、設計者が意識的に概念表象と対峙する状況をつくり出すことで、概念表象の様態を管理している様子を表現しているといえる。

対照物を調停する<白>:〔混在〕,〔雰囲気〕は【人工光】,【素材】などと組み合わせる。これらは、【自然光】との組合せがみられなかったこともあり、「白い左官材の質感と混ざり合う」^{注31)}などの描写のように、取捨選択のできる概念表象を用いることにより、印象や環境を調整している様子を表現している。一方で,〔充満〕は、【自然光】,【素材】などとは組み合わせるが、【人工光】との組合せはみられなかった。これらは、「白い光が充ちている」^{注32)}などの描写のように、概念表象そのものには手を加えず、ありのままの状態です空間を満たすことにより人工的な建築内部を外部に近づける様子を表現している。また,〔照射〕,〔緩和〕は【人工光】,【自然光】ともに組み合わせる,【床】,【天井】などとも組み合わせる。これらは、「白い天井は光を送る」^{注33)}などの描写のように、空間を構成する概念表象や光を表す概念表象を操作することにより、空間の明るさや存在感を調整している様子を表現している。つまり、以上の組合せは、設計者が環境を向上させるため、概念表象により人工物と自然のような対照物の垣根を調停している様子を表現している。

3 - 4 語義の類型からみる〈白〉の多義性

本章では、〈白〉の意味の一側面を決定づける要素として、概念表象、〈白〉の種類、性質、効果を位置づけている。そこで本章では、前章までに検討した概念表象と〈白〉の種類、概念表象と性質、概念表象と効果のcorespondence分析散布図から得られたそれぞれの傾向を重ね合わせ、語義によって多義の類型を導出し、〈白〉の多義性がどのような状況で変化し、決定づけられるかを考察する。そのため、3節2項で得られた概念表象と性質による傾向を横軸、3節3項で得られた概念表象と効果による傾向を縦軸、3節1項で得られた概念表象と〈白〉の種類による傾向を縦軸と横軸によりつくられた枠の中に位置づけた図を作成する。そうして作成した図上に全ての事例の組合せを布置することで、傾向の違いとその強弱を判断の手がかりとして比較考察しながら、原文の記述内容も考慮した上で意味のまとまりの枠組みを捉えていった。その結果、建築物の言語描写における〈白〉の多義性として少なくともA～Tの20の類型が認められた（図3-7）^{注34）}。

効果課題		性質		様相の印象を示すく「白」		面材の意	
対照物を調律する「白」	空間を融和	する「白」	A: 基本の地となるく「白」 【建築】「白」【一体的】【創造】1 【色彩】「白」【一体的】【加工】1 「内部仕上は基本的に白く塗装された石膏ボードの壁と吸音材の天井、そしてタイルカーペットで仕上っている。」 ^(注35)	D: 存在感を緩和する 【壁】「白」【包囲】【緩】 【建築】「白」【包囲】【拡】			
	事実を抽象化	する「白」	B: 色彩を演出するく「白」 【色彩】「白」【一体的】【消失】1 【質感】「白」【質的】【加工】1 【色彩】「白」【一体的】【密着】1 「白とグレーを基調としたニュートラルな空間に仕上っている。」 ^(注36) 【自然光】「白」【質的】【緩和】1 【人工光】「白」【硬軟】【緩和】1 【素材】【淡白】【抑制】【計画】1 【色彩】「白」【質的】【緩和】1 【人工光】「				

図3-7 概念表象・＜白＞の種類

匠性を示す<白>		状態の非日常性を示す<白>				
和1 縮1 射2 満1 射1 工3 画3 張1 錯1 錯1 調1	<白>	H: 重力から解放する<白>	「コンクリート梁下は白く塗装され、コンクリートのマッシブな重量感を抑えている。」 ^{注42)}			
	【構造】〔白〕〔包囲〕〔消失〕2 「白い外壁で包み、できるだけ高さを抑えて、周辺への威圧感を最小限にくだとめている。」 ^{注38)}	【構造】〔白〕〔塗布〕〔軽快〕1 【境界】〔白〕〔塗布〕〔軽快〕1 R: 静穏さをもたらす<白> 【壁】〔白〕〔安穩〕〔交錯〕1 【壁】〔白〕〔包囲〕〔閉塞〕2 【自然】〔白〕〔安穩〕〔包括〕1 【人工】〔白〕〔安穩〕〔付与〕1 【人工】〔青白〕〔反射性〕〔照射〕1 【概念】〔白〕〔包囲〕〔演出〕2	【形態】〔白〕〔閑静〕〔獲得〕1 【建築】〔白〕〔閑静〕〔包括〕1 【建築】〔白〕〔閑静〕〔利用〕1 【柱】〔白〕〔流動性〕〔閉塞〕1 【内部空間】〔純白〕〔流動性〕〔誘引〕1 【素材】〔乳白〕〔浮遊〕〔注目〕1 【風景】〔淡白〕〔出現〕〔拡張〕1 【素材】〔乳白〕〔茫漠〕〔閉塞〕1 【建築】〔青白〕〔茫漠〕〔照射〕1	【天井】〔純白〕〔浮遊〕〔付与〕1 【床】〔純白〕〔浮遊〕〔付与〕1 【庭】〔純白〕〔浮遊〕〔包括〕1 【内部空間】〔白〕〔含有〕〔包括〕1 【天井】〔白〕〔含有〕〔創造〕1 【内部空間】〔純白〕〔浮遊〕〔加工〕1 【素材】〔白〕〔出現〕〔混在〕1 【概念】〔漂白〕〔透明性〕〔誘引〕1 【素材】〔青白〕〔出現〕〔混在〕1	【内部空間】〔白〕〔含有〕〔包括〕1 【天井】〔白〕〔含有〕〔創造〕1 【内部空間】〔純白〕〔浮遊〕〔加工〕1 【素材】〔白〕〔出現〕〔混在〕1 【概念】〔漂白〕〔透明性〕〔誘引〕1 【素材】〔青白〕〔出現〕〔混在〕1	
	J: 輪郭を規定する<白> 【素材】〔白〕〔包囲〕〔創造〕4 【素材】〔白〕〔積層〕〔創造〕3	【素材】〔漂白〕〔材質〕〔交錯〕1 【素材】〔漂白〕〔材質〕〔拡張〕1 【素材】〔白〕〔材質〕〔混在〕1	【素材】〔白〕〔透明性〕〔混在〕1 【素材】〔白〕〔透明性〕〔加工〕1 【素材】〔白〕〔浮遊〕〔強調〕1	【素材】〔白〕〔浮遊〕〔軽快〕1 【素材】〔白〕〔明確〕〔軽快〕1 【素材】〔白〕〔浮遊〕〔創造〕1	【素材】〔乳白〕〔透明性〕〔緩和〕1 【素材】〔白〕〔広狭〕〔誘引〕1	
	象1 整1 引1 知1 係1 与1 まれ 表情	【建築】〔白〕〔包囲〕〔形成〕1 【構造】〔白〕〔縁取〕〔視認〕1 【構造】〔白〕〔塗布〕〔表出〕1 「2棟の白い建築が中庭を介し互いに向かい合い通り沿いの道路の輪郭を維持する。」 ^{注44)}	【壁】〔白〕〔材質〕〔表出〕1 【壁】〔白〕〔塗布〕〔感知〕2 【面】〔白〕〔塗布〕〔感知〕2 P: 機能性を併せ持つ<白> 【壁】〔白〕〔映写〕〔表出〕1 【構造】〔純白〕〔包囲〕〔誘引〕1	【建築】〔白〕〔大小〕〔視認〕1 【形態】〔白〕〔大小〕〔表出〕1 【建築】〔純白〕〔明確〕〔表出〕1 【構造】〔白〕〔茫漠〕〔示唆〕1 【構造】〔白〕〔茫漠〕〔抽象〕1 【形態】〔白〕〔茫漠〕〔抽象〕1	T: 無駄のない洗練された<白> 【室】〔純白〕〔茫漠〕〔印象〕1 【形態】〔白〕〔茫漠〕〔視認〕1 「客室は純白を基調にした抽象度の高い空間で、家具や調度品は必要最小限に抑えられ、…」 ^{注54)}	【気象】〔白〕〔透明性〕〔感知〕1 【気象】〔白〕〔茫漠〕〔表出〕1 【柱】〔白〕〔開放性〕〔形成〕1 【内部空間】〔白〕〔開放性〕〔形成〕1
出1 っば れぞ	L: 質感を醸し出す<白> 【素材】〔白〕〔材質〕〔表出〕1 「凝灰岩が、長い年月間、れ表情を表している。」 ^{注46)}	【建築】〔白〕〔包囲〕〔思考〕1 【壁】〔灰白〕〔包囲〕〔表出〕1 【壁】〔白〕〔粗滑〕〔表出〕1 【素材】〔白〕〔包囲〕〔思考〕3 【心象】〔漂白〕〔積層〕〔表出〕1 【心象】〔白〕〔適合性〕〔示唆〕1	【形態】〔白〕〔閑静〕〔強調〕1 【柱】〔白〕〔透明性〕〔思考〕1 【庭】〔白〕〔閑静〕〔演出〕1	【形態】〔白〕〔流動性〕〔印象〕1 【柱】〔白〕〔流動性〕〔振舞〕1 【柱】〔白〕〔流動性〕〔印象〕1	「ロゴサインは背後の白い壁面にシルエットとして映し出される。」 ^{注50)}	【構造】〔白〕〔流動性〕〔示唆〕1 【形態】〔純白〕〔明確〕〔強調〕1 【形態】〔白〕〔含有〕〔演出〕1
	【壁】〔白〕〔連続性〕〔分断〕1 【壁】〔白〕〔縁取〕〔変化〕1 【構造】〔白〕〔塗布〕〔分断〕1	【形態】〔白〕〔映写〕〔浮上〕1 【壁】〔白〕〔美麗〕〔浮上〕1 【境界】〔白〕〔離隔〕〔浮上〕1	【形態】〔純白〕〔浮遊〕〔計画〕1 【壁】〔白〕〔大小〕〔浮上〕1 【壁】〔白〕〔茫漠〕〔浮上〕1	E: 風景を融解する<白> 【風景】〔灰白〕〔透明性〕〔感知〕1 【時間】〔白〕〔透明性〕〔感知〕1 「薄曇りの日は霧のかかったような透明な白さの中に視覚的カタルシスを感じる瞬間さえある。」 ^{注39)}	【風景】〔白〕〔閑静〕〔変化〕1 【風景】〔白〕〔茫漠〕〔包括〕1 【風景】〔白〕〔離隔〕〔対比〕1	
化1 化1	「日没には、白いカンバスが真っ赤に染まり、心奪われる美しさが北欧の冬にはある。」 ^{注45)}	【建築】〔純白〕〔出現〕〔変化〕1 【内部空間】〔白〕〔茫漠〕〔変化〕1 【気象】〔白〕〔流動性〕〔投影〕1	【室】〔白〕〔開放性〕〔変化〕1 【気象】〔白〕〔流動性〕〔投影〕1	【室】〔白〕〔開放性〕〔変化〕1 【気象】〔白〕〔流動性〕〔投影〕1	【室】〔白〕〔開放性〕〔変化〕1 【気象】〔白〕〔流動性〕〔投影〕1	
出1 上1 化1	M: 幻想性を創出す<白> 「乳白色のガラスによって縁取られた景観が、ラウンジの中に非日常的な雰囲気を出す。」 ^{注47)}	【面】〔白〕〔映写〕〔伝播〕1 【植栽】〔白〕〔均質的〕〔経過〕1 【建築】〔純白〕〔新田〕〔注目〕1	【面】〔白〕〔映写〕〔伝播〕1 【植栽】〔白〕〔均質的〕〔経過〕1 【建築】〔純白〕〔新田〕〔注目〕1	【面】〔白〕〔映写〕〔伝播〕1 【植栽】〔白〕〔均質的〕〔経過〕1 【建築】〔純白〕〔新田〕〔注目〕1	【面】〔白〕〔映写〕〔伝播〕1 【植栽】〔白〕〔均質的〕〔経過〕1 【建築】〔純白〕〔新田〕〔注目〕1	
	「空が白々としてくると、鳥が活動を始め、風や光の微妙な動きが辺りの色彩と形を一気に浮き上がらせていく。」 ^{注48)}	N: 時の流れを喚起する<白> 【風景】〔灰白〕〔出現〕〔浮上〕1 【時間】〔白〕〔出現〕〔変化〕1	【風景】〔灰白〕〔出現〕〔浮上〕1 【時間】〔白〕〔出現〕〔変化〕1	【風景】〔灰白〕〔出現〕〔浮上〕1 【時間】〔白〕〔出現〕〔変化〕1	【風景】〔灰白〕〔出現〕〔浮上〕1 【時間】〔白〕〔出現〕〔変化〕1	

様の組合せを表す。また、図中網掛け要素はコレスポンデンス分析散布図において原点付近に布置されたものを示す。分析により得られた傾向とする。

・性質・効果からみる<白>の多義性

以下に、各類型の説明を述べる。

類型 A：基本の地となる＜白＞

この類型は、「白く塗装された石膏ボードの壁」^{注35)}などの描写のように、{白}、{青白}を帯びる【壁】、【天井】などの概念表象が〔塗布〕、〔加工〕などを用いることで建築空間を構成する要素となり、建築の全体や部分を地として色付ける色彩として表現している。また、この類型は、建築の表層に白さを帯びさせる以外に特別な効果や性質をもたらさないため、＜白＞の多義性において最も基本的な＜白＞の意味の一側面であると考えられる。

類型 B：色彩を演出する＜白＞

この類型は、「白とグレーを基調としたニュートラルな空間に仕上げている」^{注36)}などの描写のように、{白}、{灰白}を帯びる【内部空間】、【壁】などの概念表象が〔一体的〕、〔調整〕などを用いることでさまざまな色が氾濫している建築空間において、色調を抑え彩りを演出する様子を表現している。また、上記の描写以外にも{白}、{乳白}を帯びる【素材】などの概念表象が、〔一体的〕、〔加工〕などを用いることで、白により彩られた素材により建築空間を創出している様子を表現している。つまり、この類型における＜白＞は、ただの地として白いわけではなく、建築空間に白という彩りをあたえるものとして意味付けられている。

類型 C：異物を統一する＜白＞

この類型は、「マットな塗料で塗ることにより、なんとか統一感を出すことに成功しました」^{注37)}などの描写のように、{白}、{乳白}を帯びる【加工材】、【外部意匠】などの概念表象が〔一体的〕、〔付与〕などを用いることで形態や質感の違う様々なものを内包する建築空間を統一し、調和している様子を表現している。また、上記の描写以外にも【都市】、{白}、〔一体的〕、〔強調〕などの組合せでは、街や景色が白さを帯びることにより、形態や色彩の複雑さを白が内包し、調和している様子を表現している。さらに、【壁】、{白}、〔適合性〕、〔調整〕などの組合せでは、壁や構造などの建築要素が白さを帯びることにより、床や天井などのその他の建築を構成する要素に適合し、空間全体が調和していく様子を表現している。つまり、この類型における＜白＞は、形態や質感などがまったく違うものに白という共通項を与えることで異物を統一するものとして意味付けられている。

B、Cは非常に類似性の高い類型であるが、＜白＞が統一する対象が色彩のみであればBに該当し、色彩以外のものを統制する場合はCに該当する。

類型 D：存在感を緩和する＜白＞

この類型は、「威圧感を最小限にいとめている」^{注38)}などの描写のように、{白}、{乳白}を帯びる【壁】、【建築】などの概念表象が〔包囲〕、〔緩和〕などを用いることで白い塗装材などにより素材本来の色調などを抑え、周辺の色調などに馴染むことによって存在感を緩和している様子を表現している。また、上記の描写以外にも【構造】、{白}、〔茫漠〕、〔抽象〕などの

組合せでは、建築を構成する骨格となる構造体が白さを帯びることにより、その存在がぼんやりと抽象化され、建築を支える骨格としての強さや存在感を緩和している様子を表現している。つまり、この類型における＜白＞は、物質感や素材感を白により削減することで存在感を緩和するものとして意味付けられている。

類型 E：風景を融解する＜白＞

この類型は、「霧のかかったような透明な白さ」^{注39)}などの描写のように、{白}、{灰白}を帯びる【風景】、【気象】などの概念表象が〔透明感〕、〔感知〕などを用いることで澄んでいた空間に濁りが発生することにより、風景がぼやけてしまう様子を表現している。また、上記の描写以外にも【内部空間】、{灰白}、〔流動性〕、〔具体〕などの組合せでは、建築内部の空間に、霧がかかったような白さを現出させることにより建築の内観をぼやかしている様子を表現している。つまり、この類型における＜白＞は、空間の中に現出した白さが輪郭や色彩を曖昧にぼかし、風景を融解するものとして意味付けられている。

類型 F：周囲を際立たせる＜白＞

この類型は、「内装は白色を基本とし、一部コンクリートブロックをそのまま見せている」^{注40)}などの描写のように、{白}を帯びる【内部意匠】、【外部意匠】などの概念表象が〔基調〕、〔視認〕などを用いることで統一感のある空間をつくりながらも本当に見せたい部分を強調して引き立てている様子を表現している。また、上記の描写以外にも【壁】、{白}、〔塗布〕、〔相反〕などの組合せでは、建築を構成する壁や床などの面材が白さを帯びるよう塗装されることで、周囲に対して背景のような存在となることで他を際立たせている様子を表現している。つまり、この類型における＜白＞は、白さを帯びた事象が自身を主張することなく背景のような役割を果たすことで、周囲を際立たせるものとして意味付けられている。

これらの類型は、B、Cの類型にみられる役割を＜白＞がもつとした上で、さらに広範囲の事象と関連づけることにより成立している類型であると考えられる。

類型 G：建築を顕在化する＜白＞

この類型は、「堅型ルーバーが緑に映えて」^{注41)}などの描写のように、{白}、{純白}を帯びる【設備】、【外部意匠】などの概念表象が〔一体的〕、〔主張〕などを用いることで周囲に広がる色彩豊かな光景とは対照的に無彩色で統一された建築が象徴的に現れる様子を表現している。また、上記の描写以外にも【外部意匠】、{白}、〔単純〕、〔強調〕などの組合せでは、建築外部における装飾を敢えて単純な形態と白でまとめることにより、複雑な形状と豊かな色彩であふれた光景から対比させ顕在化している様子を表現している。さらに、【建築】、{純白}、〔明確〕、〔表出〕などの組合せでは、建築が純度の極めて高い白さを帯びることにより、その存在が風景の中で明確に現れてくる様子を表現している。つまり、この類型における＜白＞は、混じりけのない白さにより他の存在を排除し、白さを帯びた自身の存在を主張することで、建築を顕在化するものとして意味付けられている。

類型 H：重力から解放する＜白＞

この類型は、「重量感を抑えている」^{注42)}などの描写のように、{白}を帯びる【構造】、【境界】などの概念表象が〔塗布〕、〔軽快〕などを用いることで物質としての重さから解放され、周囲の風景から象徴的に浮かび上がる様子を表現している。また、上記の描写以外にも【素材】、{白}、〔浮遊〕、〔軽快〕などの組合せでは、構成要素の元となる素材が白さを帯びることにより、浮遊感を印象づけることにより、素材本来の質量を感じさせない様子を表現している。さらに、【形態】、{白}、〔映写〕、〔浮上〕などの組合せでは、白さを帯びた単純な形態が光に照らし出されることにより、空間のなかに浮き上がって見える様子を表現している。つまり、この類型における＜白＞は、具体的な事象が白さを帯びることにより、様相だけが強調されるため物質としての認識が薄れ、重力から解放するものとして意味付けられている。

このように、＜白＞は、類型 D、F のように自身の存在感を軽減し他者を強調する役割と、類型 G、H のように周囲と対比させることで自身の存在を強調する役割をもつことがわかる。このような違いは類型 I、J にみられるように建築空間と自然空間の境界面でもあらわれている。

類型 I：柔軟な境界となる＜白＞

この類型は、「繋いでいるようで隔てている」^{注43)}などの描写のように、{純白}、{乳白}を帯びる【室】、【壁】などの概念表象が〔包囲〕、〔分断〕などを用いることで視線や光、動線などを隔てる境界の透過性や可変性を柔軟にしている様子を表現している。また、上記の描写以外にも【面】、{白}、〔均質的〕、〔拡張〕などの組合せでは、建築を構成する壁や床などを抽象的に捉えた面を、白によって一様に仕上げることによって、床や壁といった構成要素の境界を曖昧にし、空間に広がりを与える様子を表現している。つまり、この類型における＜白＞は、空間を規定する境界部分に白さが帯びることにより、その境界部分の存在や性質に変化を与え、柔軟な境界となるものとして意味付けられている。

類型 J：輪郭を規定する＜白＞

この類型は、「輪郭を維持する」^{注44)}などの描写のように、{白}、{純白}を帯びる【建築】、【構造】などの概念表象が〔包囲〕、〔形成〕などを用いることで輪郭部分の存在感を強調し、切り取られる建築や風景を象徴的にみせている様子を表現している。また、上記の描写以外にも【壁】、{白}、〔塗布〕、〔分断〕などの組合せでは、空間を規定する壁を、白によって一様に仕上げることによって、空間を仕切る境界としての存在や役割が明確化される様子を表現している。さらに、【素材】、{白}、〔積層〕、〔創造〕などの組合せでは、建築を構成する材料が白さを帯びることにより、その素材を積み上げて創られた建築の輪郭がより鮮明なものとして現れる様子を表現している。つまり、この類型における＜白＞は、物体の外郭を構成する要素に白さが帯びることにより、その境界部分の存在や役割を明確化し、輪郭を規定するものとして意味付けられている。

これらの違いは、＜白＞が帯びる概念表象の素材感や色彩としての光沢感、純度などにより生じると考えられる。

類型 K：様相の変化する＜白＞

この類型は、「白いキャンバスが真っ赤に染まり、心奪われる美しさ」^{注45)}などの描写のように、{白}、{青白}を帯びる【表層】、【壁】などの概念表象が[美醜]、[変化]などを用いることで時間の経過や人為的操作により、＜白＞の純度や濃淡が変化することにより空間や風景の様相が変化していく様子を表現している。また、上記の描写以外にも【建築】、{純白}、[出現]、[変化]などの組合せでは、本来は白さを帯びていなかった建築が、雪や霏などが現れることで、その様相が一変して白く覆われる様子を表現している。つまり、この類型における＜白＞は、ある事象が白さを纏うことにより、その様相が変化し、また白さ自体の純度や濃淡の変化により、その様相が変化するものとして意味付けられている。

類型 L：質感を醸し出す＜白＞

この類型は、「白っぽい凝灰岩が、波に洗われて、それぞれの表情を表す」^{注46)}などの描写のように、{淡白}、{漂白}を帯びる【素材】などの概念表象が[新旧]、[表出]などを用いることで素材や仕上げ材などが持ち合わせる独特の風合いを醸し出す空間を表現している。また、上記の描写以外にも【素材】、{白}、[透明性]、[加工]などの組合せでは、建築を構成する透明性のある材料を加工することにより、白さを帯びた独特の風合いをもった材料とする様子を表現している。さらに【壁】、{白}、[材質]、[表出]などの組合せでは、構成要素の色彩を白にすることにより、構成要素を構成する素材の質感を生かしながら、建築を創出している様子を表現している。つまり、この類型における＜白＞は、白さを帯びた素材や構成要素が、その白さ故に繊細な表情の差異を際立たせることにより、独特の質感を醸し出すものとして意味付けられている。

このように、＜白＞が面を構成する概念表象や表皮における性質や効果を付加する場合、その役割は自然の摂理や設計者の意図によって変化することがわかる。

類型 M：幻想性を創出する＜白＞

この類型は、「乳白色のガラスによって、非日常的な雰囲気演出する」^{注47)}などの描写のように、{乳白}、{青白}を帯びる【素材】、【壁】などの概念表象が[縁取]、[演出]などを用いることで不透明なガラスを介して風景を抽象化し、日常とは違った幻想的な景色に変化させている様子を表現している。また、上記の描写以外にも【風景】、{白}、[茫漠]、[包括]などの組合せでは、目の前に広がる光景を霧や霏のかかったようなぼんやりとした白さが包み込むことにより、全ての事象が曖昧でぼんやりとした世界に包まれたような空間体験の様子を表現している。さらに、【人工光】、{青白}、[反射性]、[照射]などの組合せでは、日常的に接している街灯の光を青白い光にし、その反射性や照らし出す対象を演出することで、非日常的な空間を創出している様子を表現している。つまり、この類型における＜白＞は、普段は見慣れた光景でも白さを帯びた事象を媒介とすることにより、見慣れた光景から一変し幻想性を創出するものとして意味付けられている。

類型 N：時の流れを演出する＜白＞

この類型は、「空が白々としてくると」^{注48)}などの描写のように、{灰白}を帯びる【風景】、【時間】などの概念表象が〔出現〕、〔浮上〕などを用いることで刻々と変化する空の様子と生命の活動から時間の移り変わりを表現している。また、上記の描写以外にも【時間】、{灰白}、[明暗]、[視認]などの組合せでは、夜がだんだんとあけてくる時間帯に対し、その光景が刻々と白々として明るくなってくる様子を表現している。さらに、【建築】、{純白}、[新旧]、[主張]などの組合せでは、まだ真新しく汚れ一つない白さにより、その建築が新しいものであることを示す様子を表現している。つまり、この類型における＜白＞は、風景や建物の様相が時の流れにより、明度や清浄さが変化していく様を白さの変化により捉えることで、時の流れを演出するものとして意味付けられている。

これらは、＜白＞による様相や質感の変化を建築家が繊細に感知し、自身の空間へと転換することで得られた具体的な空間効果を示していることがわかる。

類型 O：光環境を調整する＜白＞

この類型は、「自然光は白い天井面に反射し」^{注49)}などの描写のように、{白}、{純白}を帯びる【天井】、【床】などの概念表象が〔反射性〕、〔照射〕などを用いて光を反射し内部空間へと導くことで、光環境を調整する様子を表現している。また、上記の描写以外にも【人工光】、{白}、[美醜]、〔照射〕などの組合せでは、白色光が対照物を照らし出すことにより、その対照物の美しさを際立たせている様子を表現している。さらに、【素材】、{乳白}、[包囲]、〔照射〕などの組合せでは、白すぎない白さをもつ素材より創られた空間が照らされることで、やんわりと光を拡散、反射している様子を表現している。つまり、この類型における＜白＞は、白さを帯びた構成要素が光を反射・拡散することで最適化した光を内部へと導き、また、光りが白さを帯びることで、照らし出す空間の光環境を調整するものとして意味付けられている。

類型 P：機能性を併せ持つ＜白＞

この類型は、「白い壁面にシルエットとして映し出される」^{注50)}などの描写のように、{白}、{純白}を帯びる【壁】、【構造】などの概念表象が〔映写〕、〔表出〕などを用いることで風景や陰を映し出すスクリーンとしての機能や、[包囲]、〔誘引〕などを用いることで空間を構成する概念表象により人の行動や思考を誘導する機能をもつ様子を表現している。また、上記の描写以外にも【概念】、{漂白}、[透明性]、〔誘引〕などの組合せでは、サイン計画の際に、標識の記号性を解体し、再構築することにより明快で透過性の帯びたものとなり、人々を誘引するものとなった様子を表現している。つまり、この類型における＜白＞は、白さのもつ色彩としての性質や象徴性を他の事象に添加し、機能を転嫁することにより、機能性を併せ持つものとして意味付けられている。

このように、＜白＞はその色彩としての性質や、＜白＞が帯びる象徴性や抽象性を他の事象と関連づけることにより、光の反射や風景の投影などの機能的な役割をもつことがわかる。

類型 Q：清廉な空間をつくる＜白＞

この類型は、「清潔感のある白い」^{注51)}などの描写のように、{白}、{純白}を帯びる【外部意匠】、【模様】などの概念表象が〔美醜〕、〔付与〕などを用いることで空間自体に美しさや明るさなどの印象を付加している様子を表現している。また、上記の描写以外にも【内部空間】、{白}、[明暗]、[変化]などの組合せでは、建築内部の空間が白さを帯びることにより、明るい空間となる様子を表現している。さらに【素材】、{白}、[美醜]、[雰囲気]などの組合せでは、空間を構成する素材が白さを帯びることにより、空間全体の美しさが際立ち清潔な雰囲気を与える様子を表現している。つまり、この類型における＜白＞は、色彩としての白さのもつ清潔さや明るさなどのイメージを空間に転用することで、清廉な空間をつくるものとして意味付けられている。

類型 R：静穏さをもたらす＜白＞

この類型は、「白い陽光に包まれた穏やかな表情」^{注52)}などの描写のように、{白}を帯びる【自然光】、【人工光】などの概念表象が〔安穩〕、〔包括〕などを用いることで暖かさや穏やかさ、静けさなどの印象を空間を認識する人々に与えている様子を表現している。また、上記の描写以外にも【建築】、{白}、[閑静]、[獲得]などの組合せでは、建築自体が白さを帯びることにより、その建築の周りだけ時間が止まっているかのような、どこか静寂につつまれた佇まいとなる様子を表現している。さらに【形態】、{白}、[安穩]、[感知]などの組合せでは、建築の形態と白さが相まって穏やかで柔和な印象をまとっている様子を表現している。つまり、この類型における＜白＞は、色彩としての白さのもつ神聖さから連想される静謐さや穏やかさ、安らかさを空間に転用し認識させることで、静穏さをもたらすものとして意味付けられている。

このように、＜白＞は物質的な機能性だけでなく、人の知覚に訴える感覚的な役割をもつことがわかる。

類型 S：事象を比喩する＜白＞

この類型は、「雪に染まった富士山を連想させる」^{注53)}などの描写のように、{白}、{青白}を帯びる【内部空間】、【建築】などの概念表象が〔基調〕、〔思考〕などを用いることで＜白＞が象徴する事象や印象を比喩する様子を表現している。また、上記の描写以外にも【心象】、{白}、[冷温]、[表出]などの組合せでは、頭の中でイメージしている事象が白さを帯びることにより、冷たさや明るさなどの知覚的なイメージをもった雪や光などの事象とリンクすることで、より具体的なものとなって建築空間に反映される様子を表現している。つまり、この類型における＜白＞は、白さが象徴する様式や事象のもつ性質や役割までを連想させ、建築に付加させることのできる事象を比喩するものとして意味付けられている。

類型 T：無駄のない洗練された＜白＞

この類型は、「純白を基調とした抽象度の高い空間」^{注54)}などの描写のように、{純白}、{白}を帯びる【室】、【形態】などの概念表象が〔茫漠〕、〔印象〕などを用いることでモダニズム建築を彷彿させるような洗練された無駄のない建築の様子を表現している。また、上記の描写以

外にも【構造】，{純白}，[単純]，[強調]などの組合せでは，建築の骨格を担う構造体を，純白で仕上げ，単純な形態にまとめることで，構造体としての役割を明確に示すだけでなく，建築を構成する要素として，その様相の明快さが洗練された印象をもたらす様子を表現している。つまり，この類型における＜白＞は，形態やシステムのにもシンプルにまとめられた事象が白さを帯びることにより，その単純明快さを際立たせる無駄のない洗練されたものとして意味付けられている。

このように，＜白＞が象徴する事象や，＜白＞により空間の抽象度を高めることで，空間に象徴的な意味をもたせる役割をもつことがわかる。

以上，建築物の言語描写における＜白＞の多義性として 20 種の意味の枠組みの類型を捉え，考察することができた（表 3-9）。

表 3-9 建築物の言語描写における＜白＞の多義性

類型	意味付け
類型A	基本の地となる＜白＞
類型B	色彩を演出する＜白＞
類型C	異物を統一する＜白＞
類型D	存在感を緩和する＜白＞
類型E	風景を融解する＜白＞
類型F	周囲を際立たせる＜白＞
類型G	建築を顕在化する＜白＞
類型H	重力から解放する＜白＞
類型I	柔軟な境界となる＜白＞
類型J	輪郭を規定する＜白＞
類型K	様相の変化する＜白＞
類型L	質感を醸し出す＜白＞
類型M	幻想性を創出する＜白＞
類型N	時の流れを喚起する＜白＞
類型O	光環境を調整する＜白＞
類型P	機能性を併せ持つ＜白＞
類型Q	清廉な空間をつくる＜白＞
類型R	静穏さをもたらす＜白＞
類型S	事象を比喩する＜白＞
類型T	無駄のない洗練された＜白＞

3 - 5 小結

本章では、建築家の言語描写における〈白〉の多義性について、概念表象・〈白〉の種類・性質・効果の観点から考察を行った。まず、〈白〉の概念表象と種類のカテゴリーを全体の用法として関連性を考察した結果、種類によって描写される〈白〉は大きく、景観の変化を示す〈白〉、空間を融和する〈白〉、事象を抽象化する〈白〉の3つの傾向に整理することができた。また、〈白〉の概念表象と性質においても同様に、様相の印象を示す〈白〉、状態の非日常性を示す〈白〉、面材の意匠性を示す〈白〉の3つの傾向に整理することができた。さらに、〈白〉の種類と効果においても同様に、構想を実現する〈白〉、様態を管理される〈白〉、対照物を調停する〈白〉の3つの傾向に整理することができた。

これらを踏まえて、概念表象・〈白〉の種類・性質・効果の特徴を重ね合わせることによって考察した結果、建築領域における言語描写としての〈白〉の多義性として少なくとも20種の類型が認められることを明らかにした。これらの〈白〉は、抽象化、象徴といった性質を伴い、それを取り巻く環境、それを捉える認識の中において、ときとして主体となり、ときとして客体となり、光との共鳴、自然との対比、構成物の調和、変化のベースとして振る舞い、異なる事象の関係を構築する多義として表出することが明らかとなった。

注

- 注1) 多義性における一連の研究では、建築家の思考や理念を表明する上で重要な創作活動のひとつであると考えられる言語活動を対象としている。そして、ひとつの言葉で表すことのできる事象や現象が、建築領域において様々な意味を形成することに着目し、2節から3節においてその事象や現象を取り巻く語句同士の関係性を分析している。それにより、時代背景や設計者などの差異を解消し、多様な言語描写を等しく構文論的に分析することができる。その上で4節において原文の記述内容を考慮し事象や現象の解釈の差異を体系化することにより得られる総体的な意味内容の枠組みである多義性は、建築領域において意味論的次元を含む有効な知見になり得ると考える。
- 注2) 本章では、概念表象、〈白〉の種類、性質、効果をキーコンテキストから抽出し、これらの語句の描写内容が示す意味と照らし合わせて結論を導出している。そのため本文中の考察や図中における「」内の記述例では、抽出元となったキーコンテキストを考察内容に合わせて品詞の活用の変換や文字の省略を行い例示しているが、文法上の表現を変えてもこれによる本章の結論に対しての影響はないものとする。
- 注3) カテゴリー分けの手法は、個人の独断や恣意を避けるため、著者を含む複数人による合議制のKJ法を採用するものとする。KJ法は、川喜田次郎によって考案された何らかの問題提起から状況把握、そしてそれに対する解決方法のプロセスまでの一連の方法を指し、記述等の定性情報を分類・整理するのに有効な方法として知られている。ここでいうKJ法とは、ある問題をめぐって問題のありうる情報を集め、定性情報とし、全体像を明確にするまでのプロセスを狭義でのKJ法とする。本章では著者を含む3名によってKJ法を行い、それぞれの判断が分かれるところは、それぞれの判断根拠と資料における判断の是非を議論し、合意が得られた段階で再び全ての資料について再度KJ法による分類を試み、最終的に全ての資料について判断が一致するまで繰り返し行うという方法を取っている（参考文献9）
- 注4) コレスポンデンス分析とは、集計済みのクロス集計結果を使って、行の要素と列の要素を使い、それらの相関関係が最大になるように数値化して行の要素と列の要素を多次元空間（散布図）に視覚化して表現する分析方法を指す。類似度・関係性の強い要素同士は近くに、弱い要素同士は遠くに布置される。ただし、相対的な位置関係であり、絶対的なものではない。このとき、軸がクロスする原点付近に布置される要素は比較的特徴が薄いと解釈できる。なお、原点付近に布置する要素の解釈には注意が必要である。原点付近の行は、原点付近の列に対する組合せの頻度が多いとは限らず、原点を離れた様々な方向に布置されている列に対する組合せの頻度が均衡した結果、原点近くに布置されている場合がある。そのため、原点付近に布置された行・列を積極的に解釈するには、

- 解釈の妥当性を低めることになり得る。(参考文献 10)
- 注 5) 本稿においてコレスポンデンス分析を行った結果、＜白＞の種類と概念表象、性質と概念表象、効果と概念表象のいずれにおいても固有値が既報の論文に比べて低い値となった、これは建築領域において白が既報の対象と比べてより多くの事例を抽出することができたことが起因していると考えられる。さらに、概念表象、性質、効果の分類数も既報の研究と比べて多く、分類同士も多数の分類と組み合わせることも影響していると考えられる。白は既報の対象と比べても意味を形成する語句の種類と修辞関係が複雑であるため、白を帯びる事象とその周辺を取り巻く語句同士の関係性から意味の枠組みを捉えることは意義のあることと考える。
- 注 6) 大谷幸夫・大谷研究室：山口県民文化ホールいわくに・山口県岩国総合庁舎，新建築，p.221，1996.9
- 注 7) 出江寛建築事務所：東京 竹葉亭，新建築，p.209，1990.2
- 注 8) 山崎泰孝環境計画研究所＋SYSTEM・H：ウェディングパーク平安閣，新建築，p.246，1973.12
- 注 9) 竹中工務店：日産自動車穿先行開発センター・モデルオフィス，新建築，p.181，2004.9
- 注 10) 黒川哲郎＋臼田哲男：黒川産婦人科医院，新建築，p.204，1976.8
- 注 11) 早稲田大学徳積研究室：早稲田大学本庄高等学院，新建築，p.202，1984.1
- 注 12) 葉デザイン事務所：光格子の家，新建築，p.221，1981.4
- 注 13) 村田政真建築設計事務所：S 邸，新建築，p.176，1968.1
- 注 14) 稲田建築設計事務所：湘南の家 No.5，新建築，p.167，1965.3
- 注 15) 北川原温建築都市研究所：ARS，新建築，p.102，2002.7
- 注 16) 青木淳建築計画事務所：JIN CO.,LTD.，新建築，p.74，2006.3
- 注 17) 日建設計・東京：海洋文化館，新建築，p.218，1975.9
- 注 18) 板井宝一郎＋セクション R アーキテクト：ローリス，新建築，p.220，1994.2
- 注 19) クニオ・クドー・アソシエイツ：大木町総合福祉センター健康福祉棟，新建築，p.222，1999.3
- 注 20) ASTM 企業連合：芦屋浜高層住宅プロジェクト，新建築，p.149，1979.12
- 注 21) SUPER-OS：西光寺本堂，新建築，p.124，2006.11
- 注 22) 堀口捨巳：三朝温泉旅館後楽，新建築，p.18，1955.6
- 注 23) URBOT：黒の回帰，新建築，p.188，1975.8
- 注 24) 宇野享／CAn：太田の長屋，新建築，p.90，2007.11
- 注 25) 福永建築設計事務所：石川邸，新建築，p.173，1966.4
- 注 26) KAJIMA DESIGN：セガ・エンタープライゼス新本社ビル，新建築，p.216，1994.5
- 注 27) 藤江和子アトリエ：サロン・ド・テ，新建築，p.190，1999.5
- 注 28) 早川邦彦建築研究所：秋田日産コンプレックス ラ・カージュ，新建築，p.190，1999.5
- 注 29) 伊東豊雄建築設計事務所：リラクゼーションパーク・イン・トーレヴィエハ，新建築，p.94，2006.6
- 注 30) 佐藤総合計画：神奈川県立美術館 葉山，新建築，p.168，2004.1
- 注 31) 池田靖史＋日本設計：東北公益文科大学鶴岡タウンキャンパス 大学院棟，新建築，p.191，2007.10
- 注 32) 岡田新一設計事務所：岡山県立美術館，新建築，p.216，1988.7
- 注 33) 村上徹建築設計事務所：坂町のアトリエ，新建築，p.251，1989.4
- 注 34) 本稿における統計の性質上，抽出・分類をする際に同じカテゴリーに分類できるサンプル数が著しく少ないものについては研究対象から除外している。よって，対象期間内の『新建築』に記載されている＜白＞に関する記述の全てが本稿によって得られた 20 の類型に必ずしも当てはまらないものがないとは断定できないため，「少なくとも A ～ T の 20 種の類型が認められた」と表現する。
- 注 35) 磯崎新アトリエ：COSI オハイオ 21 世紀科学工業センター，新建築，p.70，2000.1
- 注 36) 椎名英三建築設計事務所：SCALA GRIGIA，新建築，p.183，1999.2
- 注 37) メゾン マルタン マルジェラ：マルタン マルジェラ アオヤマ，新建築，p.144，2003.11
- 注 38) 竹中工務店：芦屋市環境処理センター，新建築，p.209，1978.6
- 注 39) 長谷川逸子・建築計画工房：すみだ生涯学習センター，新建築，p.97，1995.1
- 注 40) 藤本壮介：聖台病院新病棟，新建築，p.132，1999.12
- 注 41) 吉村順三・奥村昭雄：愛知県立芸術大学，新建築，p.143，1971.6
- 注 42) 青木淳建築設計事務所：G，新建築，p.139，2004.9
- 注 43) 武井誠＋鍋島千恵：カタガラスの家，新建築，p.92，2008.11
- 注 44) クリスチャン・ド・ボルザンバルグ：クリスチャン・ド・ボルザンバルグ棟，新建築，p.352，1991.5
- 注 45) 安藤忠雄＋宮島達男：ICED TIME TUNNEL，新建築，p.90，2004.4
- 注 46) 柳建築設計事務所：堂ヶ島温泉ホテル，新建築，p.138，1965.8
- 注 47) 谷口建築設計研究所：香川県東山魁夷せとうち美術館，新建築，p.88，2006.1
- 注 48) 北川原温建築都市研究所：シーボン 本社，新建築，p.84，2006.3
- 注 49) 香山壽夫建築研究所＋進藤圭介建築研究所：日本基督教団 金沢教会，新建築，p.84，2004.2
- 注 50) 石田敏明＋石田敏明建築設計事務所：小鮎ネーム刺繍店，新建築，p.182，1999.8
- 注 51) 福岡県建築都市部営繕課 安井建築設計事務所：福岡県立大学看護学部，新建築，p.109，2003.6
- 注 52) ワークショップ：4 トルリ，新建築，p.328，1990.7
- 注 53) 大江匡／ブランテック総合計画事務所：Fujiyama Museum，新建築，p.114，2004.1
- 注 54) 伊東豊雄建築設計事務所：HOTEL P，新建築，p.225，1992.9

参考文献

- 1) 中山和美, 佐藤仁人, 白神健三, 山本早里, 乾正雄: 多色で構成される建築表面の色の見え方に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第 544 号, pp.1-7, 2001.6
- 2) 中山和美, 山本早里, 佐藤仁人, 乾正雄: 建築ファサード色彩の単純化に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第 565 号, pp.9-16, 2003.3
- 3) 奥佳弥: G.Th. リートフェルトの初期バンガロー型住宅の意匠に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第 457 号, pp.253-260, 1994.3
- 4) 千代章一郎, 鈴木基紘: ル・コルビュジェの建築色彩理論と環境概念, 日本建築学会計画系論文集, 第 582 号, pp.185-191, 2004.8
- 5) 横山天心, 奥山信一: オフィスビルのファサードにおける建築家の設計意図と実現手法 現代日本の建築における技術と意匠の関係に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第 600 号, pp.65-72, 2006.2
- 6) 横山天心, 山根美紀, 奥山信一: 建築家による構法をテーマとした住宅の設計論にみられる設計意図と構築モデル 現代日本の建築における技術と意匠の関係に関する研究 (2), 日本建築学会計画系論文集, 第 610 号, pp.71-77, 2006.12
- 7) 横山天心, 遠田博史, 奥山信一: アトリウムにおける建築家の設計意図とその領域的拡がり 現代日本の建築における技術と意匠の関係に関する研究 (3), 日本建築学会計画系論文集, 第 621 号, pp.21-28, 2007.11
- 8) 新建築社: 新建築, 1950.1-2010.12
- 9) 川喜田次郎: 発想法, 中央公論社, 1950.1-2011.12
- 10) 内田治: すぐわかる SPSS によるアンケートの相関分析, 東京図書, 1950.1-2011.12

4 建築物の言語描写における 透明性の多義性

4 - 1 分析の背景と目的

4 - 1 - 1 分析の背景

建築家はこれまでに、自らの理念や思想の基に試行錯誤を繰り返しながら建築空間を創造してきたが、その様々な場面で透明性という概念が利用されてきた。例えば、建築内部に光を取り入れる為に、建築家は形態や開口に操作を加えて透明な状態を空間に表出させ、障子などの半透明な膜を利用して色や光による印象を空間に付加してきた。また、上記のような透過性をもつ素材の性格を即物的な透明性とするならば、形態の性格がつくる視覚的な効果としての奥行きを現象的な透明性と定義して、建築領域における透明性の概念を解釈することができる。例えば、コーリン・ロウの著書¹⁾にみられるように、正面から奥行き方向に垂直面の積層の効果暗示することで、観測者と対象物の間に、観測者の認識の中で再構成される虚像をつくりだすといった形態概念を虚の透明性と論じている。さらに、建築家は時として、建築物をとりまく環境や時代性、社会的状況にまで及んで互いの関係を構築しており、そこでは行政の運営状況や情報の公開性などの広義な透明性の概念を意味付けてきた。これは、物理的な透明の性質の比喩として状況や社会性を捉えた概念であり、より抽象的な意味を与えられた透明性の側面として位置づけることができると考える。

4 - 1 - 2 分析の目的

本章では、建築家によって著された建築空間に係わる言語描写の中で、視覚的性質による物理的な側面や現象的な側面だけでなく、それに派生する社会的な側面も含んで語られる透明性を研究対象とする。そして、対象キーコンテクストを分析して建築家の様々な解釈の基に生まれた透明性の多義性を導出する。そして、本章における成果は、これまで為されてきた透明性に対する論考を総合的な見地から再評価する手がかりとして有効であり、さらには、建築領域において透明性が帯びる概念・イメージ形成の枠組みの一端を明らかにすることにつながると思う。そして、それは、建築家が思考し、創作してきた建築空間を読み解き、評価する上で

も重要な指標となると考える。さらに、本章における透明性は、多義性からみる実像と虚像の観点において「もの」の次元を構成するものであり、実像としての「もの」が透明性を有している場合に、透明性が内包している虚像を明らかにする際の手掛かりとなるものである（図4-1）。そこで本稿では、建築家の言説による建築物の言語描写における透明性の多義性について明らかにすることを目的とする。

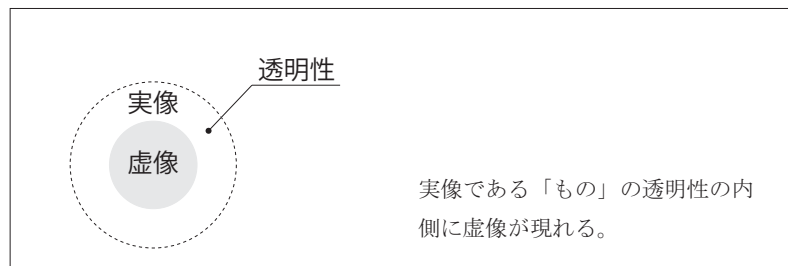


図4-1 透明性からみる実像と虚像の概念

4 - 1 - 3 既往の研究

これまで、建築家の言説における修辞に着目した研究としては、成瀬徳行による建築家の言説の構造的な分析を行うことにより、多彩な内容の言説が如何にして生成されるかを明らかにしようとしたレトリックに関する一連の研究^{2~4)}が挙げられる。これらの研究は、建築家の言説に出現する受動態、自動詞、補助動詞に着目し、多様な内容の言説の構造的な分析を経て、建築家の文章表現・語り口や表現に対する建築家の認識や読み手の印象を考察している。つまり、これらの変換操作は建築家の言説の内部構造として存在し、多彩な言説の生成現象であると位置づけている。本稿では、既往論文と同様に建築家の言説を扱い、言語描写内の透明とそれに係わる特定の修飾表現に着目することで、建築家のレトリックの手法や表現技法といった言説内の内部構造を背景に、建築領域の中で透明が語られることで帯びてきた意味の多様さを探ることを目的とする。

次に、ガラスという建築材料の特性や技術的側面から建築物の透明性を論じた研究としては、井上朝雄らによる高透過ガラスと強化ガラスのガラス製品を対象として、素材としての開発経緯、使用制限、再注目の要因について明らかにすることを目的とした研究⁵⁾、ドンダル・ムラツによるブルーノ・タウトのガラスについての思索を考察することで、ガラス建築の概念を明らかにすることを目的とした研究⁶⁾が挙げられる。本稿における透明性の位置づけは、実空間における素材の性質や物理現象としての透明性のみを捉えているわけではなく、言語描写の中で扱われる透明の解釈として捉えて分析を行っている点で異なる立場をとるものである。

また、特に光が透過する透過性に着目した研究としては、北浦かほるによる物質が透けて見える「透かし」の効果に着目し、格子の見付幅と隙間幅寸法と心理的見え合いの関係が視覚効果や心理効果にどのような影響をもたらすかを明らかにしようとした研究⁷⁾、小泉隆らによる

入射光と障子をもたらす「見えの現象」の実験的評価から、障子面から受ける落ち着き感の要因や作り出し方を探る研究⁸⁾が挙げられる。本稿は、視覚的な現象による透明性の観点のみならず、副次的に派生する比喻としての透明性の観点も含め、心理実験やアンケートといった定量的な分析ではなく、あくまで言語描写による透明の解釈として捉えている点で異なる立場をとるものである。

以上より、本稿では、建築家の言語描写の中で透明性という語がどのように扱われ解釈され、透明性に対する多義性が生み出されてきたのかを明らかにする。そのため、建築空間に係わる透明性についての記述を抽出し、透明性の主体・度合い・性質・効果を定義した上で語句同士の客観的な対応関係を分析する。そして、その結果を重ね合わせて語義における類型を導き出し、空間描写の中で帯びる透明性の多義性を追求するものである。

4 - 1 - 4 分析の手順

本章における分析手順を段階的に示す。

- 4-1) 本章では、建築物の言語描写における透明性の意味の一側面を決定づけるための要素として、透明性の度合い・主体・性質・効果を定義する。
- 4-2) 1950年から2009年までに建築専門誌『新建築』⁹⁾に掲載された作品解説文の中で、建築空間と係わる透明性について記述された箇所を研究対象として選出する。研究対象とした記述のうち、透明性の度合い・主体・性質・効果についての記述が含まれる文章をキーコンテキスト^{注1)}とする。
- 4-3) キーコンテキストから透明性の度合い・主体・性質・効果に該当する語句を抽出し、カテゴリー分けを行う。カテゴリー分けを行うことにより、日本語の表記における漢字表現、平仮名表現、送り仮名の差異を解消し、建築領域における透明性を考察することができる。また、カテゴリー分けの方法については、前章と同様にKJ法^{注2)}を採用するものとする。
- 4-4) 並列化した語句を統計処理することで、見えにくくなった多数の語句の相互関係を総体的に把握するために、主体と透明性の度合い、主体と性質、主体と効果において、それぞれレスポンド分析^{注3)}を行い、分類同士の傾向を考察する。
- 4-5) 4-4) で得られた透明性の度合い・性質・効果の傾向の組み合わせを基に全ての資料を相互に比較検討しながら意味内容の枠組みを捉え、透明性がもつ側面を相対的に位置づけることにより、それらの類型化及び考察を行い結論を導く。

4 - 1 - 5 分析対象の選定

前章と同様に、『新建築』を研究資料とする。そして、執筆者の作品に対する解説文の文責が明確である 1950 年から 2009 年までを対象期間とし、掲載された建築家自身の作品に対する解説文の中で、建築空間と係わる透明性について記述された 602 箇所を研究対象とする(表 4-1)。なお、本章における透明性とは、建築空間に生じる、物質を通してその向こう側が透けて見える状態を表した「物理現象」、物質そのものの濁り度合いや透光性を表した「材質性能」、及びそれらから派生する副次的な視覚効果や比喻として表した「概念効果」全般を指し、透明だけでなく、半透明や不透明な状態も含んだ属性として定義するものとする。

表 4-1 年別研究対象数

年	対象数	年	対象数
1950 ～ 1954	4	1980 ～ 1984	26
1955 ～ 1959	2	1985 ～ 1989	49
1960 ～ 1964	9	1990 ～ 1994	93
1965 ～ 1969	5	1995 ～ 1999	112
1970 ～ 1974	4	2000 ～ 2004	134
1975 ～ 1979	14	2005 ～ 2009	150
		計	602

4 - 2 用語定義と抽出・分類

4 - 2 - 1 用語の定義

建築物の言語描写における透明性の意味の一側面を決定づけるための要素として、透明性の度合い・主体・性質・効果を定義する。透明性の度合いとは、建築家が透明性を有する事象について記述していることを示す根拠となる語句であり、透明性を有する事象の材質としての濁り度合いや透明の現象の視覚的な尺度を表す。主体とは、主に透明性の度合いにより修飾される名詞が該当する語句であり、透明性の状態を具現化している介在物を表す。性質とは、主に主体を修飾する形容詞や形容動詞が該当する語句であり、透明性を有する主体に内在する役割や状態を表す語句である。効果とは、主に主体を修飾する動詞が該当する語句であり、透明性を有した主体によって引き起こされる現象や作用を表す語句である。

キーコンテキスト内において、これらの透明性の度合い・性質・効果が、主体と組み合わせることにより、透明性を有する主体において性質を捉え、建築空間や体験する人に対して特別な効果を引き起こすという一連の流れを表現しているため、建築領域における透明性の意味の一側面を捉えることができる（図4-2）。そこで、キーコンテキスト内において、度合い・主体・性質・効果に該当する語句を抽出し、分類する（図4-3）。

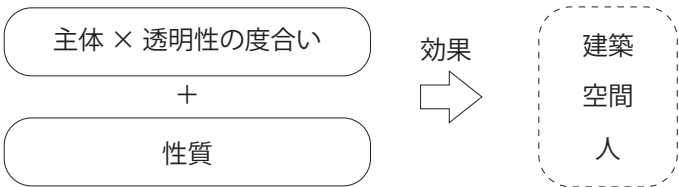


図4-2 建築物の言語描写における透明性の流れ

『新建築』2009年9月号 pp.93 Derek Larm shop/ 妹島和世+西沢立衛	抽出テキスト		分類
	主体	透明性の度合い	
ここでは、内部にショップとショールームのふたつの機能を計画する事が求められ、ショップの中にはドレスのコーナーや靴のコーナー、特別なコレクションのためのコーナーなど、いくつかの場所が求められた。そういった複数の場所をやわらかく分けながらも全体が繋がるように、さまざまなカーブする透明なアクリルのパーテーションを使用した。 晴れた日の午後には、大きな窓から光が差し込み、複数の透明なアクリルのレイヤー上に揺らめく。私たちは、洋服の色合いや外の風景が混ざり合う中で、人びとが楽しみながら、自由に歩きまわるような空気感	パーテーション	透明	【境界】
	透明		〔透明〕
	さまざまなカーブする		〔柔軟〕
	全体が繋がる		〔流動〕

図4-3 キーコンテキストの抽出例

4 - 2 - 2 透明性の度合いの分類

度合いは、主体がもつ材質としての濁り度合いや透明の現象の視覚的な尺度を指し示す語句である。抽出した透明性の度合いを、尺度の違いが明確に判断できる透明、半透明、不透明の3種のカテゴリーに分類した（表4-2）。

表4-2 透明性の度合いの分類

分類	記述例	抽出数
{透明}	構造計画としては、より透明で開放的な架構を目指して、	452
{半透明}	半透明なパネルの下の部分から人の足が見えたり、	123
{不透明}	敏感な経営者であれば、企業の中の不透明な部分にも…	27
小計		602

※下線部は度合いの抽出箇所

※記述例の引用元『新建築』（上から）pp.63,2007.1/pp.162,2007.1/pp.78,2007.1

4 - 2 - 3 主体の分類

主体は、素材、部位、建築などといった透明性の介在物となる語句である。そして、語句自体が意味する内容を判断しながら、介在物そのものが具象的な存在、抽象的な存在、それらの両方の側面を有する存在という観点から透明性の主体を18種のカテゴリーに分類した（表4-3）。

表4-3 主体の分類

分類	定義説明	記述例	抽出数
具象的	【素材】あるものを作るときにそれを構成する元になる材料	ガラス	155
	【装置】機械的な仕掛けを施した機構	スクリーン	18
	【家具】建物に付属して固定されなく動かし得るもの	棚/机	13
	【部位】建築を構成している部分の位置	柱/天井	17
	【建築】居住その他の目的に供する空間を構成する物体	建築物	35
	【開口】建物の屋根、壁、床、天井の一部が開放された部分	窓/扉	23
	【立面】物体を正面や真横からみたもの、建築物の外観	ファサード	6
	【層】ものや部材の表面、またはそれらの重なり	被膜/層	90
両義的	【境界】ものごとの境目	間仕切り	61
	【空間】ものごとの間の何も知覚されない広がり	空間/場	73
	【地域】活動、機能などの一体性によって範囲づけられた土地	地域/都市	14
	【自然】人為が加わっていない状態や現象、環境	空気/光	27
	【構造】各種の空間機能の組み合わせ、そのようにしてできたもの	架構/構成	22
	【視界】人の視覚や空間の状態によって定まる眺めおよび眺めの範囲	眺望/視界	7
	【社会】共有や影響を与えあう人々のまとまり、またその関係	社会/組織	11
抽象的	【関係】物事の間に存在する何らかのかかわり	関係性	8
	【概念】ある事物の概括的な意味内容	概念/考え	15
	【秩序】自然や社会を一貫して支配する原理、法則性	秩序/規則	7
小計			602

4 - 2 - 4 性質の分類

性質は、主体に内在する役割や状態からみた透明性の一側面を指し示す語句である。抽出した透明性の性質を、主体に内在する状況や物理的側面を表す句に着目して分類を行い、26 種のカテゴリーに分類した（表 4-4）。

表 4-4 性質の分類

分類	記述例	抽出数
[可視]	ガラスを通して各住戸の中が一度に見えている。	74
[不可視]	「見えない面(ALCパネル)」が自由に選択できること、	23
[反射]	ガラスらしさは...表面の反射性に負うところが大きい。	22
[映写]	内外が見通せる周辺の歴史的環境や緑を映し込みながら...	21
[透過]	不透明膜の重なりをトップライトからの光が透過する。	69
[分断]	ガスケツガラススクリーンで緩やかに仕切られている...	23
[接続]	建築と公園とを透明なガラスでつなぐという方法...	29
[広がり]	半透明のガラスを通して隣地の外壁まで広がりを持たせた。	14
[重複]	利用者が移動するにつれてストライプの重なりが変化する。	8
[被覆]	空調が必要な人の行動領域のみを透明ガラスで覆い、	27
[滲出]	店舗のにぎわいを街に対して漂み出すような施設にしたい...	23
[流動]	生活がスムーズに流れていくためには、水平面が重要である	19
[開閉]	開放性を持って地域に開かれた場所を形成し...	24
[中立]	「中間領域＝曖昧な領域」の創出に寄与している。	6
[消極]	ガラスという透明な素材が持つ、存在を消す働きに...	13
[呼应]	環境演出によって街と建築が呼应し、親しみのある...	15
[薄手]	半透明な薄膜を導入することで建築の内と外の間を...	10
[明るい]	秋の透明な情景のなかに澄んだ明るさを加え、	20
[色彩]	内側から見ると、半透明で乳白色になっている部分があり、	12
[柔軟]	人工と自然との対比をやわらかく...印象づける。	34
[品格]	あるいは光を含んだ美しい透明感...	13
[漠然]	光が入ってくれば、なんとなく空間全体が曖昧になっていく、	20
[軽い]	ガラスと金属の軽やかで透明感のある表層に...	24
[曖昧さ]	内部を曖昧にしか理解させないフィルター役目を...	7
[明快]	移動可能な透明感のあるわかりやすいガラス展示装置。	20
[単調]	対比調和させることとし透明感のあるシンプルな形状とした、	11
小計		581
その他	結晶性/快適な/溶けて/内と外とが入り混じり/見えないところを隠すetc	

※その他の記述例は、共通の記述が少なく、どの分類にも属さないもの

※下線部は性質の抽出箇所

※記述例の引用元『新建築』（上から）pp.62, 2009.06/pp.130, 2009.02/pp.192,1978.11/pp.179, 2007.05/pp.174, 2009.06/pp.217, 1997.06/pp.187, 1997.06/pp.62, 2009.07/pp.185, 2005.08/pp.211, 1997.07/pp.105, 2007.04/pp.118, 2007.12/pp.62, 2009.06/pp.71, 2007.01/pp.120, 2005.09/pp.203, 2005.08/pp.209, 1986.11/pp.34, 1956.04/pp.162, 2007.06/pp.76, 2003.11/pp.109, 2001.03/pp.154, /pp.54, 2003.08/pp.137, 1999.06/pp.175, 1985.12/pp.195, 2003.05

4 - 2 - 5 効果の分類

効果は、主体によって引き起こされる現象や作用からみた透明性の一側面を指し示す語句である。抽出した透明性の効果を、主体がもつ性質により表出する機能や様相に着目して分類を行い、30 種のカテゴリーに分類した（表 4-5）。

表 4-5 効果の分類

分類	記述例	抽出数
〈浮遊〉	アクリルのかたちは、一切の影を纏うことなく浮かび上がる。	31
〈開放〉	透明性には重量感からの開放というモダニズム建築がもつ...	46
〈公有〉	役所に対する情報公開を含めた透明性、開かれた公共施設...	22
〈私有〉	透明感ある玄関扉の開閉によって、プライベートな庭が...	10
〈一体〉	エッジが鮮明に浮かび上がり、自然との一体空間へと展開し...	15
〈流動〉	不透明な壁をガラスに置換すること...新しい流動性を導入	41
〈地域〉	セラミックプレートを嵌め込み、軽快さと地域性を盛り込...	16
〈明晰〉	空間構成が、そのまま伝わってくるという空間の仕掛けだ。	18
〈錯覚〉	展示室に入るとまるで池上にいるかのような錯覚におそわ...	7
〈奥行き〉	重層して視覚的な奥行きをつくるのに重要な機能を果たす...	8
〈気配〉	フレームが...被膜自体の存在感を浮かび上がらせる。	15
〈曖昧〉	空間の中で存在しているか存在していないか、曖昧な状態...	11
〈関係〉	透明で見通しがよいので...関係性が生まれる。	19
〈風景〉	いくつものレイヤーが重なって見えるような風景である。	48
〈演出〉	バルコニーや雪見障子で内外空間の透明感を演出した。	85
〈光明〉	吊りガラスが...イルミネーションのような輝きを見せて...	14
〈情報〉	情報化社会の中でメディアを創出する接点となり...	22
〈行為〉	ガラスのスクリーンで...立面にアクティビティが表出し、	14
〈象徴〉	...が物理的な透明感によって、それを象徴している。	23
〈調和〉	視覚的つながりを避けながらも...環境になじませる。	24
〈包容〉	店舗を帆のようなテントで包む、いわば梱包作業のような...	19
〈領域〉	透明ガラスでつくることによって...中間領域をつくる	9
〈可変〉	半透明な薄幕の...を仕込み、3種類の空間の変化を可能と...	10
〈対比〉	透明なガラスによって表象し、空間と素材感の対比を強調...	11
〈伝統〉	日本の障子やすだれなどに見る...伝統的な手法の現代化...	8
〈安全〉	透明感を追求すると共にコストダウンと安全性の確保を考...	9
〈懐疑〉	元来の不透明な業界体質に対する社会の不信感が...	9
〈秩序〉	半透明の幕を...シンプルな表現をもって緩やかな秩序を形成	6
〈立体〉	都市に対する壁の表情は立体的で彫りのあるものとして...	5
〈消去〉	存在感を消したい場所には透明アクリル板を使う。	13
小計		588
その他	共生を実現/イメージネーションする/表現の基本となる/刺激が生まれるetc	

※その他の記述例は、共通の記述が少なく、どの分類にも属さないもの

※下線部は性質の抽出箇所

※記述例の引用元『新建築』（上から）pp.150, 2009.03/pp.234, 1997.01/pp.124, 1997.05/pp.126, 1999.08/pp.259, 1986.03/pp.107, 2003.09/pp.104, 2005.03/pp.202, 1987.11/pp.106, 2001.09/pp.242, 1993.08/pp.80, 2003.01/pp.91, 2009.09/pp.96, 2009.11/pp.98, 1999.07/pp.225, 1986.07/pp.137, 2007.03/pp.156, 1997.07/pp.177, 1999.03/pp.234, 1992.02/pp.252, 1985.03/pp.240, 1986.12/pp.221, 1992.02/pp.255, 1987.06/pp.98, 2007.05/pp.255, 1987.06/pp.72, 2005.12/pp.98, 2007.05/pp.106, 1995.01/pp.191, 1993.05/pp.168, 2009.03

4 - 3 関連の整理

4 - 3 - 1 透明性の主体と度合いのコレスポンドンス分析

透明性の主体と度合いの関連の傾向を把握するため、コレスポンドンス分析を行う。そのため、主体と度合いを抽出し、キーコンテキスト内の組合せを基にクロス集計を行った。その結果、組合せ総数として延べ 602 の組合せを得ることができた。クロス集計の結果からクロス集計表を作成する（表 4-6）。

表 4-6 主体と度合いのクロス集計表

分類	{透明}	{半透明}	{不透明}	総計
【素材】	106	44	5	155
【装置】	14	4		18
【家具】	8	3	2	13
【部位】	11	3	3	17
【建築】	33		2	35
【開口】	19	4		23
【立面】	6			6
【層】	54	33	3	90
【境界】	43	16	2	61
【空間】	66	6	1	73
【地域】	13		1	14
【自然】	23	3	1	27
【構造】	21		1	22
【視界】	7			7
【社会】	4	3	4	11
【関係】	5	2	1	8
【概念】	12	2	1	15
【秩序】	7			7
総計	452	123	27	602

クロス集計表を基にコレスポンドンス分析を行い、主体と度合いの関連の強さをグラフ上の距離に転換して模式化することで傾向を整理した（図 4-4）。

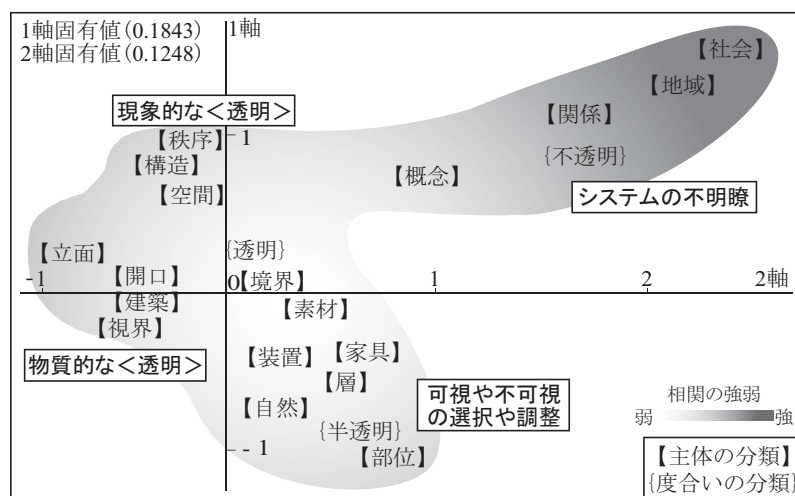


図 4-4 主体と度合いのコレスポンドンス分析散布図

そして、グラフ上に布置されたカテゴリーの位置関係から領域の方向性を定め、グラフの原点から周縁部までのカテゴリーを、原点からの距離に比例して比重を置いて解釈した結果、物質的な透明、現象的な透明、システムの不明瞭、可視や不可視の選択や調節の4つの傾向に整理することができた。以下にそれらの傾向を構成する要素の組み合わせを述べる。

物質的な透明：{透明} は、【開口】、【立面】、【建築】、【視界】、【境界】、【素材】、【秩序】、【構造】、【概念】、【空間】などほぼ全ての主体と組み合わせる。【建築】、【開口】、【境界】と組み合わせる場合、ガラスやアクリル、FRPなどの素材自体が透明であることで、光や視覚的な透過性をもつものとして表現していると捉えられる。つまり、この{透明}は、物質的な透明を主体に意味付けるといえる。

現象的な透明：{透明} は、【構造】、【空間】、【秩序】と組み合わせる場合、部材構成や空間構成において生まれる普遍性を透明性として表現していると捉えられる。つまり、この{透明}は、目に見えない現象的な透明を主体に意味付けるといえる。

可視・不可視の選択や調整：{半透明} は、【部位】、【自然】、【層】との関連が強い。このことから、スキン、被膜などの部材が半透明であり、空間の構成を操作することで、それらの重なりが境界の裏側に存在するものや人間の存在感などをぼかして映し出すものとして表現していると捉えられる。また、光や空気などの要素を利用して建築に取り込むことで、光の陰影といった本来透明な物質の可視度を調節し、空間にコントラストをつくり出すものとしても表現していると捉えられる。以上より、{半透明}は、可視・不可視の選択や調整という側面を主体に意味付けるといえる。

社会やシステムの不明瞭：{不透明} は、【社会】、【地域】、【関係】、【概念】との関連が強い。このことから、将来や組織の仕組みが複雑で見通しが悪いことを不透明と喩えて表現していると捉えられる。また、【概念】と組み合わせる場合は、理屈や思考が解りにくく明白でないものとしても表現していると捉えられる。以上より、{不透明}は、社会やシステムの不明瞭という側面を主体に意味付けるといえる。

表 4-7 主体と

分類	〔可視〕	〔不可視〕	〔反射〕	〔映写〕	〔透過〕	〔分断〕	〔接続〕	〔広がり〕	〔重複〕	〔被覆〕	〔滲出〕	〔流動〕	〔開閉〕	〔中立〕
【素材】	20	9	13	6	21	6	7	2	2	6	6	2	5	
【装置】	2			1	2			4		2				
【家具】	3			1	2	3		1				1		
【部位】	3		2		2		1		2			1		
【建築】	3			1	2		4		1	3	2	1	3	
【開口】	4	2		1	3	1							3	
【立面】				1							2			
【層】	8	5	7	5	10	4	3	1	1	9	3	3		2
【境界】	9	3		1	11	8	4			4	1	4	2	
【空間】	11	2		2	7	1	4	3	1	1	6		7	
【地域】	4	1			1		2					1		
【自然】	1			1	4		1	1				3		
【構造】	3			1	3			2	1	1	1			1
【視界】	1						2						1	
【社会】					1									2
【関係】	1												1	
【概念】	1						1			1	2	2	1	
【秩序】		1										1	1	1
総計	74	23	22	21	69	23	29	14	8	27	23	19	24	6

4 - 3 - 2 透明性の主体と性質のコレスポンド分析

透明性の主体と性質の相関の傾向を把握するため、コレスポンド分析を行う。そのため、主体と性質を抽出し、キーコンテキスト内の組合せを基にクロス集計を行った。その結果、組合せ総数として延べ581の組合せを得ることができた。クロス集計の結果からクロス集計表を作成する（表4-7）。

作成したクロス集計表を基にコレスポンド分析を行い、主体と性質の関連の強さをグラフ上の距離に転換して模式化することで傾向を整理した（図4-5）。

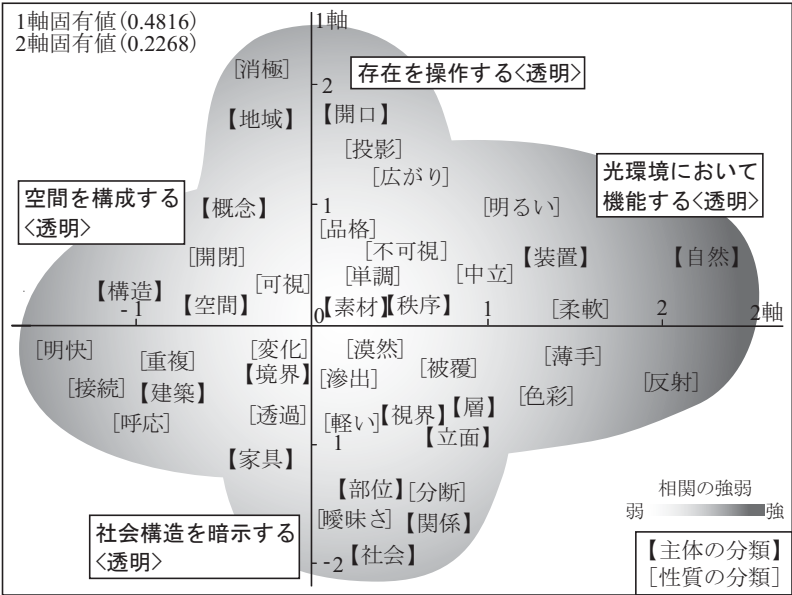


図4-5 主体と性質のコレスポンド分析散布図

性質のクロス集計表

【消極】	【呼応】	【薄手】	【明るい】	【色彩】	【柔軟】	【品格】	【漠然】	【軽い】	【曖昧さ】	【明快】	【単調】	その他	総計
1	3	3	4	3	7	7	3	5	1	5	2	6	155
		1	1	1	1		1			1		1	18
					1							1	13
1								4			1		17
1	1				1	1		4		3	1	3	35
2			2		1	1		1			1	1	23
			1		2								6
1		3	2	3	6		3	5		2	4		90
	2	1	1	1	3	2	2		2				61
2	3	1	4	1	8		2	1	1	3	2		73
1			2							1		1	14
1		1	1	2	3		4	1				3	27
	2				1	1	1	2		1		1	22
	1		1							1			7
						1	3	1				3	11
	2									2			8
3	1								2	1		1	15
			1	1			1		1				7
13	15	10	20	12	34	13	20	24	7	20	11	21	602

そして、グラフ上に布置されたカテゴリーの位置関係から領域の方向性を定め、グラフの原点から周縁部までのカテゴリーを、原点からの距離に比例して比重を置いて解釈した結果、空間を構成する透明性、存在を操作する透明性、光環境において機能する透明性、社会構造を暗示する透明性の4つの傾向に整理することができた。以下に、それぞれの傾向を構成するのに大きく起因している周縁部の要素の組み合わせについて述べる。

空間を構成する透明性：[明快]、[接続]、[呼応]は、【建築】、【構造】との関連が強く、主に空間構成に関する主体と組み合わせる。[明快]は、空間構成における広い視界や奥行きのある状態を表現しており、[接続]、[呼応]は、建築物の計画によって領域を分節しながらも、視覚的には空間を分節せずに繋がりをもたせていることを示していると捉えられる。また、[重複]は、【構造】との関連が強く、複数の物事が視界の同一範囲内に同時に認識できることを表現していると捉えられ、これは、視覚的な認識を基に透明の構成的側面を表現している。以上より、これらの性質は、空間構成に係わる透明性の機能を表現しているといえる。

存在を操作する透明性：[消極]は、【地域】、【開口】との関連が強く、主に周辺環境や街並を表す主体と組み合わせる。このことから、街並や地域に対して建築物が与える威圧感を軽減し、建築物が地域や外部に対して一歩引いた姿勢を示すために透明な境界を利用していると捉えられる。一方、[投影]、[広がり]は、【開口】との関連が強く、内外を隔てる境界の透過度によって向こう側の存在を隠したり、空間をひとつの大きさやまとまりとして強調していると捉えられる。以上より、これらの性質は、存在感の消失や強調を促す描写に多く現れ、存在を操作する透明性を表現しているといえる。

光環境において機能する透明性：[反射]は、【自然】、【層】、【装置】との関連が比較的強く、反射や映り込みなどの光の現象を引き起こす面的な主体と組み合わせる。このことから、光の拡散による淡く煌びやかな光景や、光の漏出による照明の機能を表現していると捉えられる。また、[柔軟]は、光による感覚的な印象の付与を表現していると捉えられる。以上より、これ

表4-8 主体と

分類	〈浮遊〉	〈開放〉	〈公有〉	〈私有〉	〈一体〉	〈流動〉	〈地域〉	〈明晰〉	〈錯覚〉	〈奥行き〉	〈気配〉	〈曖昧〉	〈関係〉	〈風景〉	〈演出〉	〈光明〉
【素材】	11	10	2	1	7	7	5	3	3	3	1	3	5	14	26	8
【装置】	1	1	1		1			1		1		2	1	2		
【家具】	2	1									1			1	3	
【部位】	1	1				5								1	1	1
【建築】	3			1			1							5	5	
【開口】		1			1	1	1				3		2	5	5	
【立面】									1					1	3	
【層】	2	8	2	3		6	5	2			3	3	2	5	17	3
【境界】	3	3	4	4	2	6		4	3		2	2	5	3	5	
【空間】	5	8	5		3	5	3	3		2	5			6	7	
【地域】		3	1			2								1	3	
【自然】		2		1		4				1		1	1	2	4	
【構造】	1	3	2			3		4		1				1	1	
【視界】			1		1			1					1			
【社会】		1													2	
【関係】		2	1			1							1			1
【概念】	1	1	1			1	1							1	2	1
【秩序】	1	1	2										1		1	
総計	31	46	22	10	15	41	16	18	7	8	15	11	19	48	85	14

らの性質は、主に光環境がある場合において、光のもつ物理的性質や印象を操作し、演出する透明性を表現しているといえる。

社会構造を暗示する透明性：「曖昧さ」は、【社会】、【関係】との関連が強く、主に組織や社会の仕組みを表す主体と組み合わせる。このことから、組織の見通しの悪さや社会の喧騒を表現していると捉えられる。また、「分断」は、【部位】、【立面】、【視界】との関連が強く、平面計画を操作することで、音、風、空間、情報など外部からの流入を制限していると捉えられる。以上より、これらの性質は、【部位】、【立面】といった具体的な主体との組み合わせや、【社会】、【関係】といった抽象的な主体との組み合わせにより、ものの導入やシステムの理解の制限を対象に、比喩的に社会構造を暗示する透明性を表現しているといえる。

4 - 3 - 3 透明性の主体と効果のcorespondence分析

透明性の主体と効果の相関の傾向を把握するため、corespondence分析を行う。そのため、主体と効果を抽出し、キーコンテキスト内の組合せを基にクロス集計を行った。その結果、組合せ総数として延べ588の組合せを得ることができた。クロス集計の結果からクロス集計表を作成する（表4-8）。

作成したクロス集計表を基にcorespondence分析を行い、主体と効果の関連の強さをグラフ上の距離に転換して模式化することで傾向を整理した（図4-6）。

そして、グラフ上に布置されたカテゴリーの位置関係から領域の方向性を定め、グラフの原点から周縁部までのカテゴリーを、原点からの距離に比例して比重を置いて解釈した結果、領域をつくる透明性、透明性に内在する感性、活動を変容する透明性、人間の知覚に作用する透明性の4つの傾向に整理することができた。

効果のクロス集計表

〈情報〉	〈行為〉	〈象徴〉	〈調和〉	〈包容〉	〈領域〉	〈可変〉	〈対比〉	〈伝統〉	〈安全〉	〈懐疑〉	〈秩序〉	〈立体〉	〈消去〉	その他	総計
4	4	9	5	6	2	5	3	2	2				2	2	155
	1		1	2						1		1	1		18
	1	1					1				1		1		13
		1	1					1		1			1	2	17
7		4	2	1	2		1			1				2	35
			2	1									1		23
			1												6
3	3	2	3	6	1	1	2	1		1	2	1	2	1	90
4	3			1	2	2	1						2		61
3	1	1	4	1	1	2	1	1	3			1	1	1	73
1										1				2	14
		1	3	1			1		1	1		1		2	27
	1				1			1	2			1			22
			2						1						7
		2						1		3			1	1	11
							1	1							8
		2									2		1	1	15
											1				7
22	14	23	24	19	9	10	11	8	9	9	6	5	13	14	602

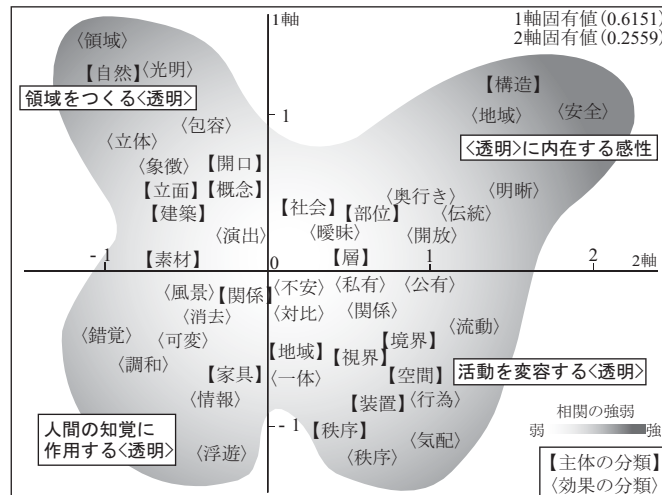


図 4-6 主体と効果のコレスpondence分析散布図

以下に、それぞれの傾向を構成するのに大きく起因している周縁部の要素の組み合わせについて述べる。

領域をつくる透明性：〈領域〉、〈光明〉は、【自然】との関連が強く、〈領域〉は、透明や半透明の境界が空間の領域を生成していると捉えられ、〈光明〉は、光の物理現象を利用するとともに、照明効果や発光効果により領域を形成していると捉えられる。また、〈立体〉、〈包容〉は、【建築】、【開口】との関連が強く、〈立体〉は、奥行きを強調させることで空間の存在感を強める表現として捉えられ、〈包容〉は、内部空間の表情を作り出す表現として捉えられる。以上より、これらの効果は、素材や部位といった介在物の透明性を操作することで、周辺要素の強調や創出を促し、空間の領域を形成する側面を表出している。

透明性に内在する感性：〈安全〉、〈地域〉、〈明晰〉は、【構造】との関連が強く、〈安全〉、〈明晰〉は、施設構成や空間全体が見渡せることによる明快さや人間の心理に対する安堵感を得る表現として捉えられる。これは、不特定多数の人々が利用する公共施設やレクリエーション施設の設計における一つの考え方として記述されていることが多い。〈地域〉は、建築と地域との境界を操作することで、建築内から発する情報を周辺地域に対して発散し、地域社会を刺激する表現として捉えられる。以上より、これらの効果は、社会における透明のイメージや役割を具象化し、透明性に内在する固有の能力や感性を描写する側面を表出している。

活動を変容する透明性：〈行為〉、〈流動〉は、【空間】、【境界】との関連が強く、人間の活動が外部に露出し、生活行為の効率や利便性の円滑な進行を表現していると捉えられる。〈気配〉は、【空間】、【装置】との関連が強く、人間や自然の存在感を空間に滲ませることで、間接的に行為や活動に影響を与えていると捉えられる。以上より、これらの効果は、人の行為や活動に対しての意識の変容を促す側面を表出している。

人間の知覚に作用する透明性：〈情報〉、〈調和〉、〈浮遊〉、〈錯覚〉は、【素材】、【家具】、【建築】との関連が比較的強い。〈情報〉、〈調和〉は、活動や状況などが発信する情報を空間が媒体となって外部に発散し、建築物自体に周辺地域や街並みとの調和を感じる様子を表現していると捉えられる。また、〈浮遊〉、〈錯覚〉は、重力を感じさせず、物が視覚的にまるで浮いているような

非現実的な演出をする表現として捉えられる。それと同時に、実際には存在しないものを空間内の家具や小物などの操作によって人間に喚起させる描写もみられた。このように、物質として存在せず目には見えない情報や現象を、建築物や空間を通して感じ、錯覚によって認識していることがわかる。以上より、これらの効果は、人間の知覚に作用する側面を表出している。

4 - 4 語義の類型からみる透明性の多義性

本節では、前節までに検討した主体と度合い、主体と性質、主体と効果のコレスポンドンス分析散布図からそれぞれの傾向を得ることができた。そこで本章では、主体・度合い・性質・効果の傾向を重ね合わせ、語義によって導かれる多義性の類型を示し、透明性の多義性がどのような状況で変化し、決定づけられるかを考察する。

		領域をつくる＜透明＞		＜透明＞に内在する感性		効果にみ
光環境において機能する透明	↑	A：光の透過		H：開放性の確立		
		【素材】透明[放射](光明) 3 【部材】透明[放射](光明) 1 【層】透明[放射](光明) 1 【層】透明[色彩](包容) 1 【自然】透明[中立](領域) 3 【素材】透明[柔軟](象徴) 2 【素材】透明[柔軟](包容) 1 【装置】透明[明ない](象徴) 1 【建築】透明[明ない](象徴) 1 【素材】透明[放射](演出) 6 【開口】透明[放射](演出) 2	【層】透明[放射](演出) 3 【空間】透明[色彩](演出) 1 【自然】透明[色彩](演出) 2 【装置】透明[色彩](演出) 1 【層】透明[色彩](演出) 1 【素材】透明[柔軟](演出) 3 【自然】透明[明ない](演出) 2 【開口】透明[明ない](演出) 1 【素材】透明[不可視](立体) 1 【層】透明[被覆](包容) 2 【立面】透明[被覆](象徴) 1	【建築】透明[明ない](象徴) 1 【層】透明[放射](演出) 1 【空間】透明[色彩](演出) 1 【自然】透明[明ない](演出) 1 【建築】透明[被覆](象徴) 2	【境界】透明[薄手](開放) 1 【層】透明[放射](開放) 1 【素材】透明[明ない](開放) 3 【空間】透明[明ない](安心) 1 【素材】透明[被覆](開放) 4 【空間】透明[被覆](開放) 1 【装置】透明[被覆](開放) 1	【素材】透明[明ない](開放) 1 【概念】透明[演出](開放) 1
		B：光の拡散		C：素材表面の光沢		
		【装置】半透明[薄手](包容) 1 【自然】半透明[柔軟](象徴) 1 【素材】半透明[放射](包容) 1 【素材】半透明[放射](光明) 2 【層】半透明[柔軟](演出) 1 【自然】半透明[柔軟](演出) 1	【素材】半透明[色彩](演出) 1 【層】半透明[色彩](演出) 1 【層】半透明[被覆](光明) 2 【素材】半透明[演出](光明) 2 【建築】半透明[被覆](包容) 1	【部位】不透明[放射](光明) 2	【層】透明[柔軟](觀看) 1 【装置】透明[被覆](開放) 1	
存在を操作する透明	↑	D：内部の露出による象徴		I：明瞭性の獲得		
		【素材】透明[映写](光明) 1 【装置】透明[品格](象徴) 1 【素材】透明[品格](象徴) 2 【開口】透明[品格](包容) 2 【層】透明[映写](演出) 2 【開口】透明[映写](演出) 1 【素材】透明[映写](演出) 1 【境界】透明[映写](演出) 1 【素材】透明[品格](演出) 3 【自然】透明[品格](演出) 1 【部位】透明[品格](演出) 1	【素材】透明[可視](領域) 1 【層】透明[可視](領域) 1 【建築】透明[可視](象徴) 1	【層】透明[映写](演出) 2 【空間】透明[可視](象徴) 1	【装置】透明[映写](明瞭) 1 【開口】透明[消極](開放) 1 【層】透明[可視](開放) 2 【部位】透明[可視](明瞭) 2 【境界】透明[可視](明瞭) 1 【層】透明[可視](地域) 2 【境界】透明[可視](地域) 1	【構造】透明[品格](開放) 1
		E：空間の接続・分断における領域の生成		F：公開性の確立		
		【建築】透明[開閉](領域) 2 【空間】透明[明快](演出) 2 【素材】透明[接続](演出) 1 【装置】透明[接続](演出) 1 【素材】透明[透過](象徴) 2 【素材】透明[透過](光明) 1 【建築】透明[可視](象徴) 1 【素材】透明[可視](領域) 2 【層】透明[可視](領域) 1	【概念】透明[明快](象徴) 1 【空間】透明[明快](象徴) 2 【空間】透明[明快](象徴) 1 【建築】透明[開閉](象徴) 2 【空間】透明[明快](象徴) 1 【空間】透明[接続](演出) 2 【空間】透明[明快](演出) 1 【空間】透明[可視](象徴) 1	【層】透明[開閉](開放) 2 【素材】透明[開閉](開放) 2 【空間】透明[開閉](開放) 1 【素材】透明[重複](開放) 1 【層】透明[順応](明瞭) 1 【建築】透明[明快](明瞭) 1 【空間】透明[明快](明瞭) 1 【空間】透明[透過](開放) 3 【境界】透明[透過](開放) 1 【層】透明[可視](開放) 2	【概念】透明[変化](開放) 1 【層】透明[可視](地域) 2 【境界】透明[可視](地域) 1 【部位】透明[可視](明瞭) 2 【境界】透明[可視](明瞭) 2	【空間】透明[開閉](開放) 3 【素材】透明[順応](開放) 1 【構造】透明[明快](開放) 2 【視界】透明[明快](明瞭) 1 【空間】透明[明快](明瞭) 1 【構造】透明[順応](安心) 2 【構造】透明[順応](地域) 1 【社会】透明[透過](開放) 1 【構造】透明[透過](拡張) 2 【空間】透明[透過](明瞭) 1 【構造】透明[可視](明瞭) 1
空間を構成する透明	↑	G：印象に基づく感覚の表出		J：不可視による期待感の創出		
		【素材】透明[軽い](領域) 2 【立面】透明[軽い](演出) 2 【素材】透明[軽い](演出) 1 【層】透明[軽い](演出) 1 【素材】透明[透過](象徴) 2 【立面】透明[被覆](象徴) 1 【層】透明[被覆](包容) 2 【素材】透明[透過](光明) 1 【層】透明[透過](光明) 1	【構造】透明[軽い](演出) 1 【建築】透明[被覆](象徴) 2	【層】透明[開閉](開放) 2 【素材】透明[開閉](開放) 2 【空間】透明[開閉](開放) 1 【素材】透明[重複](開放) 1 【層】透明[順応](明瞭) 1 【建築】透明[明快](明瞭) 1 【空間】透明[明快](明瞭) 1 【空間】透明[透過](開放) 3 【境界】透明[透過](開放) 1 【層】透明[可視](開放) 2	【概念】透明[変化](開放) 1 【層】透明[可視](地域) 2 【境界】透明[可視](地域) 1 【部位】透明[可視](明瞭) 2 【境界】透明[可視](明瞭) 2	【空間】透明[開閉](開放) 3 【素材】透明[順応](開放) 1 【構造】透明[明快](開放) 2 【視界】透明[明快](明瞭) 1 【空間】透明[明快](明瞭) 1 【構造】透明[順応](安心) 2 【構造】透明[順応](地域) 1 【社会】透明[透過](開放) 1 【構造】透明[透過](拡張) 2 【空間】透明[透過](明瞭) 1 【構造】透明[可視](明瞭) 1
		H：印象に基づく感覚の表出		K：専有・共有の調整		
		【境界】半透明[開閉](包容) 3 【層】半透明[透過](光明) 1 【素材】半透明[透過](光明) 1 【部位】半透明[可視](象徴) 1		【層】透明[開閉](開放) 2 【素材】透明[開閉](開放) 2 【空間】透明[開閉](開放) 1 【素材】透明[重複](開放) 1 【層】透明[順応](明瞭) 1 【建築】透明[明快](明瞭) 1 【空間】透明[明快](明瞭) 1 【空間】透明[透過](開放) 3 【境界】透明[透過](開放) 1 【層】透明[可視](開放) 2	【概念】透明[変化](開放) 1 【層】透明[可視](地域) 2 【境界】透明[可視](地域) 1 【部位】透明[可視](明瞭) 2 【境界】透明[可視](明瞭) 2	【空間】透明[開閉](開放) 3 【素材】透明[順応](開放) 1 【構造】透明[明快](開放) 2 【視界】透明[明快](明瞭) 1 【空間】透明[明快](明瞭) 1 【構造】透明[順応](安心) 2 【構造】透明[順応](地域) 1 【社会】透明[透過](開放) 1 【構造】透明[透過](拡張) 2 【空間】透明[透過](明瞭) 1 【構造】透明[可視](明瞭) 1
社会構造を暗示する透明	↑	I：印象に基づく感覚の表出		L：専有・共有の調整		
		【素材】透明[軽い](領域) 2 【立面】透明[軽い](演出) 2 【素材】透明[軽い](演出) 1 【層】透明[軽い](演出) 1 【素材】透明[透過](象徴) 2 【立面】透明[被覆](象徴) 1 【層】透明[被覆](包容) 2 【素材】透明[透過](光明) 1 【層】透明[透過](光明) 1	【構造】透明[軽い](演出) 1 【建築】透明[被覆](象徴) 2	【層】透明[開閉](開放) 2 【素材】透明[開閉](開放) 2 【空間】透明[開閉](開放) 1 【素材】透明[重複](開放) 1 【層】透明[順応](明瞭) 1 【建築】透明[明快](明瞭) 1 【空間】透明[明快](明瞭) 1 【空間】透明[透過](開放) 3 【境界】透明[透過](開放) 1 【層】透明[可視](開放) 2	【概念】透明[変化](開放) 1 【層】透明[可視](地域) 2 【境界】透明[可視](地域) 1 【部位】透明[可視](明瞭) 2 【境界】透明[可視](明瞭) 2	【空間】透明[開閉](開放) 3 【素材】透明[順応](開放) 1 【構造】透明[明快](開放) 2 【視界】透明[明快](明瞭) 1 【空間】透明[明快](明瞭) 1 【構造】透明[順応](安心) 2 【構造】透明[順応](地域) 1 【社会】透明[透過](開放) 1 【構造】透明[透過](拡張) 2 【空間】透明[透過](明瞭) 1 【構造】透明[可視](明瞭) 1
		J：印象に基づく感覚の表出		M：専有・共有の調整		
		【境界】半透明[開閉](包容) 3 【層】半透明[透過](光明) 1 【素材】半透明[透過](光明) 1 【部位】半透明[可視](象徴) 1		【層】透明[開閉](開放) 2 【素材】透明[開閉](開放) 2 【空間】透明[開閉](開放) 1 【素材】透明[重複](開放) 1 【層】透明[順応](明瞭) 1 【建築】透明[明快](明瞭) 1 【空間】透明[明快](明瞭) 1 【空間】透明[透過](開放) 3 【境界】透明[透過](開放) 1 【層】透明[可視](開放) 2	【概念】透明[変化](開放) 1 【層】透明[可視](地域) 2 【境界】透明[可視](地域) 1 【部位】透明[可視](明瞭) 2 【境界】透明[可視](明瞭) 2	【空間】透明[開閉](開放) 3 【素材】透明[順応](開放) 1 【構造】透明[明快](開放) 2 【視界】透明[明快](明瞭) 1 【空間】透明[明快](明瞭) 1 【構造】透明[順応](安心) 2 【構造】透明[順応](地域) 1 【社会】透明[透過](開放) 1 【構造】透明[透過](拡張) 2 【空間】透明[透過](明瞭) 1 【構造】透明[可視](明瞭) 1

※【】は主体の分類，{ }は度合いの分類，[]は性質の分類，〈 〉は効果の分類，数字はサンプル数を表す。 図中網掛け要素は、コレスポンドンストリクスにより示す。度合いの特徴については、行と列によって構成される各セルを垂直と水平で4分割し、左上を物質的な＜透明＞、右上を現象的な

図4-7 主体・度合い・性質

ここでは、キーコンテキストに含まれる主体・度合い・性質・効果を、コレスポンデンス分析から得られた傾向の違いとその強弱を判断の手がかりとして比較考察し、原文の記述内容を考慮した上でいくつかの意味のまとまりとして位置づけることができた（図5）。その結果、建築物の言語描写における透明性の多義性として少なくともA～Xの24の類型が認められた^{注4）}。

特徴			
活動を変容する＜透明＞		人間の知覚に作用する＜透明＞	
L：活動の促進		S：光による幻想感の演出	
【層】透明[薄手](気配)2 【境界】透明[明な](一体)1 【境界】透明[明な](対比)1 【層】透明[被覆](行為)1 【装置】透明[被覆](流動)2 【素材】透明[可視](流動)1		【自然】透明[柔軟](調和)1 【部位】透明[中立](浮遊)2 【素材】透明[放射](調和)2 【立面】透明[単調](調和)2 【表層】透明[放射](浮遊)2 【素材】透明[放射](情報)2 【表層】透明[柔軟](情報)2 【境界】透明[明な](調和)1 【表層】透明[放射](消去)1 【境界】透明[柔軟](消去)1	
M：雰囲気生成			
【装置】半透明[柔軟](気配)2 【素材】半透明[柔軟](気配)2 【層】半透明[柔軟](秩序)1 【層】半透明[柔軟](私有)1 【層】半透明[被覆](秩序)2 【層】半透明[単調](秩序)1		【空間】透明[放射](風景)1 【素材】透明[偶然](調和)1 【空間】透明[放射](情報)2 【空間】透明[被覆](調和)2 【空間】透明[被覆](情報)2 【層】透明[中立](調和)1 【素材】透明[薄手](調和)1 【素材】透明[柔軟](情報)1 【素材】透明[放射](消去)1 【層】透明[薄手](風景)1	
N：広がりによる一体感の獲得		T：建築操作による周囲との同化	
【層】透明[肥大](流動)1 【装置】透明[肥大](一体)4 【空間】透明[肥大](一体)1 【素材】透明[品格](対比)1 【素材】透明[可視](公有)3 【境界】透明[可視](公有)2 【空間】透明[可視](公有)1 【層】透明[可視](公有)1 【部位】透明[可視](文化)1 【空間】透明[可視](流動)2 【素材】透明[可視](流動)1		【空間】透明[可視](公有)1 【空間】透明[可視](秩序)2 【空間】透明[可視](行為)1 【空間】透明[可視](公有)2 【層】透明[可視](公有)1 【空間】透明[可視](流動)1 【空間】透明[可視](気配)1 【構造】透明[可視](一体)1 【秩序】透明[可視](秩序)1	
O：人間の活動の映写		U：虚構の創出	
【層】半透明[映写](行為)2 【装置】半透明[可視](気配)1 【層】半透明[単調](秩序)1		【空間】透明[可視](調和)2 【素材】透明[可視](情報)2 【家具】透明[可視](浮遊)2 【素材】透明[可視](虚像)2	
P：公共性の確立		V：関係による周囲との同化	
【空間】透明[接続](公有)2 【境界】透明[接続](公有)2 【空間】透明[接続](公有)1 【空間】透明[接続](流動)3 【境界】透明[接続](一体)1 【素材】透明[開閉](公有)1 【境界】透明[開閉](公有)1 【素材】透明[開閉](関係)1 【開口】透明[開閉](関係)1 【素材】透明[可視](公有)3		【空間】透明[明快](公有)1 【建築】透明[明快](公有)1 【空間】透明[重複](流動)1 【構造】透明[重複](関係)2 【秩序】透明[変化](公有)2 【層】透明[変化](公有)1 【空間】透明[可視](流動)3 【境界】透明[透過](流動)2 【概念】透明[変化](流動)1	
Q：活動の移り変わり		W：内包された情報の伝達	
【装置】半透明[映写](気配)1 【素材】半透明[接続](行為)1 【層】半透明[順応](流動)1 【部位】半透明[順応](流動)1 【素材】半透明[重複](流動)1		【空間】透明[可視](浮遊)2 【家具】透明[透過](浮遊)1 【素材】透明[透過](浮遊)4 【建築】透明[透過](調和)3 【部位】透明[可視](浮遊)2 【空間】透明[被覆](調和)1 【境界】透明[被覆](情報)2 【建築】透明[透過](情報)1	
R：環境に対する呼応		X：不信感の形成	
【層】半透明[透視](文化)2 【部位】半透明[透視](流動)1 【境界】半透明[透視](流動)1 【境界】半透明[透視](一体)2 【部位】半透明[透視](対比)3		【空間】透明[可視](浮遊)2 【家具】透明[透過](浮遊)1 【素材】透明[透過](浮遊)4 【建築】透明[透過](調和)3 【部位】透明[可視](浮遊)2 【空間】透明[被覆](調和)1 【境界】透明[被覆](情報)2 【建築】透明[透過](情報)1	

分析散布図の原点付近に布置されたものを示す。性質の特徴を縦軸、効果の特徴を横軸、さらに行と列が交差する各セルを度合いの特徴で分割した3軸マ＜透明＞、左下を可視や不可視の選択や調整、右下をシステムの不明瞭と定める。

- ・効果からみる透明性の多義性

以下に、各類型の説明を述べる。

類型 A：光の透過

この類型は、「透明とブロンズ色の2層になった吊りガラスが、光や天候によって変化し、イルミネーションのような輝きを見せています」^{注5)}などの描写にみられように、{透明}な主体において[反射]、[明るい]などを用いることで光が透過する機能を利用して室空間の演出や立体感を強調させる様子を表現している。

類型 B：光の拡散

この類型は、「一室構成ロビーは、空港利用者すべてがこの空間を通過するので、無柱の軸力ドームで架構し、半透明のテフロン膜で覆って、柔らかな天空光がふりそそぐ日本的な空間の雰囲気をつくろうとした」^{注6)}などの描写にみられるように、{半透明}な主体において[柔軟]を用いることで光が拡散する機能を利用して室空間に落ち着きを与えている様子を表現している。

類型 C：素材表面の光沢

この類型は、「底光りする（表面反射ではなく、不透明の塗料における中間反射）漆の重厚な光沢と金のきらびやかな輝きの組合せは、抑制のきいたなかにも光輝く絢爛さを表現するのにまたとない素材であった」^{注7)}などの描写にみられるように、{不透明}な素材表面が光によって光沢を帯びる機能を利用する側面を表している。

類型 A, B, C は、光環境において機能する透明性と領域を生成する透明性によるものが大きく、[反射]〈光明〉の組み合わせが共通するなど、光自体を透明性の一側面として意味付けている。

類型 D：内部の露出による象徴

この類型は、「ガラス面は下がハーフミラーで、オパックな部分を徐々に加えながら、上にいくほどに透明度を増し、天上的な性格を示唆する」^{注8)}などの描写にみられるように、[品格]〈象徴〉などの組み合わせにより、透けや映りこみといった視覚的な透過の認識を透明性の一側面として意味付けている。{透明}と{半透明}の場合がみられ、度合いを調整することで内部のものや行為を外部に露出または映し出し、見られる状況を意図的につくることで内部のものやあるいは建築物そのものを象徴的に表す様子を表現している。

類型 E：空間の接続・分節における領域の生成

この類型は、〈領域〉、〈包容〉が組み合わせさり、【素材】や【部位】などが主体となりやすい。「内と外を交換する透明で大きな建物は、開け方によっては外の内をつくり、屋根を持った内は外として水平線まで広がっていきます」^{注9)}などの描写にみられるように、[開閉]などの領域の操作に対して、透明の度合いによって空間の接続や分節が発生する様子を表現している。ここでは、空間の接続・分節において領域を生成する側面を意味付けている。

類型 F：公開性の確立

この類型は、{透明}に[明快]、[開閉]が組み合わさり、〈象徴〉として表されている。「東京工業大学のメインサイト・・・と共にこの場所の「顔」となる建物と言える・・・この建物は透明性と開放性を持って地域に開かれた場所を形成し、より空間的な構成のものとなるよう意図している」^{注10)}などの描写にみられるように、空間に内包された状況や情報が、周囲とつながることで露見し、公開性をもったものとして認識される様子を表現している。

類型 G：印象に基づく感覚の表出

この類型は、「これを軽快なスペースフレームと透明ガラスでつくることによって、不思議な雰囲気の間領域をつくることができた」^{注11)}などの描写にみられるように、[軽い]を用いることで部位や素材から伝わる重量感や密度感を軽減し、空間に軽さを与える様子を表現している。また、〈包容〉、〈象徴〉などを用いることで空間を覆う雰囲気に柔らかな印象を付加させるなど、透明から連想される印象に基づく感覚を一側面として意味付けている。

類型 H：開放性の確立

この類型は、開放性を透明性の一側面として意味付けており、[明るい]、[反射]などに〈開放〉が組み合わさることで、透明な素材や開口部を通して自然光による採光を確保し、室空間の中の人間に開放感を与える様子を表現している。また、「方立てのない巨大な透明度 98%の亚克力窓は、内部と外部の境界を完全に消失させ・・・どこにいても前後 2 方向が突き抜けた意外にも開放的な空間を提供する」^{注12)}などの描写にみられるように、[消極]、[可視]に〈開放〉が組み合わさる場合は、ファサードやスクリーンなどの主体そのものの存在感を希薄化させることで地域に対しての建築物の開放性を表している。

類型 I：明瞭性の獲得

この類型は、〈開放〉に加えて〈明晰〉などを用いることで、「敷地の制約から内部モールとした「スクール・ストリート」は、校舎の空間全体を把握しやすくするための透明性の高い骨格的な空間である」^{注13)}などの描写にみられるように、空間が開放的であり視覚的に見通しがよいことから空間把握が容易である様子を表現している。また、[明快]に〈明晰〉、〈安全〉が組み合わさることからも、ここでは空間構成の明瞭さや社会状況などの理解のし易さを透明性の一側面として意味付けている。

類型 J：不可視による期待感の創出

この類型は、{半透明}、{不透明}に〈奥行き〉が組み合わさり、「一方で見え隠れする不透明壁を有効に配置し、より遠くへ興味が拡張されるようにも配慮した。このふたつの透明感をつくる要素を重層させながら子供たちのアイコンタクトを最大限に引き出そうと考えた」^{注14)}などの描写にみられるように、視覚的に見えにくい、もしくは不可視な状態が人間の興味を膨らませて期待感をもたせる様子を表現している。ここでは、見えないことによる誘引効果の側面を透明性に意味付けている。

類型 K：専有・共有の調整

この類型は、{半透明}な主体に〈私有〉、{開放}などが組み合わせり、「ファサードはプライバシーに配慮し半透明プロフィリットガラスで、柔らかい光のみを取り入れた」^{注15)}などの描写にみられるように、空間における専有的な性格と共有的な性格を半透明の度合いによって調整付けていると捉えることができる。また、{半透明}[開閉]の組み合わせにおいても、半透明の度合いが空間における開口や境界の開き具合に影響を与えており、ここでは、専有・共有の調整機能を透明性の一側面として意味付けている。

類型 L：活動の促進

この類型は、[明るい]〈一体〉の組み合わせがあり、光や人の振る舞いが空間に一体感を生み、「・・・透明な被膜で覆われている。この被膜は、・・・low-Eペアガラスのスクリーンで、重層した立面にアクティビティが表出し、豊かな建物の表情が、周辺の環境に活気を与えることを意図している」^{注16)}などの描写にみられるように、〈流動〉、〈行為〉を用いることで交流や活動の刺激を生む効果をなしている。ここでは、透明による活動の促進を透明性の一側面として意味付けている。

類型 M：雰囲気生成

この類型は、{半透明}に[柔軟]〈気配〉や[透過]〈気配〉などが組み合わせり、「透明膜と不透明膜の重なりをトップライトからの光が透過する。通り過ぎていく人影や差し込む光を・・・、部屋全体に気配や色味をぼんやりとにじませていく」^{注17)}などの描写にみられるように、スクリーンなどの主体によってシルエットなど気配のみが通過して滲み出ることにより、空間に雰囲気が生成される様子が表現されている。

類型 N：広がりによる一体感の獲得

この類型は、[広がり]〈一体〉の組み合わせがあり、「一方、室内側の開口部は極力大きく透明なものとし、室内と中庭を視覚的に一体化させた。この閉じながらも開くあり方により、都市住宅ならではの開放感を実現している」^{注18)}などの描写にみられるように、建築全体の中の個々の空間を透明な境界で構成し、全体として一つの大空間の広がりをつくりだす様子を表現している。これは、会社等の組織の施設における記述に多くみられ、空間内でそれぞれの業務を務めながら一体感を感じる様子が描写されている。ここでは、空間の広がりによる一体感の獲得という側面を透明性に意味付けている。

類型 O：人間の活動の映写

この類型は、[可視]、[投影]に〈行為〉などが組み合わせり、「・・・架構の内部は2重3重の半透明な幕によって包み込まれており、内部の人びとの動きが・・・ふわっと浮き上がったり、人びとの身振りを自然とアクロバティックな動き・・・へと誘うような効果を生み出している」^{注19)}などの描写にみられるように、境界の向こう側に人間の行為や活動を露わにして、その光景を建築の表層の一部とする様子が表現されている。さらに、内部の様子を見られるこ

とによって人間の行為が変容する様子も表現しており、ここでは、人間の活動の映写といった一側面を透明性に位置づけている。

類型 P：公共性の確立

この類型は、〈公有〉が多く組み合わせり、「まるで公園のように、どこからでも人びとが自由に出入りしたり素通りしたりできる、透明で開放的な、町に開かれた公共空間を目指した」^{注 20)}などの描写にみられるように、学校施設、あるいは不特定多数の人が自由に利用して活動する領域の描写に多くみられる。ここでは、出会い、人間同士の接触、場の共有といった目的で建築家が透明な【境界】や【素材】を用いており、透明性に公共性の確立を意識して意味付けている。

類型 Q：活動の移り変わり

この類型は、[被覆]、[分断]が〈行為〉、〈流動〉などと組み合わせり、「・・・外部とは透明性の高いバスケットガラススクリーンで緩やかに仕切られている・・・垂直動線だけではなく学生たちが授業の合間や放課後などにたまることのできる空間も用意されている」^{注 21)}などの描写にみられるように、透明である【空間】や【素材】を通して人びとの振る舞いに変化していく様子を捉えて表現している。ここでは、活動の移り変わりを透明性の一側面として意味付けている。

類型 R：環境に対する呼応

この類型は、{半透明}な主体に[呼応]、〈流動〉などが組み合わせり、「・・・隣接する公園もその劇場のひとつの景として取り組もうと考えています。すなわち展示室から公園が見え、公園から展示室が見えるといった視覚の多角的呼応の場をつくり出そうとするものです」^{注 22)}などの描写にみられるように、主体がおかれた環境や状況に対して、透明・不透明の度合いを調整することで、透明性が環境に対して呼応するといった側面を意味付けている。

類型 S：光による幻想感の演出

この類型は、[反射]〈浮遊〉などの組み合わせがあり、「模型写真に漂っていた浮遊感というか夢の中の出来事のような非現実感、あるいは光を含んだ美しい透明感は消え、代わりに厳として物（ぶつ）があった」^{注 23)}などの描写にみられるように、光自体の[反射]が、あるいは光が【素材】に投影され、ぼんやりとした浮遊感を生成する様子が表現されている。ここでの透明性は、光による幻想感を示す側面を意味付けている。

類型 T：建築操作による周囲との同化

この類型は、[消極]〈調和〉などの組み合わせがあり、「また中層・高層部は透明感のある仕上げとし、全体的に存在感を消して、周囲に威圧感を与えないようなファサードを心がけている」^{注 24)}などの描写にみられるように、{透明}な主体を利用して建築家が何らかの操作や変化を行い、[消極]、[品格]、[投影]などの性質を加えて周囲と同化させる様子を表現している。ここでの

透明性は、建築操作による周囲との同化の側面を位置づけている。

類型 U：虚構の創出

この類型は、「また外形の透明な直方体のボリュームは、アクリル内部での光の全反射によって、その内面に広場の風景を完全な姿で映し込む。四角いボリュームが風景の中に消える瞬間が訪れるのである」^{注25)}などの描写にみられるように、{透明}または{半透明}な境界の奥にあるものの存在や状況が、部分的に見えたりぼかして映し出されることで、人びとがその先を想起するように仕向ける様子が表現されている。これは、完全に透過しないことによる虚構の創出といった側面を透明性に意味付けている。

類型 V：関係による周囲との同化

この類型は、[接続]、〈調和〉などが組み合わさり、「こういったことから建築計画では、住宅的スケールで計画し、周囲に違和感を与えない。住宅、学校とは視覚的つながりを避けながらも透明感を与え、環境になじませる」^{注26)}などの描写にみられるように、Tの建築操作による周囲との同化に対して、建築物自体を操作するのではなく、周囲との関係性によって同化させることにより生じる透明性を捉えている。ここでの透明性は、周囲との関係による同化の側面を意味付けている。

類型 W：内包された情報の伝達

この類型は、[透過]、〈情報〉などが組み合わさり、「廊下や吹抜けの接続部に透明または半透明のガラスを用いることで、別の階にいる人、部屋にいる人の気配を感じ取れるようにした。これは各機能の情報がスムーズに伝わるように意図したものである」^{注27)}などの描写にみられるように、空間や建築物が媒介となって、そこで行われる人びとの振る舞いや行為をメッセージとして発信する様子が表現されている。ここでの透明性は、内包された情報の伝達として意味付けられている。

類型 X：不信感の形成

この類型は、主に{不透明}[曖昧さ]〈懷疑〉が組み合わさり、「建築家の個人的思考に基づく回路が、・・・と同時に空間の不透明性を生み出すことを回避できないという事実です。ここには建築表現を巡る個人と社会との間の本質的矛盾が示されています」^{注28)}などの描写にみられるように、社会を透明度という尺度で測り、その見通しが悪いことや難解なことを不透明と捉えている。ここでは、社会の喧噪が人間に不信感を与える側面を意味付けている。

以上，建築物の言語描写における透明性の多義性として 24 種の意味の枠組みの類型を捉え，考察することができた（表 4-9）。

表 4-9 建築物の言語描写における透明性の多義性

類型	意味付け
類型A	光の透過
類型B	光の拡散
類型C	素材表面の光沢
類型D	内部の露出による象徴
類型E	空間の接続・分断における領域の生成
類型F	公開性の確立
類型G	印象に基づく感覚の表出
類型H	開放性の確立
類型I	明瞭性の獲得
類型J	不可視による期待感の創出
類型K	専有・共有の調整
類型L	活動の促進
類型M	雰囲気生成
類型N	広がりによる一体感の獲得
類型O	人間の活動の映写
類型P	公共性の確立
類型Q	活動の移り変わり
類型R	環境に対する呼応
類型S	光による幻想感の演出
類型T	建築操作による周囲との同化
類型U	虚構の創出
類型V	関係による周囲との同化
類型W	内包された情報の伝達
類型X	不信感の形成

4 - 5 小結

本章では、建築家の言語描写における透明性の多義性について、主体・度合い・性質・効果の観点から考察を行った。まず、透明性の主体と度合いのカテゴリーを全体の用法として関連性を考察した結果、度合いによって描写される透明性は大きく、物質的な透明、現象的な透明、システムの不明瞭、可視や不可視の選択や調整の4つの傾向に整理することができた。また、透明性の主体と性質のカテゴリーを全体の用法として関連性を考察した結果、性質によって描写される透明性は大きく、空間を構成する透明性、存在を操作する透明性、光環境において機能する透明性、社会構造を暗示する透明性の4つの傾向に整理することができた。また、透明性の主体と効果のカテゴリーを全体の用法として関連性を考察した結果、効果によって描写される透明性は大きく、領域をつくる透明性、透明性に内在する感性、活動を変容する透明性、人間の知覚に作用する透明性の4つの傾向に整理することができた。

これらを踏まえて、主体・度合い・性質・効果の特徴を重ね合わせることによって考察した結果、建築領域における言語描写としての透明性の多義性として少なくとも24の類型が認められることを明らかにした。これらの透明性は、接続と分離、即物性と現象性、変化と調和、期待と不安など、両義的側面を合わせもち、透明な主体が空間、存在、光、社会といった事象に介在する際に領域、感性、活動、知覚への抽象化を伴い、多義の一側面として表出することが明らかとなった。

注

- 注1) 本章では、透明性の主体、度合い、性質、効果をキーコンテキストから抽出し、これらの語句の描写内容が表す意味と照らし合わせて結論を導出している。そのため、本文中の考察や図中における「」内の記述例では、抽出元となったキーコンテキストを考察内容に合わせて品詞の活用の変換や文章の省略を行い例示しているが、文法上の表現を変えてもこれによる本稿の結論に対しての影響はないものとする。
- 注2) KJ法は、川喜田次郎によって考案された何らかの問題提起から状況把握、そしてそれに対する解決方法のプロセスまでの一連の方法を指し、記述等の定性情報を分類・整理するのに有効な方法として知られている。ここでいうKJ法とは、ある問題をめぐって問題のありうる情報を集め、定性情報とし、全体像を明確にするまでのプロセスを狭義でのKJ法とする。本章では著者を含む3名によってKJ法を行い、それぞれの判断が分かれるところは、そのそれぞれの判断根拠と資料における判断の是非を議論し、合意が得られた段階で再び全ての資料について再度KJ法による分類を試み、最終的に全ての資料について判断が一致するまで繰り返し行うという方法を取っている。(参考文献10)
- 注3) コレスポンデンス分析とは、集計済みのクロス集計結果を使って、行の要素と列の要素を使い、それらの相関関係が最大になるように数量化して行の要素と列の要素を多次元空間（散布図）に視覚化して表現する分析方法を指す。類似度・関係性の強い要素同士は近くに、弱い要素同士は遠くに布置される。ただし、相対的な位置関係であり、絶対的なものではない。このとき、軸がクロスする原点付近に布置される要素は比較的特徴が薄いと解釈できる。なお、原点付近に布置する要素の解釈には注意が必要である。原点付近の行は、原点付近の列に対する組み合わせの頻度が多いとは限らず、原点を離れた様々な方向に布置されている列に対する組み合わせの頻度が均衡した結果、原点近くに布置されている場合がある。そのため、原点付近に布置された行・列を積極的に解釈することは、解釈の妥当性を低めることになり得る。(参考文献11)
- 注4) 本稿における統計の性質上、サンプル数が著しく少ないものについてはコレスポンデンス分析の際に扱っていない。よって、元データの全てが本稿によって得られた24の類型に必ずしも当てはまらないものがないとは断定

できないため、「少なくともA～Xの24の類型が認められた」と表現する。

- 注5) ジェイムス・カーペンター・デザイン・アソシエーツ：グッチ銀座，新建築，p.137，2007.3
- 注6) 菊竹清訓：関西国際空港旅客ターミナルビル設計競技応募案，新建築，p.208，1989.2
- 注7) 指宿真智雄：大同生命京都ビルのデザイン，新建築，p.284，1992.1
- 注8) 八束はじめ＋ユービーエム：天・地・人のフォーリー，新建築，p.195，1999.2
- 注9) SEC：福田別荘，新建築，p.185，1983.2
- 注10) 坂本一成＋本橋良介：空間を統合するスケールの修辭的・意味的配置，新建築，p.62，2009.6
- 注11) 黒川紀章：メルボルン・セントラル＜歴史と現代の共生＞，新建築，p.221，1992.2
- 注12) 手塚建築研究所＋武蔵工業大学手塚研究室＋MIAS：大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2003 越後松之山「森の学校」キョロロ，新建築，p.77，2003.8
- 注13) 船越徹＋ARCOM：横須賀市立横須賀総合高等学校，新建築，p.124，2003.4
- 注14) 渡部和生：養護学校の新しい生活像―街中でのリニューアルモデルとして―，新建築，p.196，2001.7
- 注15) 佐藤総計画：北区中央図書館，新建築，p.142，2009.5
- 注16) 日本設計：アミューゼ柏，新建築，p.177，1999.3
- 注17) トラフ建築設計事務所：NISSAN Y150 ドリームフロント，新建築，p.174，2009.6
- 注18) 宮崎浩／ブランツアソシエーツ：清流寺深沢分寺，新建築，p.130，2005.10
- 注19) 長谷川逸子・建築計画工房：すみだ生涯学習センター，新建築，p.106，1995.1
- 注20) 妹島和世＋西沢立衛／SANNA：サーペンタイン・ギャラリー・パビリオン2009，新建築，p.83，2009.9
- 注21) 元倉眞琴＋山本圭介：立体化されたコミュニケーション空間，新建築，p.217，1997.6
- 注22) 柳澤孝彦：建築の構図，新建築，p.243，1993.8
- 注23) 藤森照信：裸の建物，新建築，p.109，2001.3
- 注24) 内井建築設計事務所：深沢ハウス，新建築，p.205，2005.2
- 注25) 清水建設：学研本社ビル，新建築，p.150，2009.3
- 注26) 清水建設＋秋本和雄：新住宅普及会ビル 辛夷のある事務所，新建築，p.252，1985.3
- 注27) 大江匡／PLANTEC：群馬トヨタビル＋イーストパーク，新建築，p.144，1997.3
- 注28) 伊東豊雄：単純明快さへの回帰，新建築，p.158，1997.9

参考文献

- 1) コーリン・ロウ著，伊藤豊雄，松永安光訳：マニエリスムと近代建築―コーリン・ロウ建築論選集一，彰国社，1981.1
- 2) 成瀬徳行：建築家の言説における受動態の研究 SD REVIEWに見られる建築家のレトリック（その1），日本建築学会計画系論文集，第538号，pp.277-284，2000.12
- 3) 成瀬徳行：建築家の言説における自動詞の研究 SD REVIEWに見られる建築家のレトリック（その2），日本建築学会計画系論文集，第553号，pp.325-332，2002.3
- 4) 成瀬徳行：建築家の言説における補助動詞の研究 SD REVIEWに見られる建築家のレトリック（その3），日本建築学会計画系論文集，第577号，pp.217-224，2004.3
- 5) 井上朝雄，松村秀一：高透過ガラスおよび強化ガラスの開発と日本における建築への適用の史的経緯に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第575号，pp.55-60，2004.1
- 6) ドンダール・ムラツ：ブルーノ・タウトの思索における「ガラス建築」の意図，日本建築学会計画系論文集，第596号，pp.199-205，2005.10
- 7) 北浦かほる：透かしにおける2つの視覚タイプ 透かしの視覚的心理効果の研究（その1），日本建築学会計画系論文集，第470号，pp.105-110，1995.4
- 8) 小泉隆，藤井俊洋，鈴木信宏：入射光の性質からみた落ち着きをもたらす透過光障子面のイメージと連結感及びその作り出し手法，日本建築学会計画系論文集，第457号，pp.117-123，1994.3
- 9) 新建築社：新建築，1945.1-2009.12
- 10) 川喜田二郎：発想法，中央公論社，1967.6
- 11) 内田治：すぐわかるSPSSによるアンケートの相関分析，東京図書，2006.10

5 建築物の言語描写における ＜間＞の多義性

5 - 1 分析の背景と目的

5 - 1 - 1 分析の背景

人間は空間を体感する際に様々な要素を五感で感じ取ること、ある特定の空間として認識し、視覚情報や聴覚情報を通し感情に作用することで空間の質を判断している。空間は様々な要素の集合体で構成されており、主に実体としての空間を構成する空間的要素、人々の滞在を表す時間的要素で構成されていることから、設計者は常に空間と人間の間を考慮し計画を行っていると考えられる。

また、時間と空間の両側面の性質を内包した言語として、日本独自の概念的な言葉である間が一般的に知られている。この間は、読み方の違い、使い方の違いによって様々なニュアンスをもつことから、多様な意味を保有しているといえる。この間のもつ意味合いは、人間が空間を体感する際においても同様のことがいえ、空間を構成しているあらゆる要素や人間といったもの同士のあいだに、互いの関係を担う役割を果たしていると考えられる。例えば、内部空間と外部空間の関係性を考慮する際に、その間に設置しているガラスや壁などが互いの間合いをとるというように、空間を構成する要素同士の関係を保つ役目を果たしているものや、建物と人間の間を考慮する際に、建物と建物のあいだに隙間を設けることで人々の好奇心を奮い立て奥へと導くというように、建物の隙間が行動を誘発する役割を果たしているものなどがある。このように、事物同士のあいだには関係を結ぶ事象としての間が生じていると考えられる。つまり、建築家が建物を計画する際に、複数の要素の関係性を考慮した上で設計を行っていることにより、要素同士のあいだに生じる間には、建築家の独自の解釈の基に多様な意味が形成されるといえる。

5 - 1 - 2 分析の目的

本章では、建築家が自身の建築作品について述べている言語描写を手掛かりに対象となる記述内で、ある一つの言葉と他の語句との関係性を分析するという手法をとり、事物と事物のあ

いだに生じる事象を＜間＞と定義した上で、建築空間と＜間＞に係わる記述を研究対象とする。そして、建築領域における間の言語的価値を再評価する新たな手掛かりとして有効な知見を得るとともに、間の概念の枠組みの一端を明らかにするため、建築物の言語描写における＜間＞の多義性^{注1)}について明らかにすることを目的とする。さらに、本章における＜間＞は、多義性からみる実像と虚像の観点において「空間」の次元を構成するものであり、「空間」において実像と実像の間に生じる＜間＞と虚像の関係を明らかにする際の手掛かりとなるものである(図5-1)。

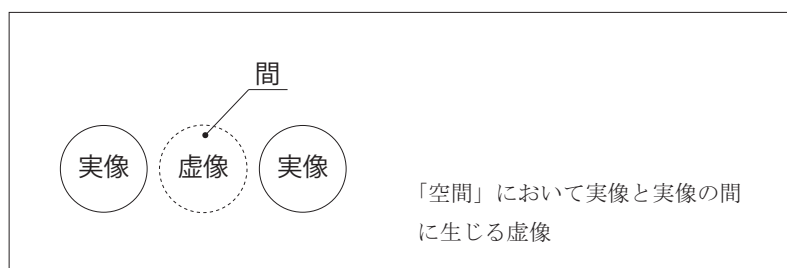


図5-1 <間>からみる実像と虚像の概念

5 - 1 - 3 既往の研究

これまで、間と空間に関する研究としては、柴田晃宏らによる清家清の非住宅作品における柱梁表現が清家清の立面表現における重要な要素の一つと考え、柱と梁のあいだにあたる部分を間と定義し柱梁と間の関係性から清家清の設計手法の一端を明らかにすることを目的とした研究¹⁾や、鈴木隆によるパリの中層、高密度市街地における建物および街区の空間構成と間の関係を間の結合の原理として提示し、近代初期のパリの画地分譲地区の中庭型共同住宅の多様な形態構成を明らかにすることを目的とした研究²⁾が挙げられる。本稿における間の位置づけは、実空間における間のみを捉えているわけではなく、言語描写の中で扱われる間の解釈として捉えて分析を行っている点で異なる立場をとるものである。

次に、建築家の創作論における空間に関する研究として、奥山信一らによる現代住宅作品に関する言説の中から、建築家が思考の上で構想した建築に関する記述を対象として、実体としての建築空間を思考・構成する手法を明らかにすることを目的とした研究³⁾や、塩崎太伸らによる空間という語を用いた創作言語に着目し、その文脈と形式との関係を総体的に捉え、建築設計における根本的な概念としての空間に対する思考の広がりとその方向性を明らかにすることを目的とした研究⁴⁾が挙げられる。

さらに、建築家の言説における時間に関する研究として、水谷友也らによる現代における哲学的な時間の概念に着目し、時間に対する創作の方向性や表現手法を分析し、事例検証を通して時間の概念と表現手法の関係を明らかにすることを目的とした研究⁵⁾や、大嶽陽徳らによる増改築建築の設計論を対象として、時間を認識した根拠と時間のイメージに関する記述の意味

内容を分析することで、建築家の時間の概念に関する思考の枠組みを明らかにすることを目的とした研究⁶⁾が挙げられる。本稿では、建築家の言説を扱う点では既往の研究と同様だが、空間や時間の概念を包含し、事象と事象の関係性のなかで扱われる間という概念の解釈として捉えている点で異なる立場をとるものである。

以上より、本稿では、建築家自身の言語描写の中で間という語がどのように解釈され、建築空間と関わることでどのような多義が生み出されているかについて明らかにすることを目的としている。そのため、建築空間に関わる間についての記述を抽出し、間の種類・間の生じる事物同士の関係・間が空間に及ぼす効果を定義した上で語句同士の客観的な対応関係を分析する。そして、その結果を重ね合わせて語義における類型を導き出し、空間描写の中で帯びる間の多義性について追求するものである。

5 - 1 - 4 分析の手順

本章における分析手順を段階的に示す。

- 5-1) 本章では、建築物の言語描写における〈間〉の意味の一側面を決定づけるための要素として、間の種類・間を生み出す状況・空間効果を定義する。さらに、それぞれの内容のより繊細な差異を分析するために、間を生み出す状況を把握するために、事物を定義し、空間効果を把握するために作用と様態を定義する。
- 5-2) 1950年から2009年までに建築専門誌『新建築』⁷⁾に掲載された作品解説文の中で、建築空間と係わる間について記述された箇所を研究対象として選出する。研究対象とした記述のうち、間の種類・事物・作用・様態についての記述が含まれる文章をキーコンテキスト^{注2)}とする。
- 5-3) キーコンテキストから間の種類・事物^{注3)}・作用・様態に該当する語句を抽出し、カテゴリー分け^{注4)}を行う。カテゴリー分けを行うことにより、日本語の表記における漢字表現、平仮名表現、送り仮名の差異を解消し、建築領域における間を考察することができる。また、カテゴリー分けの方法については、前章までと同様にKJ法を採用するものとする。
- 5-4) 事物と事物、作用と様態においてそれぞれクロス集計を行う。事物と事物の組合せから、間を生み出す状況を考察し、作用と様態の組合せから、間の空間全体に対する効果を空間効果として導出し、特性を考察する。
- 5-5) 並列化した語句を統計処理することで、見えにくくなった多数の語句の相互関係を総体的に把握するために、間の種類と間を生み出す状況、間の種類と空間効果において、それぞれコレスポンデンス分析^{注5)}を行い、分類同士の傾向を考察する。
- 5-6) 5-5) で得られた間の種類・間を生み出す状況・空間効果の傾向の組み合わせを基に全ての資料を相互に比較検討しながら意味内容の枠組みを捉え、〈間〉がもつ側面を相対的に位置づけることにより、それらの類型化及び考察を行い結論を導く。

5 - 1 - 5 分析対象の選定

前章までと同様に『新建築』を研究資料とする。そして、執筆者の作品に対する解説文の文責が明確である 1950 年から 2011 年までを対象期間とし、掲載された建築家自身の作品に対する解説文の中で、建築空間と係わる〈間〉について記述された 711 箇所を研究対象とする（表 5-1）。なお、本章における〈間〉とは、実体のある物体や空間のあいだに生じる隙間や外部空間などの「実空間」、その実空間に象徴的に存在する植物や建具などの「実物」、実体のない思考や現象などのあいだに生じる時間の流れや人間の生活などの「概念」など、抽象具象に関わらず、事物のあいだに生じる事象として定義するものとする。

表 5-1 年別研究対象数

年	対象数	年	対象数
1950～1954	14	1980～1984	89
1955～1959	10	1985～1989	66
1960～1964	20	1990～1994	83
1965～1969	22	1995～1999	111
1970～1974	29	2000～2004	75
1975～1979	47	2005～2009	122
		2010～2011	23
		計	711

5 - 2 用語定義と抽出・分類

5 - 2 - 1 用語の定義

建築物の言語描写における〈間〉の意味の一側面を決定づけるための要素として、間の種類・間を生み出す状況・空間効果を定義する。間の種類とは、建築家が間について記述していることを示す根拠となる語句であり、ふたつの事柄のあいだに表出する空間や概念を表す。間を生み出す状況とは、間がどのような事柄のあいだに表出しているかを表す。間を生み出す状況进行分析するために、間が表出する要因となるふたつの事柄のことを事物と定義する。事物と事物の組合せの相関と傾向を考察したうえで、事物と事物の組合せを間を生み出す状況として導出する。空間効果とは、ふたつの事柄のあいだに表出した間が、間自体の空間や間を含む周囲の空間や人に対して及ぼす印象や様相の変化のことを表す。空間効果を分析するために、主に動詞によって表現される、間によって引き起こされる現象や作用を指す語句を作用、主に名詞や形容詞によって表現される作用の対象や性質を補足する語句を様態と定義する。作用と様態の組合せをもとに、その効果の及ぼす範囲や効果の内容を検討することで、空間効果を導出する。

キーコンテキスト内において、間の種類・事物・作用・様態が組み合わさることにより、間の種類と間を生み出す状況を捉え、建築空間や体験する人に対して特別な効果を引き起こすという一連の流れを表現しているため、建築領域における透明性の意味の一側面を捉えることができる（図5-2）。そこで、キーコンテキスト内において、間の種類・事物・作用・様態に該当する語句を抽出し、分類する（図5-3）。

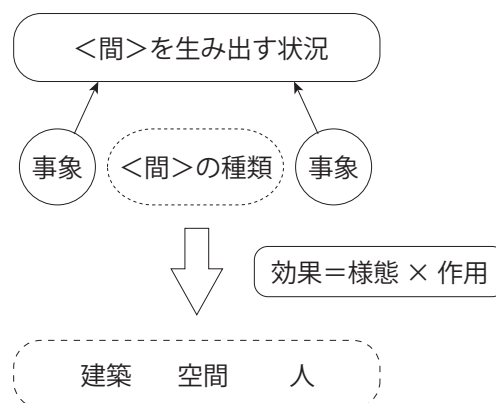


図5-2 建築物の言語描写における〈間〉の流れ

『新建築』1987年4月号 pp.212 専修大学伊勢原セミナーハウス / 松田平田坂本設計事務所					
そこで敷地を最大限に有効に利用する配置計画とするため、ふたつのL字型をした <u>研修棟</u> と <u>生活棟</u> を組み合わせることによって、ふたつの建物によって囲まれた <u>外部空間</u> をつくることで、建物内外の空間が「 <u>一体</u> 」として <u>使われる</u> ようにした。					
	事物	事物	間の種類	作用	様態
抽出例	<u>研修棟</u>	<u>生活棟</u>	<u>外部空間</u>	<u>使われる</u>	<u>「一体」</u>
分類	【建物】	【建物】	{外部空間}	〔利用〕	〔一体感〕

図5-3 キーコンテキストの抽出例

5-2-2 間の種類の分類

間の種類は、事物と事物のあいだに生じる事象となる語句である。そして語句の意味内容を判断しながら、建築物などの具象的事象から人間の生活などの抽象的事象を含む25種のカテゴリーに分類した（表5-2）。

表5-2 間の種類の分類

分類	記述例	箇数	分類	記述例	箇数	分類	記述例	箇数
{建物}	学校	17	{通路}	廊下	61	{開口}	窓	18
{室}	会議室	31	{階段}	階段	21	{建具}	襖	39
{テラス}	テラス	26	{庭}	中庭	72	{素材}	ガラス	34
{設備}	水回り	6	{外構}	擁壁	17	{自然}	山	12
{吹抜け}	吹抜け	15	{入口}	ゲート	18	{植栽}	植樹帯	35
{空間}	空間	42	{領域}	領域	53	{生活}	生活	3
{内部空間}	内部	2	{隙間}	隙間	80	{間}	間	5
{外部空間}	外部	25	{あいだ}	あいだ	29			
{共有空間}	共有空間	4	{部位}	壁	46			

5-2-3 事物の分類

事物は、＜間＞が生じる要因となる事柄を指し示す語句である。抽出した事物を、語句の持つ意味や役割に着目して分類を行い、28種のカテゴリーに分類した（表5-3）。

表5-3 事物の分類

分類	記述例	箇数	分類	記述例	箇数	分類	記述例	箇数
{建築}	建築	12	{共有空間}	共用部	14	{素材}	ガラス	36
{建物}	美術館	409	{歩行空間}	廊下	30	{自然}	自然	18
{室}	部屋	220	{フロア}	1階	30	{植栽}	植木	8
{構造}	架構	12	{庭}	中庭	30	{環境}	環境	4
{形態}	形態	13	{外構}	塀	6	{人間}	人	9
{ボリューム}	ボックス	74	{道路}	道路	37	{行動}	登り	6
{敷地}	敷地	11	{領域}	ゾーン	17	{時間}	時間	2
{空間}	空間	17	{都市}	都市	13	{概念}	抽象	4
{内部空間}	内部	129	{部位}	柱	100			
{外部空間}	外部	148	{建具}	障子	13			

5 - 2 - 4 作用の分類

作用は、＜間＞によって引き起こされる現象や作用を指し示す語句である。抽出した作用を、＜間＞が引き起こす現象の影響や機能に着目して分類を行い、43 種のカテゴリーに分類した（表 5-4）。

表 5-4 作用の分類

分類	記述例	箇数	分類	記述例	箇数	分類	記述例	箇数
曖昧	曖昧にし	11	象徴	象徴する	8	表現	表現する	4
悦楽	樂します	2	滲出	滲み出す	6	表出	表われる	5
演出	演出する	7	創出	生み出す	36	付与	与える	26
拡張	広がる	11	想像	想像する	5	分節	区切る	17
確保	確保する	33	増幅	増す	25	変化	変化する	12
可視	見える	9	促進	促す	6	保護	守る	12
感受	感じる	36	対峙	対峙する	4	保持	もたせる	18
緩和	和らげる	8	調節	調節する	13	明確	明確にする	4
機能	機能する	17	沈静	沈静する	2	誘導	導く	8
共生	共生する	4	通過	抜ける	16	融和	融合する	18
強調	強める	4	提供	提供する	9	利用	利用する	6
形成	形成する	45	転化	～になる	75	連結	接続する	51
向上	向上する	8	展開	展開する	5	連続	連続する	12
遮断	遮る	38	投影	映し出す	4			
消失	なくす	5	導入	取り込む	66			

5 - 2 - 5 様態の分類

様態は、作用の対象や性質を補足する語句である。抽出した様態を、作用が及ぶ範囲や程度に着目して分類を行い、72 種のカテゴリーに分類した（表 5-5）。

表 5-5 様態の分類

分類	記述例	箇数	分類	記述例	箇数	分類	記述例	箇数
〔圧迫感〕	圧迫感	5	〔形態〕	形態	4	〔動線〕	動線	4
〔安全〕	安全	3	〔気配〕	気配	5	〔都市〕	街	8
〔一体感〕	一体	14	〔建築と自然〕	建築と自然	3	〔内外〕	内外	35
〔陰影〕	日陰	2	〔行為〕	行為	3	〔内部空間〕	内部	6
〔影響〕	影響	6	〔高揚感〕	高揚感	2	〔和風〕	和風	5
〔縁側〕	縁側	4	〔交流〕	交流	12	〔人間〕	人	10
〔奥行〕	奥行	4	〔シーケンス〕	シーケンス	7	〔人と物〕	人とうつわ	1
〔音〕	騒音	18	〔視界〕	視線	31	〔人と車〕	人と車	1
〔快適性〕	快適	8	〔時間〕	時間	2	〔人と都市〕	人と都市	1
〔外部空間〕	外界	10	〔刺激〕	刺激	3	〔躍動感〕	ダイナミズム	4
〔外部負荷〕	外部負荷	5	〔自然〕	自然	22	〔場所〕	場	22
〔開放感〕	開放性	15	〔室〕	個室	10	〔光〕	日光	57
〔回遊性〕	回遊	5	〔植栽〕	樹木	9	〔表情〕	表情	4
〔風〕	通風	27	〔心情〕	気持ち	8	〔広がり〕	広がり	12
〔活気〕	賑わい	3	〔スケール〕	スケール	3	〔風景〕	景色	27
〔環境〕	環境	7	〔生活〕	生活	2	〔ブライバシー〕	ブライバシー	15
〔関係〕	関係	16	〔静謐〕	静か	3	〔雰囲気〕	雰囲気	2
〔緩衝帯〕	バッファ	45	〔存在〕	存在	4	〔閉塞感〕	閉塞感	3
〔季節〕	四季	3	〔建物〕	住宅	9	〔間〕	間	1
〔役割〕	機能	5	〔多様性〕	多様性	3	〔流動性〕	流動的	6
〔境界〕	境界	22	〔創造力〕	創造力	3	〔領域〕	領域	20
〔共有空間〕	共有空間	5	〔道〕	道	11	〔つながり〕	結びつき	5
〔距離〕	距離	15	〔出会〕	出会い	4	〔連続性〕	連続性	15
〔緊張感〕	緊張感	4	〔透明〕	透明性	4			
〔空間〕	空間	29						

5 - 3 間を生み出す状況と空間効果の導出

5 - 3 - 1 事物と事物の組合せの相関

本章における＜間＞は事物と事物のあいだに生じる事象と定義しているため，事物と事物の組合せの傾向と相関を分析することにより，どのような状況において＜間＞が生じているかを整理することができる。そこで，事物と事物のクロス集計表を作成した（表5-6）。次にクロス集計を基に，組合せの相関の割合を算出し，事物同士の結びつきの強さを示す相関図を作成した（図5-4）。

以下に抽出数が特に多かった事物に対しての考察を述べる。

【建物】は【建物】と強い相関を示した。これは，「美術館」や「学校」といった建築物全体を示す記述であり，設計者が建物全体としての構成や，周辺の建物との関係を図ろうとしていることがわかる。そのため，建築物同士のあいだの外部空間との結びつきを促進するための事象として＜間＞を捉えていると考えられる。

表5-6 事物と事物のクロス集計表

	フロア	ボリューム	外構	外部空間	概念	環境	共有空間	空間	形態	建具	建築	建物	構造	行動	時間	自然	室	植栽	人間	素材	庭	都市	歩行空間
フロア	15																						
ボリューム		36																					
外構												2					1						
外部空間			2	2													7				2		1
概念					2																		
環境								2															
共有空間								1									8						
空間								5									2						
形態									6														
建具										6													
建築																2							
建物			1	1			1					178					4				7	4	4
構造													6										
行動														3									
時間															1								
自然											6					2							
室				3		2	1	2									72				14		7
植栽																		3					
人間																			2				2
素材																				17			
庭											2						1						
都市											2						3		1				
歩行空間												7					5						
道路				1								1					2				1		3
内部空間				118																	1	3	
敷地																							
部位										1		8					1						1
領域												1											
総計	15	36	3	125	2	2	5	10	6	7	10	197	6	3	1	4	106	3	5	19	25	7	18

【室】は【室】と強い相関を示した。これは、「教室」や「居室」といった部屋単位を示す記述であり、主に部屋同士のつながりを設計意図として考慮していることがわかる。そのため、部屋と部屋のあいだに存在する動線空間や庭などの外部空間との関わりを促進するための事象として＜間＞を捉えていると考えられる。

【外部空間】は【内部空間】と強い相関を示した。これは、【内部空間】と同様に内外空間の関係を設計者がよく考えているためだということがわかる。

【内部空間】は【外部空間】と強い相関を示した。これは、設計者が内部と外部の空間の関係性をよく考えていることがわかる。そのため、内外空間を接続、遮断、調和するための事象として＜間＞を捉えていると考えられる。

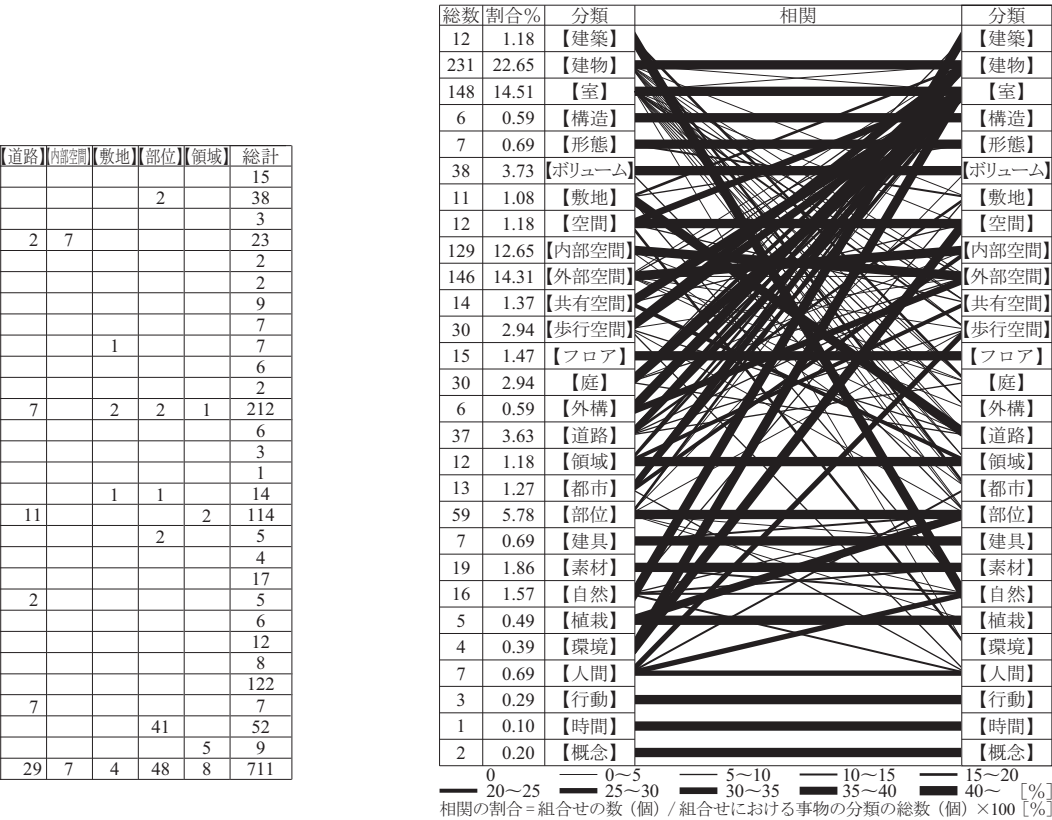


図 5-4 事物の組合せの傾向と相関

5 - 3 - 2 事物と事物の組合せからみる間を生み出す状況

事物と事物のあいだに＜間＞が生じるという観点から、事物と事物の組合せを整理することにより、間を生み出す状況を導出することができる。事物と事物の全ての組合せから、間を生み出す状況として67種の組合せを得ることができた（表5-7）。

以下に、間を生み出す状況として特徴的な繋がりについて述べる。

【建築】、【自然】といった抽象的な事物は互いに強い相関を示したことから、実体として捉えることのできない事物同士であり、設計者が常に建築と自然の関係性について考慮していることがわかる。そのため、抽象的な事物の調和を図る媒体として＜間＞を捉えていると考えられる。

【建物】、【室】といった建物を構成している具体的な事物は、どの事物とも組み合わせやすい傾向がみられたことから、設計者が建物全体の構成や部屋との繋がりなどをよく考慮し計画を行っていることがわかる。そのため、建物や部屋と周囲との関係をもつ事象を＜間＞と捉えていると考えられる。

【内部空間】と【外部空間】は互いに強い相関を示したことから、設計者が建物内部と外部の関係をよく考慮していることがわかる。そのため、内部空間と外部空間を隔てる、もしくは接続する媒体として＜間＞を捉えていると考えられる。

【行動】、【時間】、【概念】は同じ事物同士とだけの相関を示したことから、実体をもたないこれらの要素は実際の建築空間ではなく、空間を体感する人間と＜間＞の関係から感情を喚起する媒体として捉えられていると考えられる。

【建物】、【室】、【内部空間】、【外部空間】といった事物は比較的抽出数が多かったことから、設計者が建物を計画する際に常に考慮している事物であることがわかり、それらの関係から＜間＞が創出されやすいことを示している。また、同じ事物同士で組み合わせる傾向が強いものが多かったことから、設計者は同じ事物のあいだの＜間＞について深く考慮していると考えられ、それらの関係から空間を創出しやすい傾向があるといえる。

表5-7 間を生み出す状況

分類	箇数	分類	箇数	分類	箇数	分類	箇数	分類	箇数
《築・庭》	2	《建・部》	10	《形・形》	6	《外・庭》	2	《部・植》	2
《築・都》	2	《室・室》	72	《形・敷》	1	《外・構》	2	《具・具》	6
《築・自》	8	《室・空》	4	《敷・道》	7	《外・道》	3	《素・素》	17
《建・建》	178	《室・外》	10	《敷・自》	1	《共・領》	1	《素・自》	2
《建・室》	4	《室・共》	9	《ボ・ボ》	36	《歩・道》	3	《自・自》	2
《建・敷》	2	《室・歩》	12	《ボ・部》	2	《歩・部》	1	《自・人》	2
《建・外》	1	《室・庭》	15	《空・空》	5	《歩・人》	2	《植・植》	3
《建・共》	1	《室・構》	1	《空・共》	1	《フ・フ》	15	《人・人》	2
《建・歩》	11	《室・道》	13	《空・環》	2	《庭・道》	3	《行・行》	3
《建・庭》	7	《室・領》	4	《内・外》	125	《領・領》	5	《時・時》	1
《建・構》	3	《室・都》	3	《内・庭》	1	《都・人》	1	《概・概》	2
《建・道》	8	《室・部》	1	《内・都》	3	《部・部》	41		
《建・領》	2	《室・環》	2	《外・外》	2	《部・具》	1		
《建・都》	4	《造・造》	6	《外・歩》	1	《部・自》	1		

※《 》内の言葉は事物の分類の頭文字を示しており、
【建築】は築、【構造】は造、【外構】は構、【建具】は具と表記している。

5 - 3 - 3 作用と様態の組合せからみる空間効果

＜間＞と空間全体との関係を考察するために、作用と様態の組合せによるクロス集計表を作成した（表 5-8）。

作成したクロス集計表を基に、設計者が＜間＞に見出した性質や役割を判断しながら整理することで、＜間＞の空間全体に対する効果として 52 種の空間効果を導出することができた（表 5-9）。それらの意味内容を考察した結果、人間の認識に着目した現象的側面、空間の向上性に着目した機能的側面、人間に引き起こる心情に着目した感情的側面の 3 つの枠組みで捉えることができた。

表5-8 作用と様態

	〔悦楽〕	〔演出〕	〔可視〕	〔拡張〕	〔確保〕	〔感受〕	〔緩和〕	〔機能〕	〔共生〕	〔強調〕	〔形成〕	〔向上〕	〔遮断〕	〔消失〕	〔象徴〕	〔創出〕	〔想像〕	〔増幅〕	〔促進〕	〔対峙〕	〔調節〕	〔沈静〕
シーケンス			1													4						
〔スケール〕						1																
プライベート					4							1						3			1	
〔圧迫感〕							3							2								
〔安全〕					3																	
〔一体感〕		1				4									1	1						
〔陰影〕											2											
〔影響〕																						
〔縁側〕								2														
〔奥行〕						1												1				
〔音〕													17									
〔回避性〕																		1	3			
〔快適性〕					1	1						1				2		1				
〔開放感〕					4	1										2		1				
外部空間			1	2		1										2						
外部負荷							2						3									
〔活気〕																1						
〔環境〕								1			1	2									1	
〔緩衝帯〕								2			1											
〔間〕																1		5				
〔関係〕											3		2			1						
〔気配〕						5																
〔季節〕	1																	1				
〔距離〕		1			2	1					3					6						
共有空間				1							3											
〔境界〕								7			1			1			1				3	
〔緊張感〕						1										1		1				
〔空間〕		3	1	1	2	1					3	2				3						
〔形態〕																						
健康と自然									2													
〔建物〕						1									1					1		
〔交流〕		1						1				1				1		5	1			
〔光〕					4								3		1		1				1	
〔広がり〕						2									1	1		1				
〔行為〕			1																1			
〔高揚感〕																			1			
〔刺激〕						1																
〔視界〕				4	1							1	7									
〔時間〕						1																
〔自然〕			2			4	2		1		1				1		2			1		
〔室〕				1		2		1			1									1		
〔植栽〕																						
〔出会〕		1														1						
〔場所〕					1			1			2					1						
〔心情〕						1														3	2	
〔人と車〕																						
人と都市																						
人と物																				1		
〔人間〕	1							1														
〔生活〕																						
〔静謐〕						1									1							
〔存在〕						2				2												
〔多様性〕											1					2						
〔知力〕																1		1				
〔道路〕				1							2		1			1						
〔都市〕											1				1							
〔透明〕																						
〔動線〕											1										1	
〔内外〕							1		1				1				1					
内部空間			2	1		1																
〔和風〕																	1					
〔躍動感〕																2						
〔表情〕																						
〔風〕					4								2									
〔風景〕					4	1					13											
〔雰囲気〕																						
〔閉塞感〕					1									2								
〔役割〕																						
〔流動性〕													2		1							
〔領域〕					1						5							1				
〔つながり〕								1													3	
〔連続性〕			1		1	2				2	1					2		3				
総計	2	7	9	11	33	36	8	17	4	4	45	8	38	5	8	36	5	25	6	4	13	2

のクロス集計表

通過	提供	展開	転化	投影	導入	表現	表出	付与	分節	変化	保護	保持	明確	誘導	融和	利用	連結	連続	曖昧	滲出	総計
		1								2								1			7
											6										3
																					15
																					5
																					3
			2									3				2					14
																					2
								6													6
			2																		4
						1						1									4
						1															18
									1												5
																2					8
	1		2				1				3										15
								1						1	2						10
														1						1	5
																					3
				1							1										7
			42																		45
									2			1			1		1				1
																					16
								1													5
									1												3
						1						1									15
			1																		5
			4																5		22
								1													4
		1	3						3	1					2		3				29
							1						3								4
															1						3
1																1		4			9
															1		1				12
1	1				45					1											57
		1						4				2							1		12
								1													3
									2												2
																					3
2					1					2				1	2		10				31
	1																				2
				1	3											1	2	1			22
			2														2				10
				2	5												1				9
	2																				4
	1		15													1					22
	1									2											8
									1												1
																	1				1
1											1			4			2				10
												1								2	2
																					3
																					4
																					3
		1																			3
			2			1											1	2			11
						1			1		3			1			1				8
							2					1									4
													1				1				4
									6							6	13	6			35
											1								1		6
						1	1													2	5
							2														4
				1	1	1				1											4
11					10																27
	1	2						2				1					3				27
								1												1	2
																					3
												1					4				5
												1						1			6
								1	3	1					2		1		5		20
												1									5
								1		1											15
16	9	5	75	4	66	4	5	26	17	12	12	18	4	8	18	6	51	12	11	6	711

以下に3つの枠組みを捉える上で特徴的な空間効果について述べる。

現象的側面:《奥行の創出》は、〔奥行〕と〔感受〕,〔表出〕などの組合せにみられた。「奥の座敷まで見えていて、奥行きの深さを出している」といった記述から、設計者が人間に空間の広がりを感じさせようとしていることがわかる。そのため、〈間〉に奥の空間まで視界を拡張させるための機能をもたせていると考えられる。《シークエンスの創出》は、〔シークエンス〕,〔内部空間と〔創出〕,〔可視〕などの組合せにみられた。「街に開かれた豊かなシークエンスをつくり出している」といった記述から、設計者が周辺の街並に対して視覚的な繋がりを考慮していることがわかる。そのため、〈間〉に視界の連続的な繋がりを形成する機能をもたせていると考えられる。また,《和の滲出》は、〔日本製〕と〔滲出〕,〔想像〕などの組合せにみられた。「固有の表情が互いに響きあいながら和風の佇いを醸し出すようにしている」といった記述から、設計者が日本の雰囲気が漂う空間を計画していることがわかる。そのため、〈間〉に日本の性質を兼ね備えた機能をもたせていると考えられる。《多様な距離の創出》は、〔距離〕,〔人と物〕と〔保持〕,〔創出〕などの組合せにみられた。「これらのボイドは、それぞれの都市と部屋の間には適度な距離を発生させる」といった記述から、設計者が建物内部と外部の都市とのあいだの空間について考慮していることがわかる。そのため、〈間〉に関係を保つ適度な距離を与える機能をもたせていると考えられる。これらより、現象的側面には人間の視覚情報に作用し、空間を認識させることで新たな付加要素を生み出していると考えられる。

機能的側面:《光の導入》は、〔光〕と〔導入〕,〔通過〕などの組合せにみられた。「室内に柔らかな光を充満させていく」といった記述から、設計者が光を導き入れることで室内環境を向上させようとしていることがわかる。そのため、〈間〉に光を内部空間まで導き入れる機能をもたせていると考えられる。《風景の確保》は、〔季節〕,〔自然〕と〔展開〕,〔悦楽〕などの組合せにみられた。「太田川河岸の自然景観を視覚的にとりこみ」といった記述から、設計者が自然への視覚的な繋がりを考慮していることがわかる。そのため、〈間〉に自然を見渡すことのできる機能をもたせていると考えられる。また,《空間の拡張》は、〔境界〕,〔通路〕と〔消失〕,〔拡張〕などの組合せにみられた。「境界をなくすということ」といった記述から、設計者が空間を分節している境界について考慮していることがわかる。そのため、〈間〉に空間の境界として存在する事物を消失させる機能をもたせていると考えられる。《境界の自在化》は、〔境界〕,〔連結〕と〔調節〕などの組合せにみられた。「内外の結びつきを自在にコントロールできる」といった記述から、設計者が内外空間の結びつきを考慮していることがわかる。そのため、〈間〉に内外空間の接続、分節を自由に可能にする機能をもたせていると考えられる。これらより、機能的側面は単体の空間の環境を向上させるとともに、空間の利便性を増幅させていると考えられる。

感情的側面:《感情の変化》は、〔高揚感〕,〔心情〕と〔付与〕,〔変化〕などの組合せにみられた。「ドラマへの期待をかき立てて気分の高揚を促す重要な役割をもつ」といった記述から、設計者が空間を体感する際の人間の感情に着目していることがわかる。そのため、〈間〉に気分転換を行う機能をもたせていると考えられる。《心情の整理》は、〔心情〕と〔沈静〕,〔調節〕などの組合せにみられた。「建物に辿り着くまでの〔間〕が心の準備をさせる」といっ

た記述から、設計者が空間から別の空間に移り変わる際の気持ちの変化について考慮していることがわかる。また、《圧迫感の緩和》は、〔圧迫感〕と〔消失〕、〔緩和〕などの組合せにみられた。「近隣へ圧迫感を与えることなく」といった記述から、設計者が周辺地域へ影響を及ぼさないようにしていることがわかる。そのため、＜間＞に周辺環境への影響を和らげる機能をもたせていると考えられる。《緊張感の創出》は、〔緊張感〕と〔増幅〕、〔付与〕などの組合せにみられた。「建物と建物、建物と自然との間に緊張感を生み出そうとした」といった記述から、設計者が建物と自然の結びつきを考慮し、その関係性を雰囲気として表していることがわかる。そのため、＜間＞に事物同士を結びつけ不可視な関係を形成する機能をもたせていると考えられる。これらより、感情的側面は空間内の雰囲気を感じさせることで、人間の心情に作用し空間を把握させていると考えられる。

表 5-9 様態と作用の組合せによる空間効果

種類	〔様態〕と〔作用〕の組合せ例	箇条
《圧迫感の緩和》	〔圧迫感〕 - 〔消失〕, 〔緩和〕	5
《インパクトの付与》	〔刺激〕 - 〔付与〕 / 〔躍動感〕 - 〔創出〕	13
《奥行の創出》	〔奥行〕 - 〔表出〕, 〔感受〕	2
《外部負荷の軽減》	〔外部負荷〕, 〔音〕 - 〔遮断〕	31
《開放性の獲得》	〔開放感〕 - 〔感受〕, 〔保持〕	14
《緩衝帯の出現》	〔緩衝帯〕 - 〔転化〕, 〔機能〕	45
《感情の変化》	〔高揚感〕 - 〔付与〕 / 〔心情〕 - 〔変化〕	10
《機能の変容》	〔場所〕 - 〔転化〕 / 〔縁側〕 - 〔機能〕	59
《境界の自在化》	〔境界〕 - 〔調節〕	6
《境界の創出》	〔内外〕 - 〔分節〕 / 〔空間〕 - 〔分節〕	22
《共用部の形成》	〔共有空間〕 - 〔形成〕	3
《緊張感の創出》	〔緊張感〕 - 〔増幅〕, 〔付与〕	4
《緊密さの拡大》	〔関係〕 - 〔増幅〕	5
《空間の一体化》	〔一体感〕 - 〔創出〕 / 〔空間〕 - 〔融和〕	52
《空間の拡張》	〔広がり〕 - 〔付与〕 / 〔室〕 - 〔連結〕	31
《空間の向上》	〔空間〕 - 〔向上〕 / 〔開放感〕 - 〔転化〕	5
《景観の形成》	〔風景〕 - 〔形成〕 / 〔風景〕 - 〔連結〕	18
《形態の視覚化》	〔形態〕 - 〔明確〕, 〔表出〕	4
《気配の漂い》	〔気配〕 - 〔感受〕 / 〔雰囲気〕 - 〔滲出〕	7
《シーケンスの創出》	〔シーケンス〕 - 〔創出〕, 〔連続〕	9
《視界の拡張》	〔視界〕 - 〔通過〕 / 〔内部空間〕 - 〔可視〕	20
《時間の提供》	〔時間〕 - 〔提供〕	2
《自然との共生》	〔自然〕 - 〔連結〕, 〔共生〕	16
《視線の遮断》	〔視界〕 - 〔遮断〕	7
《自然の導入》	〔植栽〕 - 〔導入〕 / 〔自然〕 - 〔想像〕	10
《自由な活動》	〔回遊性〕 - 〔促進〕 / 〔動線〕 - 〔形成〕	6
《周辺環境との調和》	〔環境〕 - 〔形成〕, 〔導入〕	9
《心情の整理》	〔心情〕 - 〔沈静〕, 〔調節〕	5
《人物の誘引》	〔人間〕 - 〔誘導〕	5
《スケールの変化》	〔スケール〕 - 〔変化〕	2
《存在の強調》	〔存在〕 - 〔感受〕 / 〔連続性〕 - 〔強調〕	10
《建物の象徴性》	〔建物〕, 〔広がり〕 - 〔象徴〕	4
《建物の統合》	〔一体感〕 - 〔感受〕 / 〔建物〕 - 〔連結〕	11
《多様性の創出》	〔多様性〕 - 〔創出〕, 〔形成〕	3
《多様な距離の創出》	〔距離〕 - 〔創出〕, 〔演出〕	18
《知的活動の活性化》	〔知力〕 - 〔展開〕 / 〔行為〕 - 〔促進〕	4
《繋がり形成》	〔動線〕 - 〔連結〕 / 〔視界〕 - 〔連結〕	26
《出会の提供》	〔出会〕 - 〔増幅〕 / 〔交流〕 - 〔演出〕	17
《透明性の表現》	〔透明〕 - 〔表現〕, 〔付与〕	4
《都市との接続》	〔都市〕 - 〔連結〕, 〔誘導〕	8
《賑わいの創出》	〔活気〕 - 〔創出〕 / 〔行為〕 - 〔連続〕	6
《人間の保護》	〔安全〕 - 〔確保〕 / 〔人間〕 - 〔保護〕	5
《場の創出》	〔外部空間〕 - 〔創出〕 / 〔場所〕 - 〔提供〕	19
《光の導入》	〔光〕 - 〔導入〕, 〔確保〕	53
《風景の確保》	〔風景〕 - 〔提供〕 / 〔自然〕 - 〔可視〕	18
《不明瞭な境界》	〔境界〕 - 〔想像〕 / 〔領域〕 - 〔曖昧〕	12
《プライバシーの確保》	〔プライバシー〕 - 〔保護〕, 〔向上〕	15
《街並の形成》	〔都市〕 - 〔保護〕, 〔形成〕	7
《間の創出》	〔間〕 - 〔創出〕	1
《安らぎの形成》	〔快適性〕 - 〔増幅〕 / 〔人間〕 - 〔悦楽〕	12
《流動する風》	〔風〕 - 〔通過〕	26
《和の滲出》	〔和風〕 - 〔滲出〕, 〔想像〕	5

5 - 4 相関の整理

5 - 4 - 1 間の種類と間を生み出す状況のコレスポネンス分析

表 5-10 間の種類と間を生み

	あいだ	テラス	開口	階段	外構	外部空間	間	共有空間	空間	隙間	建具	建物	自然
《フ・フ》	3			2					1				1
《ボ・ボ》		3		3					3	13			
《ボ・部》													
《外・外》										1			
《外・構》													
《外・庭》													
《外・歩》											1		
《外・道》										2			
《概・概》													1
《共・領》													
《具・具》	6												
《空・環》													
《空・共》								1					
《空・空》							2						
《形・形》									2	4			
《形・敷》									1				
《建・外》									1				
《建・共》											1		
《建・建》	7	5		9	5	13			11	32		8	3
《建・構》									1				
《建・室》													
《建・庭》						5							
《建・都》									4				
《建・歩》								1	2				
《建・道》				1	1				2				
《建・敷》					2								
《建・部》									4	3			
《建・領》													
《行・行》							2		1				
《時・時》									1				
《自・自》												2	
《自・人》													
《室・外》						1						1	
《室・環》		2											
《室・共》											5		
《室・空》											1		
《室・構》													
《室・室》	1	4	2	1				2		11	1		
《室・庭》	2	2	1		4								
《室・都》													
《室・歩》			1								4		
《室・道》				2	2	2					3		
《室・部》												1	
《室・領》													
《植・植》										2			
《人・人》												2	
《素・自》													
《素・素》	2								1				
《造・造》											3		
《築・自》												1	3
《築・都》													
《築・庭》						2							
《庭・道》					2								
《都・人》													
《歩・人》													
《歩・道》													
《歩・部》													
《内・外》	2	9	10		1	2			6	1	17		3
《内・庭》													
《内・都》												3	
《敷・自》													
《敷・道》													
《部・具》	1												
《部・自》				1									
《部・植》	2												
《部・部》	3	1	4	2			1		1	11	2		
《領・領》													
総計	29	26	18	21	17	25	5	4	42	80	39	17	12

間の種類と間を生み出す状況の相関の傾向を把握するため、コレスポンデンス分析を行う。そのため、間の種類と間を生み出す状況を分類、導出し、キーコンテキスト内の組合せを基にクロス集計を行った。その結果、組合せ総数として延べ711の組合せを得ることができた。クロス集計の結果からクロス集計表を作成する（表5-10）。

出す状況のクロス集計表

{室}	{植栽}	{吹抜け}	{生活}	{設備}	{素材}	{通路}	{庭}	{内部空間}	{入口}	{部位}	{領域}	総計
2		6										15
		1			3	4	6					36
									2			2
											1	2
						2						2
					2							2
												1
	1											3
					1						1	2
												1
						2						6
							2					2
												1
							2				1	5
												6
												1
												1
11	7	6		3	4	16	26		6	3	3	178
							2					3
	1					3						4
										2		7
												4
										4	4	11
	1						2			1		8
												2
2							1					10
1										1		2
												3
												1
												2
	1				1	3				1	2	10
					4							2
												9
2	1											4
						1						1
9		1		1	1	15	16			5	2	72
	1				2	3						15
							3					3
		1			4		1				1	12
	4											13
												1
1			2									4
	1											3
												2
							2					2
	1										13	17
										3		6
											4	8
											2	2
												2
1												3
											1	1
											2	2
	3											3
						1						1
	8		1		10	6	7		10	24	8	125
							1					1
												3
	1											1
	3					4						7
												1
												1
												2
					2	1	3	2		2	6	41
2	1			2								5
31	35	15	3	6	34	61	72	2	18	46	53	711

クロス集計表を基にコレスポンド分析を行い、間の種類と間を生み出す状況の関連の強さをグラフ上の距離に転換して模式化し傾向を整理した（図5-5）。そして、グラフ上に布置されたカテゴリーの位置関係から領域の方向性を定め、グラフの原点から周縁部までのカテゴリーを原点からの距離に比例して比重を置いて解釈した結果、人の感性に働く＜間＞、身体を介在する＜間＞、状態を構築する＜間＞の3つの傾向に整理することができた。

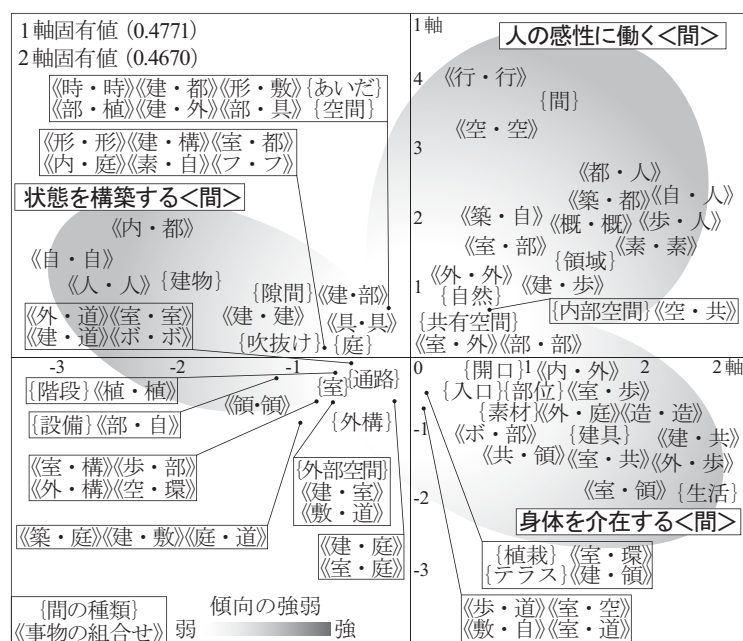


図5-5 間の種類と間を生み出す状況のコレスポンド分析散布図

以下に、それぞれの傾向を構成するのに大きく起因している周縁部の要素の組合せについて述べる。

人の感性に働く＜間＞：《行・行》は、{間} と組み合わせたり、「登りと降りの往復運動から生まれるひとこまの間」などの描写より、人間の行為により連続的に変化する景色の一瞬を＜間＞と捉えている。また、《空・空》は、{間} や {領域} などと組み合わせたり、「空間と空間が、間を発生させる」や「隣り合う空間同士が重なり合って、そこに、編み目のような中間領域が生まれる」などの描写より、抽象的な空間同士の関係から創出される曖昧な領域を＜間＞と捉えている。また、《歩・人》、《都・人》、《自・人》は、{領域} と組み合わせたり、「自然と人間をつなぐ中間領域」や「都市と私を遮りつつ繋ぐ、懐の深い中間領域」などの描写より、人間を軸に考慮しそれらと抽象的な事物の自然や都市といったものとの関係から、人間の視覚、聴覚といった五感で感じるものや動きの中で変化していく場面を＜間＞と捉えている。さらに、《築・自》は、{領域} や {自然} などと組み合わせたり、「建築と自然の中間領域」や「自然と建築、それらをつなぐ水面」などの描写より、建築と自然といった抽象的な事物同士の関係に生じる特定することのできない領域を＜間＞と捉えている。これらは、実体をもたない事物が人間の感性に働きかける＜間＞の性質が表現されている。

身体を介在する〈間〉：《室・共》は、{建具}や{素材}と組み合わせり、「共用スペースと個室はガラスと扉で仕切られ」や「食堂と1m下ったコモンスペースの間で」などの描写より、事物の境界部分に見出された身体的なスケールの事象を〈間〉と捉えている。また、《室・領》は、{建具}や{生活}と組み合わせり、「教室とメディアスペースとの境界部分は、基本的にはガラスの建具で仕切られて」といった描写より、異なる機能をもつ領域のあいだに空間を拡張する操作性のある部位を〈間〉と捉えている。《建・共》も、{建具}と組み合わせり、「教室棟と公共部の間には屋内の門というべきドアが設けられている」といった描写より、公共空間と専有空間の境界として存在する建具を〈間〉と捉えている。さらに、《建・歩》は、{部位}や{領域}と組み合わせり、「オープンスペースによって、建物と街路はソフトに隔てられ」や「外廊下と住戸との緩衝空間としての半公共空間を導入している」などの描写より、建物と人々の移動する空間の関係に着目しており、それらの関係を緩衝する領域を〈間〉と捉えている。これらは、身体的なスケールの事象を介在させることで規定される〈間〉の性質が表現されている。

状態を構築する〈間〉：《建・建》は、{隙間}や{建物}などと組み合わせり、「住棟間のスリット」や「新本館と実験棟との棟間は」などの描写より、隣り合う建物の間に生まれるスペースを〈間〉と捉えている。また、《自・自》、《人・人》、《内・都》は、{建物}と組み合わせり、モールは学校内部の領域と外の都市的空間とをゆるやかに結びつけ」や「この学校が今後市民と生徒を繋ぐ場として」などの描写より、自然と自然や人間と人間の交流を促進させる事物としての建築物全体を〈間〉と捉えている。これらは、空間全体における状態を構築する〈間〉の性質が表現されている。

5 - 4 - 2 間の種類と空間効果のコレスポンド分析

間の種類と空間効果の相関の傾向を把握するため、コレスポンド分析を行う。そのため、間の種類と空間効果を分類、導出し、キーコンテキスト内の組合せを基にクロス集計を行った。その結果、組合せ総数として延べ711の組合せを得ることができた。クロス集計の結果からクロス集計表を作成する（表5-11）。

クロス集計表を基にコレスポンド分析を行い、間の種類と空間効果の特性の関連の強さ

表5-1 1 間の種類と

	あいだ	テラス	開口	階段	外構	外部空間	《間》	共有空間	空間	隙間	建具	建物	自然
《インパクトの付与》		1		1					1		1	2	2
《シーケンスの創出》	1			1		2				1			
《スケールの変化》		2											
《プライバシーの確保》				1	2				1		1		
《圧迫感の緩和》										2		1	
《安らぎの形成》				1					1				
《奥行の創出》	1												
《開放性の獲得》		1				1			1	4			
《外部負荷の軽減》	4			1	2						3	1	
《街並の形成》									1			3	
《感情の変化》	1			1	1	2	1		1	1			
《緩衝帯の出現》	2	4			2	2		1	4	2	1	2	
《間の創出》													
《機能の変容》	2	2	1		1	5		1	5	10	2	1	1
《気配の漂い》	1									1	1		
《共用部の形成》										1			
《境界の自在化》											6		
《境界の創出》	1	1	2		2				1		1		
《緊張感の創出》			1	1						1			
《緊密さの拡大》			2										
《空間の一体化》	3	4	3	1		1			4		5		1
《空間の拡張》		2	1	1					1	4	3		
《空間の向上》			1			1			1		1		
《形態の視覚化》		1		1									
《景観の形成》		2		2					1			2	2
《繋がりの形成》	1		1	2	3				2	4	1		2
《建物の象徴性》													1
《建物の統合》						1			2		1		
《光の導入》	2	1	1	2		2			1	13	3		
《視界の拡張》	2					1				4	1		
《視線の遮断》				1									
《時間の提供》									1				
《自然との共生》	1				1	1	1			1	2	1	
《自然の導入》										2			
《自由な活動》		1							1	1			
《周辺環境との調和》				1			1	1		1			2
《出会の提供》			1							1		1	1
《場の創出》	2		1		1	2			3				
《心情の整理》	1	1							1				
《人間の保護》													
《人物の誘引》						1				3			
《存在の強調》			1	1	1				1	1			
《多様な距離の創出》	1					2			1	3	1		
《多様性の創出》													
《知的活動の活性化》		1					1						
《都市との接続》									1	2	1		
《透明性の表現》												2	
《賑わいの創出》		1						1	2	1		1	
《不明瞭な境界》	1	1							1		2		
《風景の確保》	1		1		1					7	1		
《流動する風》	1			2		1			2	9	1		
《和の滲出》			1				1						
総計	29	26	18	21	17	25	5	4	42	80	39	17	12

空間効果のクロス集計表

{室}	{植栽}	{吹抜け}	{生活}	{設備}	{素材}	{通路}	{庭}	{内部空間}	{入口}	{部位}	{領域}	総計
1		1				1				2		13
						1	2		1			9
												2
2	1			1	1	1				2	2	15
								1		1		5
1	1		2				4			1	1	12
										1		2
1					2		2			1	1	14
1	7				2	3	3		1	3		31
						2				1		7
						1	1					10
3	3					5	6		1	3	4	45
										1		1
2	2	2			1	3	5			2	11	59
1					1		1				1	7
1					1							3
												6
1	1			2	1	2	1		1	5		22
								1				4
								1			2	5
1	4	1			4	4	5		2	5	4	52
	2	3		1	1	4		1		5	2	31
											1	5
						1					1	4
	2				1	4	1				1	18
1		1			1	1	3		2	1		26
						2	1					4
1					1	1	1		1	1	1	11
4	1	2		1	4	1	8		2	1	4	53
1					2	2	3		2	1	1	20
	3				1	1				1		7
							1					2
	2					1	1				4	16
							2				6	10
				1		2						6
1									1	1		9
2		1	1		2	6					1	17
					1	1	3		1	4		19
						1	1					5
	2						2					5
									1			5
1					1				2	1		10
2	1	1				3	3					18
						2				1		3
										1	1	4
		1								1	2	8
					1		1					4
												6
					3	2	2					12
1	1	1			1		2			1		18
2	1	1			1	1	4					26
	1					1	1					5
31	35	15	3	6	34	61	72	2	18	46	53	711

をグラフ上の距離に転換して模式化し傾向を整理した（図5-6）。そして、グラフ上に布置されたカテゴリーの位置関係から領域の方向性を定め、グラフの原点から周縁部までのカテゴリーを原点からの距離に比例して比重を置いて解釈した結果、領域を拡張する＜間＞、環境を取込む＜間＞、印象を創出する＜間＞、自己を確立する＜間＞の4つの傾向に整理することができた。

以下に、それぞれの傾向を構成するのに大きく起因している周縁部の要素の組合せについて

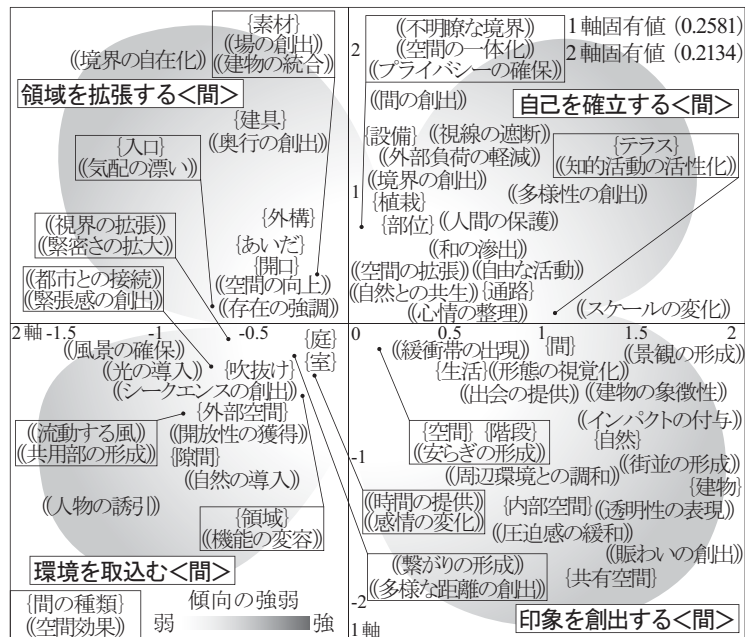


図5-6 間の種類と空間効果のコレスポンドンス分析散布図

述べる。

領域を拡張する＜間＞：《境界の自在化》は「建具」と組み合わせたり、「内部と外部の境界をコントロールできる」などの描写より、境界として存在する＜間＞を意のままに操作することで領域の拡張を表現している。《奥行の創出》は「あいだ」や「部位」などと組み合わせたり、「人に内部空間の奥行きを感じさせる」などの描写より、視覚情報による空間の広がりや＜間＞が与えることで、実際の空間より開放的に感じることができていることを表現をしている。《気配の漂い》は「建具」や「あいだ」などと組み合わせたり、「居住者相互の気配が感じられる」や「人の住んでいる気配が感じられる」などの描写より、＜間＞のもつ性質が空間に滞在する人々の雰囲気や別空間に滞在する人間に感じさせる表現をしている。

これらは、領域を拡張する＜間＞の性質が表現されているといえる。

環境を取込む＜間＞：《流動する風》は「隙間」や「室」などと組み合わせたり、「風の通り抜ける隙間」などの描写より、室内における通風を確保することで、快適性を増す表現をしている。《光の導入》は「隙間」や「領域」などと組み合わせたり、「室内に柔らかな光を充満させていく」などの描写より、室内を明るく照らし出し環境の向上を図ることを意図していることから、

太陽光などの光が溢れ出すスペースを〈間〉と捉えて表現している。《自然の導入》は {領域} や {庭} などと組み合わせ、「外部の緑を建築の内部に取り込んだ」などの描写より、自然界の環境や風景を空間と融和させることを意図しており、自然を取り込み調和させる領域を〈間〉と捉えて表現している。《開放性の獲得》は {領域} や {隙間} などと組み合わせ、「室内全域に軽快な解放感をもたらしている」などの描写より、空間の広がりや視界を拡張させていくことを考慮しており、空間を調和する媒体を〈間〉と捉えて表現している。これらは、外部の良好な環境を内部に取込む〈間〉の性質が表現されているといえる。

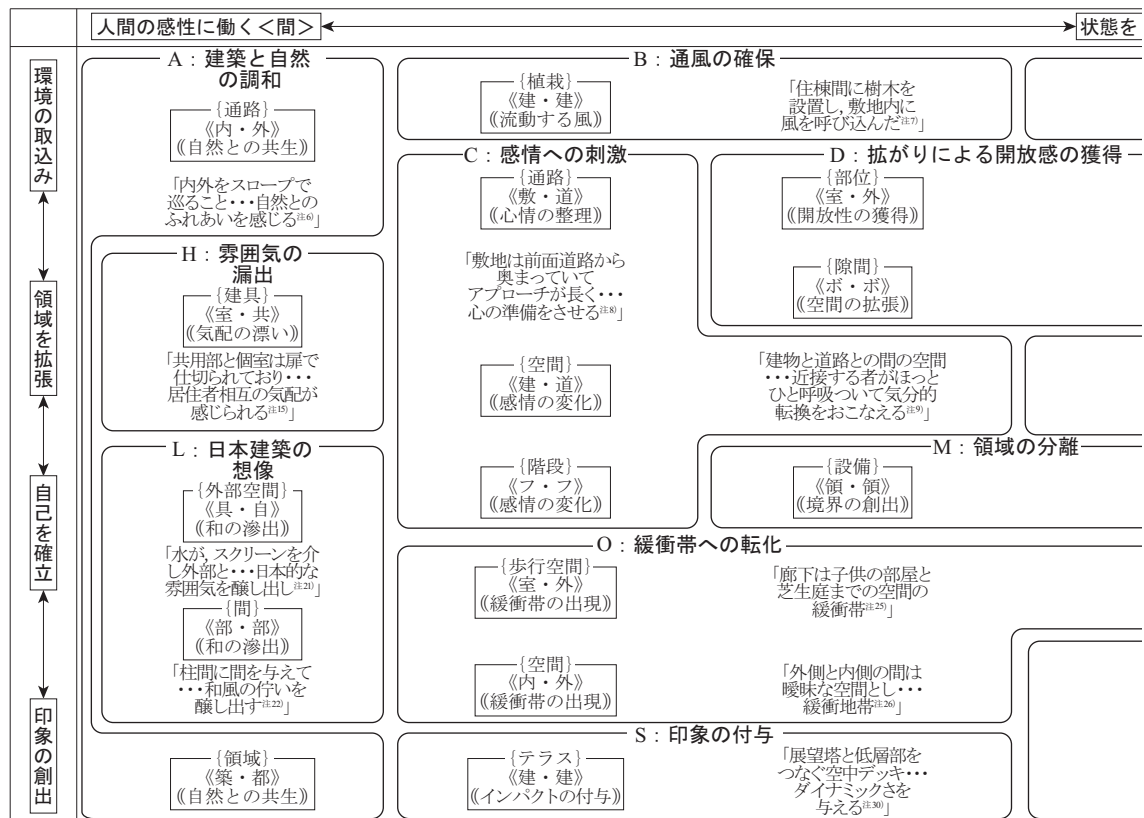
印象を創出する〈間〉：《圧迫感の緩和》は {内部空間} や {建物} などと組み合わせ、「近隣へ圧迫感を与えることなく」などの描写より、建物自体を周辺地域への圧迫感を抑える緩衝帯として表現している。《景観の形成》は {建物} や {自然} などと組み合わせ、「アルミの特性が重なり不思議な光景をつくり出している」などの描写より、建物全体の構成が生み出す景観を意図していることから、周辺から見る景観を形成する媒体を〈間〉と捉えて表現している。《賑わいの創出》は {共有空間} や {建物} などと組み合わせ、「街路の賑わいを中庭に導き入れる」などの描写より、空間内の人々の行為や雰囲気を活気づけさせることを意図しており、人々の活動を促す媒体を〈間〉と捉えて表現している。《透明性の表現》は {素材} や {建物} などと組み合わせ、「柔らかな透明性をもたせ」や「奥まで見通せる「透け」を表現する」などといった描写がみられた。これらは、透明性を帯びることで隣接する空間との調和を意図しており、透過の性質をもつ事物を〈間〉と捉えて表現している。これらは、空間や景色から受け取る印象を創出する〈間〉の性質が表現されているといえる。

自己を確立する〈間〉：《視線の遮断》は {植栽} や {部位} などと組み合わせ、「外からの視線を遮る」などの描写より、人々の視線の混雑を避け空間の環境を向上させることを意図していることから、視界を制限する媒体を〈間〉と捉えて表現している。《外部負荷の軽減》は {部位} や {素材} などと組み合わせ、「騒音を防ぐ壁として機能する」などの描写より、外部からの影響を和らげることを意図していることから、外部の要素を遮断する媒体を〈間〉と捉えて表現している。《人間の保護》は {樹木} や {庭} などと組み合わせ、「ネムノキが今、園児たちを見守っている」などの描写より、人間の安全性や周辺の守られた環境を実現することを意図しており、人間を保護する役目を果たす媒体を〈間〉と捉えて表現している。《境界の創出》は {あいだ} や {設備} などと組み合わせ、「個の領域と家族の領域を分離しつつ」などの描写より、異なる領域を明確に分離することを意図しており、両者を切離し機能を明確にする境界を〈間〉と捉えて表現している。これらは、外部からの干渉を拒み、空間としての自己を確立する〈間〉の性質が表現されているといえる。

5 - 5 語義の類型からみる〈間〉の多義性

本節では、前節までに検討した間の種類と間を生み出す状況、間の種類と空間効果のcoresポンドンス分析散布図からそれぞれの傾向を得ることができた。そこで本節では、間の種類・間を生み出す状況・空間効果の互いの相関を比較考察することにより、多義性の類型を示し、〈間〉の多義性がどのような状況で変化し、決定づけられているかを考察する。

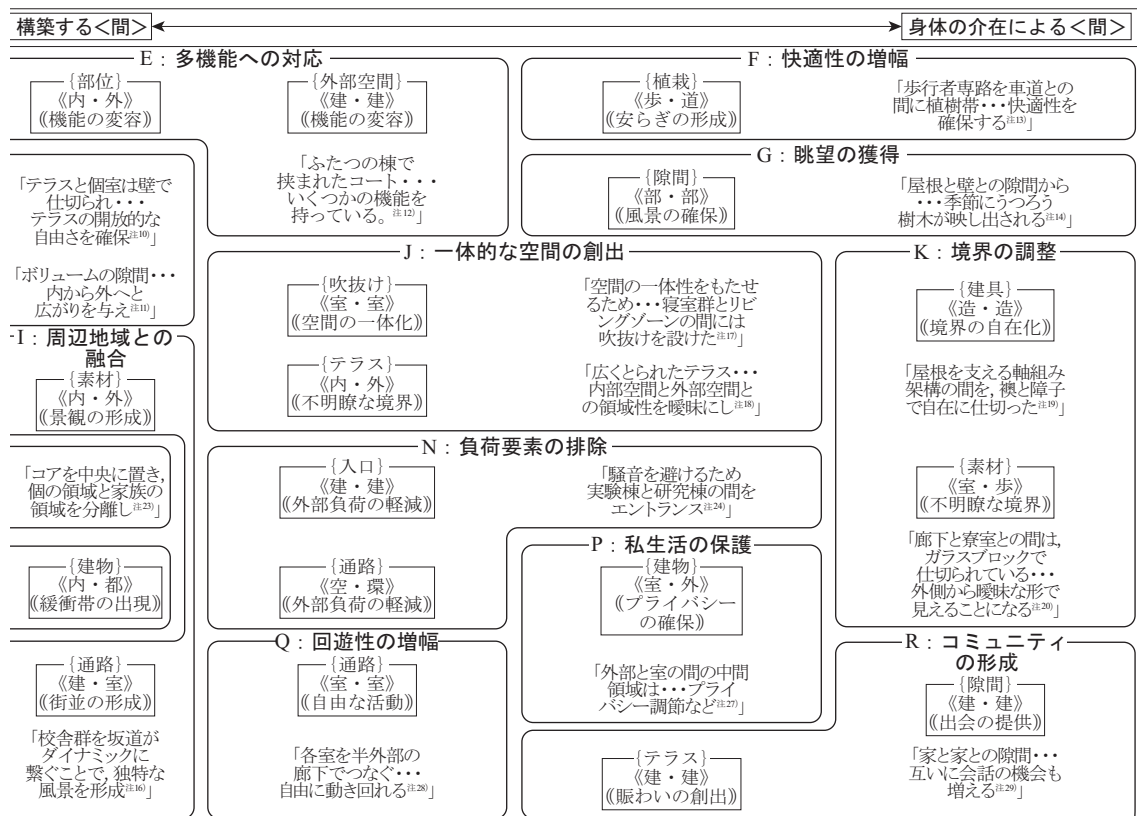
ここでは、キーコンテキストに含まれる間の種類・間を生み出す状況・空間効果を、coresポンドンス分析散布図に現れた傾向の違いとその強弱を判断の手がかりに、全ての組合せ例を比較考察し、原文の記述内容を考慮した上でいくつかの意味のまとまりを導出した。その上で、意味のまとまりの枠組みをもっとも端的に表せるよう、間の種類と空間効果のcoresポンドンス分析散布図に現れた傾向の違いを縦軸、間の種類と間を生み出す状況のcoresポンドンス分析散布図に現れた傾向の違いを横軸として、二次元上に位置づけることとする。意味のまとまりを導出する際に、複数の傾向の軸をまたいでまとめることのできる枠組みを捉えることができた。これらの枠組みはひとつの要素で意味付けられる傾向が強く、その他の要素から意味付けられる傾向が弱い枠組みであるといえる。また、coresポンドンス分析散布図に現れた傾向の違いによる軸は独立した評価軸ではあるが、それぞれの傾向を構成するのに大きく起因して



※図中 { } は間の種類, 《 》 は間を生み出す状況, 《 》 は空間効果, 「 」 は記述例, □ は組合せ例を示す。

図5-7 間の種類・間を生み出す状況

いる周縁部の要素同士の組合せ以外は明確に区切ることができないため、軸による境界線は設定していない。しかし、間の種類と間を生み出す状況のコレスポネンス分析散布図に現れた傾向の違いによる軸においては、状態を構築する＜間＞による傾向の軸を中心として、意味のまとまりの枠組みを認めることができ、人間の感性に働く＜間＞による傾向の軸と身体の間による＜間＞による傾向の軸をまたぐ意味のまとまりの枠組みは認められなかった。このことから構築された状態に対して身体という極めて具象的なものを介在させるか、感性という極めて抽象的な概念により捉えるかにより＜間＞の多義性が形成されることが考えられる。間の種類と空間効果のコレスポネンス分析散布図に現れた傾向における違いによる軸においては、全ての軸の組合せをまたぐように意味のまとまりの枠組みを認めることができた。このことから、自他の関係により、環境、領域、自己、印象という4つの評価軸の重ね合わせにより＜間＞の多義性が形成されることが考えられる。上記のことを考慮した上で意味のまとまりを位置づけた結果、建築物の言語描写における＜間＞の多義性として少なくともA～Sの19種の類型を導き出すことができた（図5-7）。



・空間効果からみる＜間＞の多義性

以下に、各類型の説明を述べる。

類型 A：建築と自然の調和

この類型は、「内外をスロープで巡ること・・・自然とのふれあいを感じる」などの描写のように、{通路}、《内・外》、《自然との共生》が組み合わさり、＜間＞が自然との接続を促進する媒体として捉えられ、自然の景色や太陽光などを内部空間に取り込むことで自然との調和を図る様子が表現されている。また、上記の描写以外に、{領域}、《築・自》、《自然との共生》の組合せでは、設計者が建築と自然のあいだの領域に着目しており、柱廊やパティオといった外部空間にある事物をあいだの領域に点在させることで、建築と自然を調和させる表現をしている。よって、設計者は建築と自然といった実体を捉えることのできない抽象的な事物同士の関係の調和を促進する効果をもつ＜間＞について考慮しているといえる。さらに、{領域}、《築・都》、《自然の導入》の組合せでは、実体として捉えることのできない抽象的な領域を確保することで、自然の景色や光などを取り込むことを意図している。その結果、自然を取り込む効果を保持した領域が、建築と都市とを結びつける媒体として機能している。よって、設計者は建築と都市を結びつける媒体として、自然を内包した領域を＜間＞として捉えているといえる。以上より、設計者が抽象的な事物同士である建築と自然といった関係に着目していることがわかり、それらを結びつける役割を果たす＜間＞を用いていることから、＜間＞に建築と自然を調和させる意味を付加させているといえる。

類型 B：通風の確保

この類型は、「住棟間に樹木を設置し、敷地内に風を呼び込んだ」などの描写のように、{植栽}、《建・建》、《流動する風》が組み合わさり、住棟と住棟の配置構成を考慮したうえであいだの空間に樹木を設置する計画を行うことにより、自然溢れる雰囲気醸し出すと同時に、樹木が敷地内に風を運び入れる効果を得ている。よって、設計者は計画した空間内に風を呼び込む性質をもつ＜間＞について考慮しているといえる。また、上記の描写以外に、{隙間}、《ボ・ボ》、《流動する風》の組合せでは、設計者が建物のボリュームとボリュームをスライドさせる操作を加えることで隙間が生じ、その隙間を利用して通風を確保しようと意図していることがわかる。よって、設計者は外部空間内に風を呼び込み環境を向上させる効果をもつ＜間＞について考慮していることがわかる。以上より、設計者が建物や空間のズレといった隙間空間、もしくは風を呼び込む性質をもつ＜間＞を用いて、空間の環境を向上させようとしていることから、＜間＞に通風を確保するための意味付けをしているといえる。

類型 C：感情への刺激

この類型は、「敷地は前面道路から奥まっっていくアプローチが長く・・・心の準備をさせる」などの描写のように、{通路}、《敷・道》、《心情の整理》が組み合わさる。設計者が外部空間である道路から敷地内までの移動する空間に着目しており、公共の空間から私の空間に切り替わる際に通過する空間で、気持ちに変化を与えようとしていることがわかる。よって、設計者は場面展開が行われる直前の空間に、感情の変化を促す効果をもつ＜間＞について考慮している

ことがわかる。また、上記の描写以外に {空間}、《建・道》、《感情の変化》の組合せでは、設計者が建物と接する道路との関係に着目しており、急に道路から建物に移動させるのではなく、あいだにちょっとした空間をおくことで気分転換させようとしていることがわかる。よって、設計者は異なる空間同士の接触をなるべく避け、あいだに両者の緩衝帯としての空間を挟み込むことで、気持ちの整理をさせる空間としての<間>を捉えているといえる。以上より、設計者が空間から別の空間に移り変わる際のひとときに着目し、公私を切り替えるために感情に変化を与える効果をもつ空間を<間>として捉えていることから、<間>に感情へ刺激を与える意味を付加させているといえる。

類型 D：広がりによる開放感の獲得

この類型は、「ボリュームの隙間・・・内から外へと広がりを与え」などの描写のように、{隙間}、《ボ・ボ》、《空間の拡張》が組み合わさり、<間>が空間を拡張する様子を認識させるものとして描写され、実際の領域が増幅するのではなく、敢えて隙間を与えることで、内と外の繋がりを意識させる様子が表現されている。また、上記の描写以外に {素材}、《室・室》、《開放性の獲得》の組合せでは、設計者が隣接する部屋同士の関係に着目しており、個室としての独立性や良質な環境をもたせると同時に、開放感を与えるためにガラスといった素材を使用することで問題を解決しようとしている。よって、設計者は隣接する部屋の境界にガラスを用いることで、空間の広がりを感じさせる<間>について考慮しているといえる。さらに、{テラス}、《内・外》、《開放性の獲得》の組合せでは、設計者が内部空間と外部空間の連続性に着目しており、それらを繋ぐテラスが存在することで室内からの空間の連続性を増幅させ、内部空間の閉塞感を無くそうと考慮していることがわかる。よって、設計者は空間に連続性を与えることで広がりのある空間を獲得する<間>について考慮しているといえる。以上より、設計者が実際の空間の領域を拡張させていくのではなく、空間内を体感した際に空間の連続性や広がりを感じさせることで開放感を与えていることから、<間>に開放感を獲得させる意味を付加させているといえる。

類型 E：多機能への対応

この類型は、「ふたつの棟で挟まれたコート・・・いくつかの機能をもっている」などの描写のように、{外部空間}、《建・建》、《機能の変容》が組み合わさり、ただ間にある外部空間ではなく、外部から内部への関係性や、内部から外部への関係性に多様な意味合いを構築することにより、外部空間の果たす役割が多様化する様子が表現されている。また、上記の描写以外にも、{領域}、《内・外》、《機能の変容》の組合せでは、設計者が内外空間の境界に曖昧な領域をおくことで、そこを体感する人々が実際の空間とは異なる空間として感じるように意図していることがわかる。よって、設計者は空間を体感する人々に疑似体験をさせることで、空間の持つ機能性を増幅させる<間>について考慮していることがわかる。さらに {庭}、《内・外》、《機能の変容》の組合せでは、設計者が周辺住民との繋がりに着目しており、住民の憩いの場として設けた庭を周辺地域の方にも立ち入りやすい環境とすることで、馴染みの場を形成していることがわかる。よって、設計者はひとつの空間に複数の機能を織り込ませている

ことから、機能の代用が可能なく間＞について考慮していることがわかる。以上より、設計者が空間の利用目的の幅を考慮し、多様な機能に関する要求に柔軟に対応する＜間＞を用いていることから、＜間＞に多機能への対応といった意味付けをしているといえる。

類型 F：快適性の増幅

この類型は、「歩行者専用路と車道との間に植樹帯・・・快適性を確保する」などの描写のように、{植栽}、《歩・道》、《安らぎの形成》などが組み合わさり、人のための空間と車のための空間のあいだに樹々を植えることで、人と車の境界線をより明確に区切り、安全性を確保するだけでなく、樹々の緑に触れることで安らぎを与えるものとして表現されている。また、上記の描写以外にも、{樹木}、《建・道》、《安らぎの形成》の組合せでは、設計者が計画地と外部空間を行き交う人々の関係に着目しており、内部と外部からの視覚的な情報として樹木を配置することで安らぎを提供しようと考えていることがわかる。よって、設計者は内部と外部の関係性のあいだに介在する＜間＞の性質を利用し、両空間を利用する人々に癒しと安らぎを提供しているといえる。さらに {庭}、《室・室》、《安らぎの提供》の組合せでは、設計者が異なる部屋同士のあいだに庭を設けることで、居住者に季節の移ろいや風景の変化といった視覚的な快適性を与えようとしていることがわかる。よって、設計者は居室から望む庭や遠景の景色といった視覚情報を隣接する部屋のあいだを通して伺えるようにしていることから、居住者の快適性を増幅させる＜間＞について考慮しているといえる。以上より、設計者が空間内の人の視覚情報を操作する＜間＞を用いることで、心情に安らぎや癒しを与えていることから、＜間＞に快適性を増幅させる意味を付加させているといえる。

類型 G：眺望の獲得

この類型は、「屋根と壁との隙間から・・・季節にうつろう樹木が映し出される」などの描写のように、{隙間}、《部・部》、《風景の確保》などの組合せにより、内部空間から外部空間へと＜間＞が繋がることにより、内側から外の様子が伺え、また外の様子が内側に反映される様子を表現している。また、上記の描写以外にも、{室}、《建・建》、《風景の確保》の組合せでは、設計者が建物と建物を接続している箇所に着目しており、建物内部の第一印象となるエントランスから外部の風景を望めるようにすることで、複数の要素を織り交ぜていることがわかる。よって、設計者は建物の玄関としての主となる機能とは別に、外部の風景を取り込む機能を付与する＜間＞について考慮しているといえる。さらに、{領域}、《壁・壁》、《視界の拡張》の組合せでは、設計者が壁と壁の隙間に生まれた領域に着目しており、そこを行き交う人々の視線を空の方へ誘導することで視界を拡張させていく表現をしている。よって、設計者は人々の視線を操作することで、視界の広がり感じさせ自然の風景をも取り込むことのできる＜間＞について考慮していることがわかる。以上より、設計者が建物の隙間や機能に着目し、人間の視線を誘導させる＜間＞を用いることで風景を確保していることから、＜間＞に眺望を獲得する意味を付加させているといえる。

類型 H：雰囲気の出

この類型は、「共用部と個室は扉で仕切られており・・・居住者相互の気配が感じられる」などの描写のように、{建具}、《室・共》、《気配の漂い》などの組合せにより、公共性の高い空間と専有性の高い空間のあいだにある＜間＞が完全な境界となるわけではなく、隣り合う空間にいる者同士が何となくお互いの気配を感じとることができる様子を表現している。また、上記の描写以外にも、{素材}、《建・共》、《気配の漂い》の組合せでは、設計者が異なる空間に滞在する人間同士の関係に着目しており、境界として完全に仕切るのではなく、ガラスの性質を活かすことで隣接する空間に滞在する人間の気配を感じ取れるようにし、関係性を築く考慮をしていることがわかる。よって、設計者は＜間＞の性質を考慮し人間同士の関係を築く媒体として構成していることがわかる。さらに、{隙間}、《建・建》、《気配の漂い》の組合せでは、設計者が建物のあいだに生じる隙間に着目しており、その隙間を介して風や視線が抜けるとともに、人の気配も感じ取ることのできる空間として考慮していることがわかる。よって、設計者は人の滞在している雰囲気を運ぶ隙間を＜間＞として捉えており、それらを感じ取ることによって関係を結んでいるといえる。以上より、設計者が人間の気配や場の雰囲気などに着目し、それらが滲出していく空間を＜間＞として捉えていることから、＜間＞に雰囲気を漏出させる意味を付加させているといえる。

類型 I：周辺地域との融合

この類型は、「校舎群を坂道がダイナミックに繋ぐことで、独特な風景を形成」などの描写のように、{通路}、《建・室》、《街並の形成》などの組合せにより、群立する建物のあいだに人が通れる空間を躍動的に通すことにより、無秩序な建物群を繋ぎ合わせ、一つの風景を創り出していく様子を表現している。また、上記の描写以外にも、{素材}、《内・外》、《景観の形成》の組合せでは、設計者が内部空間と外部空間の境界にある外壁材に着目しており、その素材の性質が建物と周辺地域の風景や環境を融和させることで、街並としての景観を形成して行く様子を表現している。よって、設計者は＜間＞のもつ性質を考慮しそれを活かすことで、建物と街を調和した環境を生み出そうとしていることがわかる。さらに、{部位}、《建・道》、《街並の形成》の組合せでは、設計者が建物の構成と街並の関連性に着目しており、建物を構成している一部分が周辺の街並の一部として機能し、それらが連続して見えることで新たな景観を形成しようと考えていることがわかる。よって、設計者は周辺地域との調和を図り街並を形成する一側面として＜間＞を捉えているといえる。以上より、設計者が建物と周辺環境との調和を考慮していることから、街並や景観を形成する一側面としての機能をもつ＜間＞を用いていることから、＜間＞に周辺地域との調和を図る意味付けをしているといえる。

類型 J：一体的な空間の創出

この類型は、「空間の一体性をもたせるため・・・寝室群とリビングゾーンの間には吹抜けを設けた」などの描写のように、{吹抜け}、《室・室》、《空間の一体化》などの組合せにより、

異なる用途をもった室同士のあいだに、その両者を高さ方向にも貫く吹抜けを設けることにより、〈間〉を取り囲む室同士を繋ぎ合わせる様子が表現されている。また、上記の描写以外にも、{庭}、《室・室》、《空間の一体化》の組合せでは、設計者が向かい合う部屋同士の関係に着目しており、部屋のあいだに庭を配置することで室内の空間と庭とが融和し、一体的な空間を生み出そうと考慮していることがわかる。よって、設計者は内部と外部空間を調和させることで、空間を拡張していき一体化された空間を生み出す効果をもつ〈間〉について考慮しているといえる。さらに、{建具}、《内・外》、《空間の拡張》の組合せでは、設計者が内外空間の境界として機能している建具に着目しており、操作性のある建具により空間を拡張させることが可能であることを考慮していることがわかる。よって、設計者は領域を拡大させて多様な空間として利用可能にするため、〈間〉のもつ性質に着目することでそれを解決しているといえる。以上より、設計者が空間の連続性や〈間〉の性質に着目し、領域を拡張させ一体的な空間として利用可能な状況にするために〈間〉を用いていることから、〈間〉に一体的な空間を創出させる意味を付加させているといえる。

類型 K：境界の調整

この類型は、「屋根を支える軸組み架構の間を、襖と障子で自在にしきった」などの描写のように、{建具}、《造・造》、《境界の自在化》の組合せであり、設計者が建物を支えている構造としての軸組に着目しており、それらのあいだに生み出される空間を建具の操作性を利用することで、適宜に空間を接続、遮断できる構成を考慮していることがわかる。よって、設計者は〈間〉のもつ性質に着目することで、空間を自由に接続したり遮断する構成を考慮しているといえる。上記の描写以外にも、{建具}、《内・外》、《境界の自在化》の組合せにもみられた。これは、設計者が内外空間の境界面に着目しており、内外の結びつきを居住者の意のままにコントロールできるように考慮していることがわかる。よって、設計者は操作性の性質をもつ〈間〉に着目することで、内外空間の結びつきを自在に操作できるように考慮しているといえる。以上より、設計者が異なる空間同士の結びつきに着目し、それらの関係を結ぶ役目となる〈間〉の性質を考慮することで、空間の連続や遮断といった繋がりを形成していることから、〈間〉に境界を自由に調節可能にする意味を付加させているといえる。〈間〉が操作性をもつものとして描写され、境界としての〈間〉を自在に操作できるようにすることで、空間の機能性を増幅させる様子が表現されている。

類型 L：日本建築の想像

この類型は、「柱間に間を与えて・・・和風の佇まいを醸し出す」などの描写のように、{間}、《部・部》、《和の滲出》などの組合せであり、設計者が柱と柱のあいだの空間に着目しており、日本の概念的な言葉である間を用いることで、柱のあいだの空間を抽象的に表現し日本を想わせることを考慮していることがわかる。よって、設計者は日本独特の概念である間を想像させることで、自ずと和の気配を漂わせ体感させようとして考慮していることがわかる。また、上記の描写以外にも、{日本性}、《内・外》、《和の滲出》の組合せでは、設計者が内外空間の結びつきに着目しており、開口を用いることで内外の連続性を図り、日本建築の特

微であるの内外空間の関係性を表現することで和の佇まいを醸し出そうとしていることがわかる。よって、設計者は空間を体感する人々に日本建築の雰囲気想像させる〈間〉について考慮しているといえる。以上より、設計者が日本建築の性質に着目し、それらの性質を〈間〉と関連させることで日本独特の空間を想像させていることから、〈間〉に日本建築を想像させる意味を付加させているといえる。

類型 M：領域の分離

この類型は、「コアを中央に置き、個の領域と家族の領域を分離し」などの描写のように、{設備}、《領・領》、《境界の創出》の組合せであり、設計者が異なる領域の接合部に着目しており、個と共有部の領域を明確にするため設備コアを設置することで境界が創出され、領域を分離させることを考慮していることがわかる。よって、設計者は各領域を境界の存在により可視化させることで領域を明確に分離する〈間〉について考慮していることがわかる。また、上記の描写以外にも、{部位}、《建・動》、《境界の創出》の組合せでは、設計者が建物と動線空間の境界面に着目しており、建物と通路を完全に分節させるために境界として壁を設け、両者の空間の独立性を増幅させていることがわかる。よって、設計者は境界として機能する〈間〉を捉えており、異なる空間を境界に接することで両者を対峙させる構成をとっていることがわかる。以上より、設計者が異なる領域の境界に着目し、境界として働く〈間〉を用いることで領域を明確に二分化していることから、〈間〉に領域を分離させる意味を付加させているといえる。

類型 N：負荷要素の排除

この類型は、「騒音を避けるため実験棟と研究棟の間をエントランス」などの描写のように、{入口}、《建・建》、《外部負荷の軽減》の組合せであり、建物と建物に〈間〉を設けることにより、一方の建物から他方の建物への騒音を軽減する様子を表現している。また、上記の描写以外にも、{あいだ}、《具・具》、《外部負荷の軽減》の組合せでは、設計者が建具の操作により生じる隙間に着目しており、隙間としての空間を空気が滞留することで防音、防寒、遮光といった外部からの負荷を軽減する役目を担っていることがわかる。よって、設計者は室内の環境を向上させるために、外部の要素を遮断させる〈間〉について考慮しているといえる。さらに、{通路}、《敷・道》、《外部負荷の軽減》の組合せでは、設計者が敷地内と外部の関係性に着目しており、敷地内の奥に進む通路に外部からの喧噪を和らげる効果をもたせていることを意図していることがわかる。よって、設計者は敷地内のプライベートな領域を都市の喧噪から切離そうと考慮していることから、外部の負荷要素を遮る〈間〉を捉えているといえる。以上より、設計者が外部から流れ込む負荷要素に着目し、それらを和らげる、もしくは遮断する〈間〉の効果を用いていることから、〈間〉に負荷要素を排除させる意味を付加させているといえる。

類型 O：緩衝帯への転化

この類型は、「廊下は子供の部屋と芝生庭までの空間の緩衝帯」などの描写のように、{歩行

空間},《室・外》,《緩衝帯の出現》の組合せであり, 内部空間から外部空間へと移動するまでのあいだの空間を環境の急激な変化や空間の急激な変化を和らげるための緩衝帯として機能している様子を表現している。また上記の描写以外にも, {樹木},《領・領》,《緩衝帯の出現》の組合せでは, 設計者が抽象的な領域同士の関係に着目しており, それらの領域を明確にし相互貫入を避けるための緩衝帯として樹木を設置していることがわかる。よって, 設計者は異なる機能をもつ領域同士の交錯を避けるため, 緩衝帯としての<間>を用いることで両者の関係を保たせているといえる。さらに, {テラス},《内・外》,《緩衝帯の出現》の組合せでは, 設計者が内外空間の接触部分に着目しており, テラスの設置により内外の緩衝帯として機能させることで室内の閉塞感を消去させようと考慮していることがわかる。よって, 設計者は内外空間の相互貫入を考慮し, それらの衝突を避けるための緩衝帯として<間>を捉えているといえる。以上より, 設計者が異なる空間の交錯に着目し, それらが混在するのを避けるために緩衝帯として<間>を機能させることで両者の関係を保たせていることから, <間>に緩衝帯へ転化し機能する意味を付加させているといえる。

類型 P : 私生活の保護

この類型は,「外部と室の間の中間領域は・・・プライバシー調節など」などの描写のように, {建物},《室・外》,《プライバシーの確保》の組合せであり, 室内空間から外部空間にいたるまでのあいだに縁側やバルコニーなどの中間領域を設けることにより, 私的空間が直接外部と接するのを避け, プライバシーを保護する様子を表現している。また, 上記の描写以外にも, {部位},《建・庭》,《プライバシーの確保》の組合せでは, 設計者が建物と庭との関係に着目し, それらのあいだに壁を設置し視線を遮断していることから, 建物内部のプライバシーを確保し室内の環境性能を向上させていることがわかる。よって, 設計者は共用部と個を明確に分けることでプライベートを保護する役目を果たす<間>を捉えているといえる。さらに, {素材},《外・庭》,《視線の遮断》の組合せでは, 設計者がテラスと庭の仕切る面に着目しており, 素材の性質を活かすことを考慮し, 視線を遮る一方で光は室内に導き入れるといった室内環境を豊かにしようとしていることがわかる。よって, 設計者は<間>のもつ性質に着目することで, 室内環境を向上させると同時にプライバシーを確保することを考慮しているといえる。以上より, 設計者が公私を隔てる関係に着目し, プライバシーを確保する効果をもつ<間>を用いていることから, <間>に私生活を保護するといった意味付けをしているといえる。

類型 Q : 回遊性の増幅

この類型は,「各室を半外部の廊下でつなぐ・・・自由に動き回れる」などの描写のように, {通路},《室・室》,《自由な活動》の組合せであり, 設計者が空間内の室と室を繋ぐ動線に着目しており, 部屋から別の部屋に移る際の動線空間を半外部にすることで内外空間を融和させ, 自由に活動を行えるようにしようと意図していることがわかる。よって, 設計者は部屋と部屋を繋ぐ空間を考慮し, 移動する人々の行動を誘発させる<間>を捉えているとい

える。さらに、{テラス}、《内・外》、《自由な活動》の組合せでは、設計者が内外空間の接触する面に着目しており、テラスを設置することで内部と外部の行き来が容易になり、回遊性を増幅させていることがわかる。よって、設計者は内外空間を結びつけると同時に動線を拡張させる＜間＞を用いることで、空間の回遊性を拡大させることを考慮しているといえる。以上より、設計者が異なる空間を接続する動線空間に着目し、自由に動き回れる動線を拡大する＜間＞を用いることで、活動を誘発させていることから、＜間＞に回遊性を増幅させる意味を付加させているといえる。

類型 R：コミュニティの形成

この類型は、「家と家との隙間・・・互いの会話の機会も増える」などの描写のように、{隙間}、《建・建》、《出会の提供》の組合せでは、建物と建物のあいだに、人が滞在することのできる＜間＞を設けることにより、周辺地域の人々が集まる場として機能する様子を表現している。また、上記の描写以外にも、{室}、《室・室》、《出会の提供》の組合せであり、設計者が異なる室同士の関係に着目しおり、それらを結ぶ共有空間や動線空間などが人々の交錯を招くことで、交流を促進させようと意図していることがわかる。よって、設計者は異なる室同士のあいだに移動や滞在することのできる空間をおくことで、人々に交流の機会を与えることを考慮しているといえる。さらに、{建物}、《人・人》、《出会の提供》の組合せにもみられた。これは、設計者が人間同士の関係に着目しており、それらの関係を学校が結ぶ役割を担っていることから、建物に人々を引き付ける性質を見出しているといえる。よって、設計者は人々の出会を提供するための媒体として＜間＞を捉えており、それにより交流が盛んになることを意図していることがわかる。以上より、設計者が人間同士の関係に着目し、出会いの場を提供し交流を促進させる＜間＞を用いることでコミュニティを生み出していることから、＜間＞にコミュニティを形成させる意味を付加させているといえる。

類型 S：印象の付与

この類型は、「展望塔と低層部をつなぐ空中デッキ・・・ダイナミックさを与える」などの描写により、{テラス}、《建・建》、《インパクトの付与》の組合せでは、設計者が建物の全体の構成に着目しており、建物の印象を決定づけている一側面としての要素を建物の構成に付与することで、全体の構成を形づくることを考慮していることがわかる。よって、設計者は建物の構成に印象を与える要素を付加する機能をもつ＜間＞について考慮しているといえる。また、上記の描写以外にも {隙間}、《建・建》、《存在の強調》の組合せにもみられた。これは、設計者が建物のあいだの隙間に着目しており、建物の配置構成により生じる隙間を通して、街から様子や形態の連続性が見えるように存在を知らしめる表現をしている。よって、設計者は＜間＞を通して人間に建物の存在感を与える効果を考慮しているといえる。以上より、設計者が建物の印象を決定づける一側面をもった＜間＞を用いて建物全体を構成することで、＜間＞に印象の付与といった意味付けをしているといえる。

これら 19 種の類型は＜間＞の種類，＜間＞を生み出す状況，空間効果の特性によって意味付けられているが，さらにそれぞれの役割や性質により特徴づけることができる。

B, F, G, N, P は，室内の環境を向上させるため，風や光といった自然環境を取り入れる側面をもつ＜間＞や，外部負荷である騒音や気象を遮断する側面をもつ＜間＞などがみられた。また，内部空間からの視覚情報を操作することで外部への視界の抜けや，それを望むことで安らぎを与える側面をもつ＜間＞もみられた。これらの＜間＞は，住空間に生じる傾向が多いことから，居住者の快適性を重視した生活空間を創出する性質をもつ＜間＞であるといえる。

A, I, O, R は，建築と自然の共生を促進させるため，両者の接続媒体としての側面をもつ＜間＞や，異なる空間同士の相互貫入を和らげるために緩衝帯として機能し，両者の関係を保つ側面をもった＜間＞などがみられた。また，人々の交流を促し出会を提供する側面をもった＜間＞もみられた。これらの＜間＞は，異なる事物の接続を促進させる傾向があることから，事物同士の関係を保ち両者を融和させる性質をもつ＜間＞であるといえる。

C, D, H, L, S は，空間内に人の気配を漂わせることで，人間の存在を感じさせる側面をもつ＜間＞や，空間の雰囲気を感じ取ることで空間の広がりや日本建築の佇まいを醸し出す側面をもつ＜間＞などがみられた。また，空間から別の空間に移り変わる際に感情へ作用し変化を与える側面をもつ＜間＞もみられた。これらの＜間＞は，空間を体感した際に喚起する感情により空間を把握させる性質をもつ＜間＞であるといえる。

E, J, K, M, Q は，空間の境界を自在に操作できるようにすることで，空間を拡張したり分断する側面をもつ＜間＞や，複数の機能をもつ空間を取り入れることで，多様な空間を生み出す側面をもつ＜間＞などがみられた。また，動線を拡張し一体的な空間とすることで，回遊性を増幅させる側面をもつ＜間＞もみられた。これらの＜間＞は，空間を合理的に利用し，機能性を重視した性質をもつ＜間＞であるといえる。

以上より，＜間＞は居住者の快適性，事物同士の融和，感情の喚起，空間の機能性といった性質に主な意味付けをされているといえる。

以上，建築物の言語描写における＜間＞の多義性として 19 種の意味の枠組みの類型を捉え，考察することができた（表 5-1 2）。

表 5-1 2 建築物の言語描写における＜間＞の多義性

類型	意味付け
類型A	建築と自然の調和
類型B	通風の確保
類型C	感情への刺激
類型D	拡がりによる開放感の獲得
類型E	多機能への対応
類型F	快適性の増幅
類型G	眺望の獲得
類型H	雰囲気の漏出
類型I	周辺地域との融合
類型J	一体的な空間の創出
類型K	境界の調整
類型L	日本建築の想像
類型M	領域の分離
類型N	負荷要素の排除
類型O	緩衝帯への転化
類型P	私生活の保護
類型Q	回遊性の増幅
類型R	コミュニティの形成
類型S	印象の付与

5 - 6 小結

建築家の言語描写における〈間〉の多義性について、間の種類・事物・様態・作用の組合せから考察をおこなった。

まず、〈間〉の生じる事物の組合せの傾向を把握するため、事物同士のクロス集計を作成した。それにより、事物同士の相関を考察でき、間を生み出す状況として 67 種の分類を得ることができた。

続いて、〈間〉と空間の関係を考察するため、〈間〉が空間に及ぼす効果に関する記述の中から、〈間〉によって引き起こされる現象や作用を指す語句を作用、作用の対象や性質を補足する語句を様態として抽出し、それらのクロス集計表を作成したうえで効果について考察を行った。その結果、52 種の空間効果の特性を導出した。また、それらの意味内容を考察した結果、人間の認識に着目した現象的側面、空間の向上性に着目した機能的側面、人間に引き起こる心情に着目した感情的側面の 3 つの枠組みで捉えることができた。

以上の、間を生み出す状況、空間効果の特性と、間の種類との関連性を探るため、両者の組合せによるコレスポネンス分析を行い、関連の強さをグラフ上の距離に転換して模式化し傾向を整理した。その結果、間を生み出す状況との関連性から、間の種類と間を生み出す状況によるコレスポネンス分析より得た傾向として、人の感性に働く〈間〉、身体を介在する〈間〉、状態を構築する〈間〉といった 3 つの傾向に整理することができた。また、空間効果の特性との関連性から、間の種類と空間効果によるコレスポネンス分析より得た傾向として、領域を拡張する〈間〉、環境を取込む〈間〉、印象を創出する〈間〉、自己を確立する〈間〉といった 4 つの傾向に整理することができた。

これらを踏まえて、間の種類・事物・様態・作用の特徴を重ね合わせることによって考察した結果、建築物の言語描写における〈間〉の多義性として少なくとも 19 種の類型を導出できた。これら 19 種の類型は種類、状況、空間効果によって意味付けられているが、さらにそれぞれの役割や性質により特徴づけることができ、居住者の快適性、事物同士の融和、感情の喚起、空間の機能性といった性質に主な意味付けをされていることが明らかとなった。

また、〈間〉が生じる状況の違いに着目すると、建築や都市、自然といったスケールの大きい事物同士の関係から生じる〈間〉は、広範な空間全体の形態や構成における調和を目的として用いられていた。これは、実空間として存在する〈間〉の融和性や機能性を抽象化することで、〈間〉の存在を捨象した虚像として捉えることができる。一方で、室や部位といったスケールの小さい事物同士の関係から生じる〈間〉は、限定的な空間における環境性能の向上や、人の行動の誘発を目的として用いられていた。これは、快適性や誘導性といった人の感覚に作用する〈間〉を人々が認識または操作することのできる実像として捉えることができる。

以上より、設計者は事物同士の関係を考慮する際に、抽象性と具象性の性質に着目し、両義的な側面をもつ〈間〉を適宜使い分けることで空間を構成していることが明らかとなった。

注

- 注 1) 多義性における一連の研究では、建築家の思考や理念を表明する上で重要な創作活動のひとつであると考えられる言語活動を対象としている。そして、ひとつの言葉で表すことのできる事象や現象が、建築領域において様々な意味を形成することに着目し、その事象や現象を取り巻く語句同士の関係性を分析している。それにより、時代背景や設計者などの差異を解消し、多様な言語描写を等しく分析することができる。その上で事象や現象の解釈の差異を体系化することにより得られる総体的な意味内容の枠組みは、建築領域において一般性をもつ有効な知見になり得ると考える。
- 注 2) 本章では、事物、間の種類、様態、作用をキーコンテキストから抽出し、これらの語句の描写内容が示す意味と照らし合わせて結論を導出している。そのため本文中の考察や図中における「」内の記述例では、抽出元となったキーコンテキストを考察内容に合わせて品詞の活用の変換や文字の省略を行い例示しているが、文法上の表現を変えてもこれによる本稿の結論に対しての影響はないものと考ええる。
- 注 3) 事物を抽出する際、「建物群」や「住棟間」のように事物として複数の語句が明記されていない場合でも、その語句の意味内容が明らかに特定の事物が複数あることを示しており、そのあいだに＜間＞として抽出可能な語句がある場合は事物として抽出することとする。
- 注 4) カテゴリー分けの手法は、個人の独断や恣意を避けるため、著者を含む複数人による合議制の KJ 法を採用するものとする。KJ 法は、川喜田二郎によって考案された何らかの問題提起から状況把握、そしてそれに対する解決方法のプロセスまでの一連の方法を指し、記述等の定性情報を分類・整理するのに有効な方法として知られている。ここでいう KJ 法とは、ある問題をめぐって問題のありうる情報を集め、定性情報とし、全体像を明確にするまでのプロセスを狭義での KJ 法とする。本稿では著者を含む 4 名によって KJ 法を行い、それぞれの判断が分かれるところは、それぞれの判断根拠と資料における判断の是非を議論し、合意が得られた段階で再び全ての資料について再度 KJ 法による分類を試み、最終的に全ての資料について判断が一致するまで繰り返し行うという方法を取っている（参考文献 8）
- 注 5) コレスポンド分析とは、集計済みのクロス集計結果を使って、行の要素と列の要素を使い、それらの相関関係が最大になるように数量化して行の要素と列の要素を多次元空間（散布図）に視覚化して表現する分析方法を指す。類似度・関係性の強い要素同士は近くに、弱い要素同士は遠くに布置される。ただし、相対的な位置関係であり、絶対的なものではない。このとき、軸がクロスする原点付近に布置される要素は比較的特徴が薄いと解釈できる。なお、原点付近に布置する要素の解釈には注意が必要である。原点付近の行は、原点付近の列に対する組合せの頻度が多いとは限らず、原点を離れた様々な方向に布置されている列に対する組合せの頻度が均衡した結果、原点近くに布置されている場合がある。そのため、原点付近に布置された行・列を積極的に解釈するには、解釈の妥当性を低めることになり得る。（参考文献 9）
- 注 6) 安藤忠雄建築研究所：大手前女子大学アートセンター、新建築，pp. 158，1993. 2
- 注 7) 佐藤総合計画＋広東省建築設計研究院：広州科学城科学技術者集合住宅，新建築，pp. 176，2011. 8
- 注 8) 横河健／横河設計工房：スケッチ オブ テリトリー，新建築，pp. 254，1993. 12
- 注 9) 竹中工務店：竹中工務店横浜営業所，新建築，pp. 142，1966. 2
- 注 10) RIA 建築総合研究所：山荘 7，新建築，pp. 45，1961. 9
- 注 11) 竹中工務店：大栄教育システム名張研修所，新建築，pp. 316，1990. 7
- 注 12) 旗ノ台集合住宅：曾根幸一＋環境設計事務所，新建築，pp. 199，1975. 3
- 注 13) 大高建築設計事務所：広島基町・長寿園高層アパート，新建築，pp. 189，1973. 5
- 注 14) 小笠原絵理 間工作舎：錦綾幼稚園，新建築，pp. 153，2008. 12
- 注 15) teonks：YKK 黒部堀切寮，新建築，pp. 168，2000. 1
- 注 16) 伊東豊雄建築設計事務所：多摩美術大学附属図書館，新建築，pp. 75，2007. 7
- 注 17) 内井昭蔵建築設計事務所：伊豆高原の家，新建築，pp. 216，1978. 6
- 注 18) 末吉栄三計画研究室：馬天小学校，新建築，pp. 189，1983. 9
- 注 19) アトリエ R 齊藤義：対空間の家，新建築，pp. 300，1980. 8
- 注 20) 大江匡／PLANTEC：アイルス，新建築，pp. 198，1994. 6
- 注 21) 黒川紀章建築・都市設計事務所：セントラル・プラザ・ワン，新建築，pp. 222，1989. 3
- 注 22) 名古屋市建築局営繕部営繕課 大江宏建築事務所：名古屋能楽堂，新建築，pp. 176，1997. 10
- 注 23) 飯田善彦建築工房：佐江戸アパートメント，新建築，pp. 100，2006. 8
- 注 24) 吉田真三建築設計：帝京メディア・ラボⅡ，新建築，pp. 172，2000. 6
- 注 25) 木原千利建築設計事務所：白ゆり幼稚園，新建築，pp. 222，1986. 9
- 注 26) 内藤廣建築設計事務所：フォレスト益子，新建築，pp. 109，2003. 7
- 注 27) ADH／WORKSTATION：東雲集合住宅計画 E 地区，新建築，pp. 182，2000. 12
- 注 28) 深野木建築研究所：ルンビニ幼稚園，新建築，pp. 174，2003. 10
- 注 29) 山本恭弘／堅建築研究所：土佐山田の舎，新建築，pp. 103，2003. 2
- 注 30) 大成建設：ガスの科学館，新建築，pp. 244，1986. 5

参考文献

- 1) 柴田晃宏，芳本晃大朗，府中拓也，是永美樹：清家清の非住宅作品における柱梁表現と間の関係からみた立面表現，日本建築学会計画系論文集，第 630 号，pp. 1833-1838, 2008. 8
- 2) 鈴木隆：「間の結合の原理」による建物および街区の空間構成 十九世紀前半のパリの中層・高密度市街地の成立に関する都市計画的な研究（1），日本建築学会論文報告集，第 342 号，pp. 83-93, 1984. 8
- 3) 奥山信一，山田深，坂本一成：建築家の言説にみられる現代住宅作品の空間モデル —建築家の創作論に関する研究—，日本建築学会計画系論文集，第 456 号，pp. 123-134, 1994. 2
- 4) 塩崎太伸，奥山信一：現代日本の建築家の設計論にみられる空間をもちいた創作言語 —空間という語を利用した建築的思考の文脈と形式に関する研究—，日本建築学会計画系論文集，第 633 号，pp. 2333-2340, 2008. 11
- 5) 水谷友也，末包伸吾：現代建築における時間の概念とその表現手法に関する研究 —1990 年代以降の美術館・博物館・劇場の事例分析を通して—，日本建築学近畿支部研究報告集．計画系，第 49 号，pp. 801-804, 2009. 5
- 6) 大嶽陽徳，奥山信一，塩崎太伸，稲用隆一，四ヶ所高志：現代日本の建築家による増改築建築の設計論にみられる〈時間〉の認識，日本建築学会大会学術講演梗概集．F-2，pp. 715-716, 2010. 7
- 7) 新建築社：新建築，1950. 1-2011. 12
- 8) 川喜田二郎：発想法，中央公論社，1950. 1-2011. 12
- 9) 内田治：すぐわかる SPSS によるアンケートのクロスpondens分析，東京図書，1950. 1-2011. 12

6 建築物の言語描写における 多義性からみる実像と虚像

6 - 1 建築物の言語描写における 多義性からみる実像と虚像

6 - 1 - 1 背景と目的

3章から5章までを通して、表層の次元から白を、ものの次元から透明性を、空間の次元から間を、それぞれ建築物の言語描写を通して分析、考察することにより、白では20種、透明性では24種、間では19種の類型をそれぞれ導出し、その多義性を明らかにした（表6-1）。

本章では、もの、こと、現象、空間などが本来それ自体にもち備えている物理的性質を「実像」、そこに人の認識、体験や置かれている状況、慣習、歴史、文化などの社会的背景が介在することにより実像を超えて、派生し、つくりだされる像を虚像と定義し、白、透明性、間をその多義性の観点から横断して考察することにより、「実像」と「虚像」の関係を検討する。

表6-1 多義性の類型の一覧

	＜白＞の多義性の類型	透明性の多義性の類型	＜間＞の多義性の類型
類型A	基本の地となる＜白＞	光の透過	建築と自然の調和
類型B	色彩を演出する＜白＞	光の拡散	通風の確保
類型C	異物を統一する＜白＞	素材表面の光沢	感情への刺激
類型D	存在感を緩和する＜白＞	内部の露出による象徴	広がりによる開放感の獲得
類型E	風景を融解する＜白＞	空間の接続・分断における領域の生成	多機能への対応
類型F	周囲を際立たせる＜白＞	公開性の確立	快適性の増幅
類型G	建築を顕在化する＜白＞	印象に基づく感覚の表出	眺望の獲得
類型H	重力から解放する＜白＞	開放性の確立	雰囲気への漏出
類型I	柔軟な境界となる＜白＞	明瞭性の獲得	周辺地域との融合
類型J	輪郭を規定する＜白＞	不可視による期待感の創出	一体的な空間の創出
類型K	様相の変化する＜白＞	専有・共有の調整	境界の調整
類型L	質感を醸し出す＜白＞	活動の促進	日本建築の想像
類型M	幻想性を創出する＜白＞	雰囲気の生成	領域の分離
類型N	時の流れを喚起する＜白＞	広がりによる一体感の獲得	負荷要素の排除
類型O	光環境を調整する＜白＞	人間の活動の映写	緩衝帯への転化
類型P	機能性を併せ持つ＜白＞	公共性の確立	私生活の保護
類型Q	清廉な空間をつくる＜白＞	活動の移り変わり	回遊性の増幅
類型R	静穏さをもたらす＜白＞	環境に対する呼応	コミュニティの形成
類型S	事象を比喩する＜白＞	光による幻想感の演出	印象の付与
類型T	無駄のない洗練された＜白＞	建築操作による周囲との同化	
類型U		虚構の創出	
類型V		関係による周囲との同化	
類型W		内包された情報の伝達	
類型X		不信感の形成	

6 - 1 - 2 白と透明性と間の多義性の比較考察

前章までに導出した白，透明性，間のそれぞれの多義の類型を俯瞰し比較考察を行う（図6-1）。

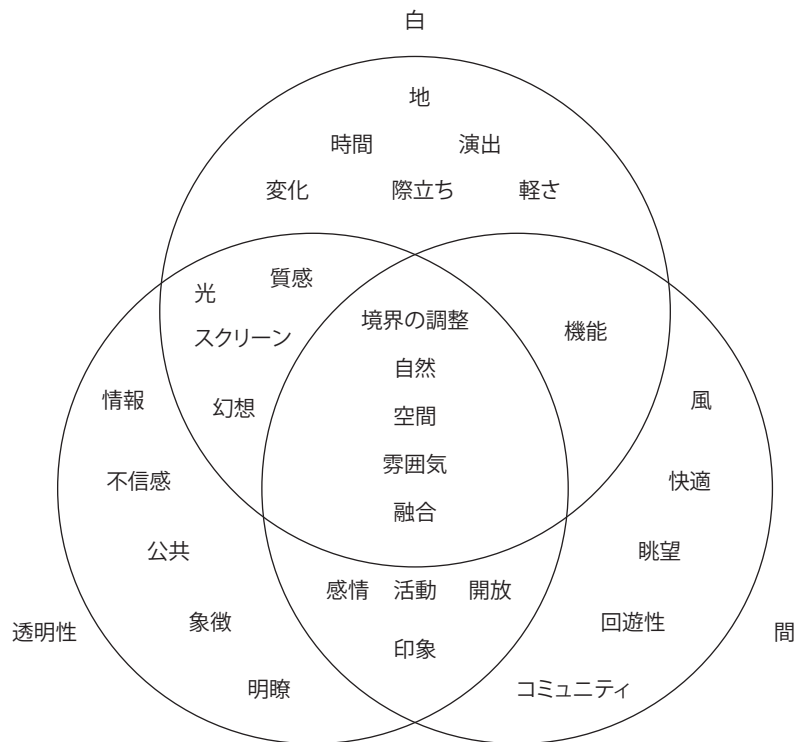


図6-1 白，透明性，間の多義性からみる概念図

白，透明性，間のどれにも共通する性質としては，境界の調整，建築と自然，空間，雰囲気，融合などがあげられる。そのどれもが，曖昧さ，抽象性を示し，それと関わる周囲の事象を調整することを意図する性質を共通して有することがわかる。

また，白，透明性に共通する性質としては，光，質感，幻想，スクリーンなどがあげられる。その実像自体が白であること，あるいは透明性を有することでもつ質感が，そこに映し込まれる光や，周囲の事象の様態を抽象化し表象することにより，幻想性をともなった虚像を派生することがうかがえる。

透明性，間に共通する性質としては，感情，活動，解放，印象などがあげられる。透明性，間がもつ無の状況に，感情や活動などの人が有する事象が入り込むことにより，虚像がつくりだされ，多義が生まれていると考えられる。

白，間に共通する性質としては，機能があげられる。それ自体に色彩を有しない白であることで様々な色彩を受け止め，映し出すスクリーンになったり，間が事象と事象の間に介在することにより，温度の調整，日照の調整，見え隠れの調整などの機能をともなう。

また白のみに存在する性質としては，時間，図に対する地，演出，変化，際立ち，軽さなど

が挙げられる。

透明性のみに存在する性質としては、情報、不信感、公共、象徴、明瞭などが挙げられる。

間のみに存在する性質としては、風、快適、眺望、回遊性、コミュニティなどが挙げられる。

白、透明性、間ともに表層、もの、空間の各次元における事象を抽象化することにより特定の意味を捨象し、人の体験、認識の介入を許し、多義性をつくりだしていることがわかる。例えば、内と外、建築（人工物）と自然、人とそれを取り巻く空間、といったような対立するいくつかの実像を境界の調整、雰囲気、融合などといった認識の中で揺れ動く多義的性質をともしない虚像をつくりだし一見相反する事象を同時に成立させようとしていることがうかがえる、

6 - 2 各水準からみる実像と虚像の関係性

前章までに導出した白、透明性、間のそれぞれが、表層、もの、空間の各次元において実像と虚像の間でつくりだす多義を通して、媒介となる認識、主体と客体、無と有、虚像の発生プロセス、虚像の固有性の各水準から実像と虚像の関係に関する検討を進める。

6 - 2 - 1 媒介となる認識からみる実像と虚像

実像が、もの、こと、現象、空間などが本来それ自体にもち備えている物理的性質であり、虚像が、人、状況、コンテキストなどにより変化し揺れ動く像の総体であるとする、その間には多義性をつくりだす媒介となる認識が必要になる。本項では、媒介となる認識という観点から実像と虚像の関係をさぐる。

白は、「重量感を抑えている」^{注1)}などの描写にみられるように、『重力から解放する<白>』として意味づけられたり、「白っぽい凝灰岩が、波に洗われて、それぞれの表情を表す」^{注2)}などの描写にみられるように、『質感を醸し出す<白>』として意味づけられたりすることから、それ自体の色の性質である軽やかさや、表情など、視覚に関わる多義性を有している。白は、視覚を媒介としてその多義性から虚像をつくりだしているといえる。

それに対して間は、「ふたつの棟で挟まれたコート・・・いくつかの機能をもっている」^{注3)}などの描写にみられるように、『多機能への対応』として意味づけられたり、「歩行者専用路と車道との間に植樹帯・・・快適性を確保する」^{注4)}などの描写にみられるように、『快適性の増幅』として意味づけられたりすることから、人の身体を介することで多義が生まれている。間は、身体性を媒介としてその多義性から虚像をつくりだしているといえる。

透明性は、「模型写真に漂っていた浮遊感というか夢の中の出来事のような非現実感、あるいは光を含んだ美しい透明感は消え、代わりに厳として物（ぶつ）があった」^{注5)}などの描写にみられるように、『光による幻想感の演出』として意味づけられたりすることから、それ自体の

もつ質感や、光と合いまって出現する幻想性や、視界が広がることの開放性など、視覚による多義性を有する一方で、「方立てのない巨大な透明度 98%の亚克力窓は、内部と外部の境界を完全に消失させ・・・どこにいても前後 2 方向が突き抜けた意外にも開放的な空間を提供する」^{注6)}などの描写にみられるように、『開放性の確立』として意味づけられたり、「一方、室内側の開口部は極力大きく透明なものとし、室内と中庭を視覚的に一体化させた。この閉じながらも開くあり方により、都市住宅ならではの開放感を実現している」^{注7)}などの描写にみられるように、『広がりによる一体感の獲得』として意味づけられたり、「ファサードはプライバシーに配慮し半透明プロフィリットガラスで、柔らかい光のみを取り入れた」^{注8)}などの描写にみられるように、『専有・共有の調整』として意味づけられたりすることから、視界の透過、不透過と身体による通り抜けれるか通り抜けれないかという視覚と身体性の両者の関係により多義性が生まれていることがわかる。よって、透明性は、視覚と身体性の両者を媒介として、その関係性、ねじれによって生まれる多義性から虚像をつくりだしているといえる。

6 - 2 - 2 主体と客体からみる実像と虚像

白、透明性、間のそれぞれが、表層、もの、空間のそれぞれの次元において周囲に存在する事象と関係を結び、そこに認識が介在することにより虚像をつくりだす。本項では、その過程において、白、透明性、間のそれぞれが、主体として働くのか、客体として働くのかという観点から実像と虚像の関係をさぐる。

白は、「白とグレーを基調としたニュートラルな空間に仕上げている」^{注9)}などの描写にみられるように、『色彩を演出する<白>』として意味づけられたり、「清潔感のある白い」^{注10)}などの描写にみられるように、『清廉な空間をつくる<白>』として意味づけられたり、「白い陽光に包まれた穏やかな表情」^{注11)}などの描写にみられるように、『静穏さをもたらす<白>』として意味づけられたりすることから、色彩、清潔感、清廉さなどの白自体に内在する性質を元に主体的に周囲の事象、認識に働きかけ虚像をつくりだす場合と、「内装は白色を基本とし、一部コンクリートブロックをそのまま見せている」^{注12)}などの描写にみられるように、『周囲を際立たせる<白>』として意味づけられたりすることから、白自体がというよりも白が客体となり周囲の事象に働きかけ虚像をつくりだす場合がある。主体として、客体としてそれぞれ働く場合があるのみならず、「白いキャンバスが真っ赤に染まり、心奪われる美しさ」^{注13)}などの描写にみられるように、『様相の変化する<白>』として意味づけられたり、「繋いでいるようで隔てている」^{注14)}などの描写にみられるように、『柔軟な境界となる<白>』として意味づけられたり、「自然光は白い天井面に反射し」^{注15)}などの描写にみられるように、『光環境を調整する<白>』として意味づけられたりすることから、白に内在する性質と周囲の事象が重なり合うことにより虚像を生んでいる。つまり、主体と同時に客体として、両者を兼ね合わせて働く場合があることがわかる。

透明性においても、「底光りする（表面反射ではなく、不透明の塗料における中間反射）漆の重厚な光沢と金のきらびやかな輝きの組合せは、抑制のきいたなかにも光輝く絢爛さを表現す

るのにまたとない素材であった」^{注16)}などの描写にみられるように、『素材表面の光沢』として意味づけられたりすることから、透明性そのものがもつ素材としての性質が主体として働き虚像をつくりだす場合と、「一室構成ロビーは、空港利用者すべてがこの空間を通過するので、無柱の軸力ドームで架構し、半透明のテフロン膜で覆って、柔らかな天空光がふりそそぐ日本的な空間の雰囲気をつくろうとした」^{注17)}などの描写にみられるように、『光の拡散』として意味づけられたりすることから、透明性に内在する性質を介することにより、光などの周囲にある事象が拡散されたりするなど、透明性が客体として働くことにより虚像をつくりだす場合がある。とともに、「透明とブロンズ色の2層になった吊りガラスが、光や天候によって変化し、イルミネーションのような輝きを見せています」^{注18)}などの描写にみられるように、『光の透過』として意味づけられたり、「透明膜と不透明膜の重なりをトップライトからの光が透過する．通り過ぎていく人影や差し込む光を・・・、部屋全体に気配や色味をぼんやりとにじませていく」^{注19)}などの描写にみられるように、『雰囲気の生成』として意味づけられたりすることから、透明性そのものに内在する性質と光や人影などの周囲に存在する実像が重なり合うことで虚像が生まれる。つまり、主体と同時に客体として、両者を兼ね合わせて働く場合があることがわかる。

それに比べて間は、「住棟間に樹木を設置し、敷地内に風を呼び込んだ」^{注20)}などの描写にみられるように、『通風の確保』として意味づけられたり、「屋根と壁との隙間から・・・季節にうつろう樹木が映し出される」^{注21)}などの描写にみられるように、『眺望の獲得』として意味づけられたりすることから、間が主体的に働くのではなく、通風や眺望など、それを介して身体に働きかけることにより虚像をつくりだしている。つまり、間は客体的にのみ働くといえる。

白と透明性は、状況に応じて主体にも客体にもなりえ、いわば両義的性格をもち合わせており、その主客の立ち位置の変化により、揺れ動く虚像をつくりだしている。その一方で間は、それをつくりだす周囲の実像、それを介して獲得される事象により、その性格が委ねられ、その振れ幅により多義をともなった虚像をつくりだしていることがわかる。

6 - 2 - 3 無と有からみる実像と虚像

実像と虚像の関係を考えるとき、その間には両者の関係をつなぐ抽象という概念が必要となると考える。抽象という観点から本稿では、表層の次元として白、ものの次元として透明性、空間の次元として間の3つの次元を設定し、表層、もの、空間のそれぞれの次元から、白、透明性、間の多義性を明らかにし、実像と虚像の関係の考察を進めてきた。そこで本項では、抽象という性質をもつ白、透明性、間のそれぞれを無と有という観点から考察し、実像と虚像の関係を考える。

白は、「マットな塗料で塗ることにより、なんとか統一感を出すことに成功しました」^{注22)}などの描写にみられるように、『異物を統一する<白>』として意味づけられたりすることから、白は、それ自体には存在は有るが、色彩を捨象し、様々な意味を抽象化することを表明する、いわば、無であることを主張している有であるといえる。

透明性は、「これを軽快なスペースフレームと透明ガラスでつくることによって、不思議な雰

囲気の中間領域をつくることができた」^{注23)}などの描写にみられるように、『印象に基づく感覚の表出』として意味づけられたり、「また中層・高層部は透明感のある仕上げとし、全体的に存在感を消して、周囲に威圧感を与えないようなファサードを心がけている」^{注24)}などの描写にみられるように、『建築操作による周囲との同化』として意味づけられたりすることから、透明性は、物質としての実体はもつが、視覚的には無の性質をともない連続性をつくりだす。いわば、無の性質をともなった有であるといえる。

間は、「ボリュームの隙間・・・内から外へと広がりを与え」^{注25)}などの描写にみられるように、『広がりによる開放感の獲得』として意味づけられたり、「共用部と個室は扉で仕切られており・・・居住者相互の気配が感じられる」^{注26)}などの描写にみられるように、『雰囲気漏出』として意味づけられたり、「騒音を避けるため実験棟と研究棟の間をエントランス」^{注27)}などの描写にみられるように、『負荷要素の排除』として意味づけられたりすることから、広がりであったり、雰囲気であったり、間は、事象と事象の関係においてつくりだされる存在であり、それ自体は、無であるといえる。

6 - 2 - 4 虚像の発生プロセスからみる実像と虚像

もの、こと、現象、空間などが本来それ自体にもち備えている物理的性質を実像とし、そこに人の認識、体験や置かれている状況、慣習、歴史、文化などの社会的背景が介在することにより実像を超えて、派生し、つくりだされる像を虚像と定義し、実像と虚像の間には抽象という概念が必要であると述べたわけであるが、本項では虚像の発生プロセスという観点から実像と虚像の関係を考察する。

白は、「威圧感を最小限にくだとめてい」^{注28)}などの描写にみられるように、『存在感を緩和する<白>』として意味づけられたり、「靄のかかったような透明な白さ」^{注29)}などの描写にみられるように、『風景を融解する<白>』として意味づけられたりすることから、白は、ものの表層において、その実像が無であることを主張することにより、装飾、色彩などが有していた意味を捨象する。つまり、白は単純に抽象性を有するというよりは、捨象する、抽象化するという意志を含むプロパガンダをもつことにより、存在感を緩和するや、風景を融解するなどの多義をつくりだす。よって、白は、捨象という意志により虚像を発生させると考えられる。

透明性は、媒介となる認識において視覚と身体性のねじれがおこったり、無であるという性質をともなった有であるという抽象概念を伴うことから、その両義性により、主体と客体が同時に存在し、そこへの焦点のあてかたの違いにより、事象と事象の関係、境界を調整することにより、「内と外を交換する透明で大きな建物は、開け方によっては外の内をつくり、屋根を持った内は外として水平線まで広がっていきます」^{注30)}などの描写にみられるように、『空間の接続・分節における領域の生成』として意味づけられたり、視覚と身体性、無と有、主体と客体のバランスにヒエラルキーをつくることにより、「一方で見え隠れする不透明壁を有効に配置し、より遠くへ興味が拡張されるようにも配慮した。このふたつの透明感をつくる要素を重層させながら子供たちのアイコンタクトを最大限に引き出そうと考えた」^{注31)}などの描写にみら

れるように、『不可視による期待感の創出』として意味づけられたりする。またそれらを重ね合わせることで、「また外形の透明な直方体のボリュームは、アクリル内部での光の全反射によって、その内面に広場の風景を完全な姿で映し込む四角いボリュームが風景の中に消える瞬間が訪れるのである」^{注32)}などの描写にみられるように、『虚構の創出』として意味づけられたりする。このことから透明性は、両義性により虚像を発生させると考えられる。

間は、「内外をスロープで巡ること・・・自然とのふれあいを感じる」^{注33)}などの描写にみられるように、『建築と自然の調和』として意味づけられたり、「空間の一体性をもたせるため・・・寝室群とリビングゾーンの間には吹抜けを設けた」^{注34)}などの描写にみられるように、『一体的な空間の創出』として意味づけられたり、「屋根を支える軸組み架構の間を、襖と障子で自在にしきった」^{注35)}などの描写にみられるように、『境界の調整』として意味づけられたり、「コアを中央に置き、個の領域と家族の領域を分離し」^{注36)}などの描写にみられるように、『領域の分離』として意味づけられたり、「廊下は子供の部屋と芝生庭までの空間の緩衝帯」^{注37)}などの描写にみられるように、『緩衝帯への転化』として意味づけられたり、「外部と室の間の中間領域は・・・プライバシー調節など」^{注38)}などの描写にみられるように、『私生活の保護』として意味づけられたりすることから、間は、実像の不在により、周囲に存在する事象と事象の関係を調整する領域となることにより多義をつくりだす。よって、間は、関係性により虚像を発生させると考えられる。

6 - 2 - 5 虚像の固有性からみる実像と虚像

白、透明性、間に共通する性質としては、境界の調整、建築と自然、雰囲気生成、事象と事象の融合などがあげられる。白、透明性、間のそれぞれが、周囲に存在する事象と事象の境界を調整することにより関係をつくりだしたり、あるいは周囲の事象とそれ自身が主体的に関係を結ぶことで事象を抽象化し、雰囲気などを生成するということがわかる。

本項では、白、透明性、間に内在する固有性を考察することにより実像と虚像の関係を考える。

白は、「空が白々としてくると」^{注39)}などの描写にみられるように、『時の流れを演出する<白>』として意味づけられたりすることから、それ自体が抽象性をもつために周囲の事象の環境変化、継時変化を顕在化させることにより虚像をつくりだすことがわかる。

また、「乳白色のガラスによって、非日常的な雰囲気を演出する」^{注40)}などの描写にみられるように、『幻想性を創出する<白>』として意味づけられたり、「雪に染まった富士山を連想させる」^{注41)}などの描写にみられるように、『事象を比喩する<白>』として意味づけられたりすることから、白に内在する性質と周囲の事象が重なり合い、融解することでその演出性により虚像をつくりだすことがわかる。

また、「堅型ルーバーが緑に映えて」^{注42)}などの描写にみられるように、『建築を顕在化する<白>』として意味づけられたり、「輪郭を維持する」^{注43)}などの描写にみられるように、『輪郭を規定する<白>』として意味づけられたり、「白く塗装された石膏ボードの壁」^{注44)}などの描写にみられるように、『基本の地となる<白>』として意味づけられたりすることから、白と

いう性質を帯びることによってその事象自体を図として浮かび上がらせ顕在化させたり、逆に地となり周囲に存在する事象を図として浮かび上がらせたりする。白が主体としても客体としても働くことにより、その図と地の関係において虚像をつくりだすことがわかる。

また、「白い壁面にシルエットとして映し出される」^{注45)}などの描写にみられるように、『機能性を併せ持つ<白>』として意味づけられたり、「純白を基調とした抽象度の高い空間」^{注46)}などの描写にみられるように、『無駄のない洗練された<白>』として意味づけられたりすることから、白がもつ抽象性が機能性、合理性を象徴することにより虚像をつくりだすことがわかる。

透明性は、「ガラス面は下がハーフミラーで、オパックな部分を徐々に加えながら、上にいくほどに透明度を増し、天上的な性格を示唆する」^{注47)}などの描写にみられるように、『内部の露出による象徴』として意味づけられたり、「東京工業大学のメインサイト・・・と共にこの場所の「顔」となる建物と言える・・・この建物は透明性と開放性を持って地域に開かれた場所を形成し、より空間的な構成のものとなるよう意図している」^{注48)}などの描写にみられるように、『公開性の確立』として意味づけられたり、「敷地の制約から内部モールとした「スクール・ストリート」は、校舎の空間全体を把握しやすくするための透明性の高い骨格的な空間である」^{注49)}などの描写にみられるように、『明瞭性の獲得』として意味づけられたり、「廊下や吹抜けの接続部に透明または半透明のガラスを用いることで、別の階にいる人、部屋にいる人の気配を感じ取れるようにした。これは各機能の情報がスムーズに伝わるように意図したものである」^{注50)}などの描写にみられるように、『内包された情報の伝達』として意味づけられたりすることから、透明性の無の性質を帯びた有という特性ゆえに、内と外を連続させ、内部の状況、内の情報を透明性を介して外部に公表することにより公開性や明瞭性を獲得する。つまり、情報の開示によって虚像をつくりだしているといえる。

また、「まるで公園のように、どこからでも人びとが自由に出入りしたり素通りしたりできる、透明で開放的な、町に開かれた公共空間を目指した」^{注51)}などの描写にみられるように、『公共性の確立』として意味づけられたり、「建築家の個人的思考に基づく回路が、・・・と同時に空間の不透明性を生み出すことを回避できないという事実です。ここには建築表現を巡る個人と社会との間の本質的矛盾が示されています」^{注52)}などの描写にみられるように、『不信感の形成』として意味づけられたりすることにより、透明性の有する両義性が、公共性や不信感などの社会性を意味する多義を形成する。このことから、透明性は、社会性によって虚像をつくりだしているといえる。

間は、「各室を半外部の廊下でつなぐ・・・自由に動き回れる」^{注53)}などの描写にみられるように、『回遊性の増幅』として意味づけられたり、「敷地は前面道路から奥まっていくなアプローチが長く・・・心の準備をさせる」^{注54)}などの描写にみられるように、『感情への刺激』として意味づけられたり、「展望塔と低層部をつなぐ空中デッキ・・・ダイナミックさを与える」^{注55)}などの描写にみられるように、『印象の付与』として意味づけられたりすることから、間に人の活動や感情が入り込むことにより多義を形成する。ことことから、間は、活動と感情により虚像をつくりだしているといえる。

また、「校舎群を坂道がダイナミックに繋ぐことで、独特な風景を形成」^{注56)}などの描写にみられるように、『周辺地域との融合』として意味づけられたり、「家と家との隙間・・・互いの

会話の機会も増える」^{注57)}などの描写にみられるように、『コミュニティの形成』として意味づけられたりすることから、間は、コミュニティにより虚像をくりだしているといえる。

また、「柱間に間を与えて・・・和風の佇まいを醸し出す」^{注58)}などの描写にみられるように、『日本建築の想像』として意味づけられたりすることから、間は、日本的な事象として虚像をつくりだしているといえる。

6 - 3 小結

本章では、白、透明性、間をその多義性の観点から横断して考察することにより、「実像」と「虚像」の関係の検討を行った。

まず、白、透明性、間のそれぞれの多義の類型を俯瞰し比較考察した結果、白、透明性、間に共通する性質としては、境界の調整、建築と自然、雰囲気生成、事象と事象の融合などがあげられ、白、透明性、間のそれぞれが、周囲に存在する事象と事象の境界を調整することにより関係をつくりだしたり、あるいは周囲の事象とそれ自身が主体的に関係を結び融合することで事象を抽象化し、雰囲気などを生成するということを述べた。

次に、白、透明性、間のそれぞれが、表層、もの、空間の各次元において実像と虚像の間でつくりだす多義を通して、媒介となる認識、主体と客体、無と有、虚像の発生プロセス、虚像の固有性の各水準から実像と虚像の関係に関する検討を進めた。

媒介となる認識からみる実像と虚像の観点から、白は、視覚を媒介とし、間は、身体性を媒介とし、透明性は、視覚と身体性の両者を媒介としてその多義性から虚像をつくりだしていることを述べた。

主体と客体からみる実像と虚像の観点から、白と透明性は、状況に応じて主体にも客体にもなりえ、いわば両義的性格をもち合わせており、その主客の立ち位置の変化により、揺れ動く虚像をつくりだしていること、その一方で間は、客体的にのみ働き、それをつくりだす周囲の実像、それを介して獲得される事象により、その性格がゆだねられ、その振れ幅により多義をともなった虚像をつくりだしていることを述べた。

無と有からみる実像と虚像の観点から、白は、無であることを主張している有であること、透明性は、無の性質をともなった有であること、間は、事象と事象の関係においてつくりだされる存在であり、それ自体は、無であることを述べた。

虚像の発生プロセスからみる実像と虚像の観点から、白は、捨象という意志により虚像を発生させること、透明性は、両義性により虚像を発生させること、間は、関係性により虚像を発生させることを述べた。

虚像の固有性からみる実像と虚像の観点から、白は、時間の変化、演出性、図と地の関係、合理性といった固有性を有すること、透明性は、情報、図と地の関係、社会性、活動と感情といった固有性を有すること、間は、活動と感情、コミュニティの生成、日本的（土着性）といった固有性を有することを述べた。

これらを踏まえて、実像と虚像に介在する白、透明性、間の特性をまとめた表を作成した（表6-2）。

表 6-2 実像と虚像に介在する白、透明性、間の特性

	白	透明性	間
媒介となる認識	視覚	視覚と身体性のねじれ	身体性
主体⇔客体	主客の同時存在	主客の同時存在	客体的
無⇔有	無であることを主張する有	無の性質をともなった有	無
虚像の発生プロセス	捨象	両義性	関係性
虚像の固有性	時間の変化/演出性/図と地/合理性	情報/社会性/活動と感情	活動と感情/コミュニティ/日本的

注

- 注 1) 青木淳建築設計事務所：G，新建築，p. 139，2004. 9
注 2) 柳建築設計事務所：堂ヶ島温泉ホテル，新建築，p. 138，1965. 8
注 3) 旗ノ台集合住宅：曾根幸一＋環境設計事務所，新建築，pp. 199，1975. 3
注 4) 大高建築設計事務所：広島基町・長寿園高層アパート，新建築，pp. 189，1973. 5
注 5) 藤森照信：裸の建物，新建築，p. 109，2001. 3
注 6) 手塚建築研究所＋武蔵工業大学手塚研究室＋MIAS：大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2003 越後松之山「森の学校」キョロロ，新建築，p. 77，2003. 8
注 7) 宮崎浩／ブランツアソシエーツ：清流寺深沢分寺，新建築，p. 130，2005. 10
注 8) 佐藤総合計画：北区中央図書館，新建築，p. 142，2009. 5
注 9) 椎名英三建築設計事務所：SCALA GRIGIA，新建築，p. 183，1999. 2
注 10) 福岡県建築都市部営繕課 安井建築設計事務所：福岡県立大学看護学部，新建築，p. 109，2003.
注 11) ワークショップ：4 トルリ，新建築，p. 328，1990. 7
注 12) 藤本壮介：聖台病院新病棟，新建築，p. 132，1999. 12
注 13) 安藤忠雄＋宮島達男：ICED TIME TUNNEL，新建築，p. 90，2004. 4
注 14) 武井誠＋鍋島千恵：カタガラスの家，新建築，p. 92，2008. 11
注 15) 香山壽夫建築研究所＋進藤圭介建築研究所：日本基督教団 金沢教会，新建築，p. 84，2004. 2
注 16) 指宿真智雄：大同生命京都ビルのデザイン，新建築，p. 284，1992. 1
注 17) 菊竹清訓：関西国際空港旅客ターミナルビル設計競技応募案，新建築，p. 208，1989. 2
注 18) ジェイムス・カーペンター・デザイン・アソシエーツ：グッチ銀座，新建築，p. 137，2007. 3
注 19) トラフ建築設計事務所：NISSAN Y150 ドリームフロント，新建築，p. 174，2009. 6
注 20) 佐藤総合計画＋広東省建築設計研究院：広州科学城科学技術者集合住宅，新建築，pp. 176，2011. 8
注 21) 小笠原絵理 間工作舎：錦綾幼稚園，新建築，pp. 153，2008. 12
注 22) メゾン マルタン マルジェラ：マルタン マルジェラ アオヤマ，新建築，p. 144，2003. 11
注 23) 黒川紀章：メルボルン・セントラル＜歴史と現代の共生＞，新建築，p. 221，1992. 2
注 24) 内井建築設計事務所：深沢ハウス，新建築，p. 205，2005. 2
注 25) 竹中工務店：大栄教育システム名張研修所，新建築，pp. 316，1990. 7
注 26) teonks：YKK 黒部堀切寮，新建築，pp. 168，2000. 1
注 27) 吉田真三建築設計：帝京メディア・ラボⅡ，新建築，pp. 172，2000. 6
注 28) 竹中工務店：芦屋市環境処理センター，新建築，p. 209，1978. 6
注 29) 長谷川逸子・建築計画工房：すみだ生涯学習センター，新建築，p. 97，1995. 1
注 30) SEC：福田別荘，新建築，p. 185，1983. 2
注 31) 渡部和生：養護学校の新しい生活像―街中でのリニューアルモデルとして―，新建築，p. 196，2001. 7
注 32) 清水建設：学研本社ビル，新建築，p. 150，2009. 3
注 33) 安藤忠雄建築研究所：大手前女子大学アートセンター，新建築，pp. 158，1993. 2
注 34) 内井昭蔵建築設計事務所：伊豆高原の家，新建築，pp. 216，1978. 6
注 35) アトリエ R 斉藤義：対空間の家，新建築，pp. 300，1980. 8
注 36) 飯田善彦建築工房：佐江戸アパートメント，新建築，pp. 100，2006. 8
注 37) 木原千利建築設計事務所：白ゆり幼稚園，新建築，pp. 222，1986. 9
注 38) ADH / WORKSTATION：東雲集合住宅計画 E 地区，新建築，pp. 182，2000. 12
注 39) 北川原温建築都市研究所：シーボン 本社，新建築，p. 84，2006. 3
注 40) 谷口建築設計研究所：香川県東山魁夷せとうち美術館，新建築，p. 88，2006. 1
注 41) 大江匡／ブランテック総合計画事務所：Fujiyama Museum，新建築，p. 114，2004. 1
注 42) 吉村順三・奥村昭雄：愛知県立芸術大学，新建築，p. 143，1971. 6
注 43) クリスチャン・ド・ボルザンバルグ：クリスチャン・ド・ボルザンバルグ棟，新建築，p. 352，1991. 5
注 44) 磯崎新アトリエ：COSI オハイオ 21 世紀科学工業センター，新建築，p. 70，2000. 1
注 45) 石田敏明＋石田敏明建築設計事務所：小鮎ネーム刺繍店，新建築，p. 182，1999. 8
注 46) 伊東豊雄建築設計事務所：HOTEL P，新建築，p. 225，1992. 9
注 47) 八束はじめ＋ユービーエム：天・地・人のフォリー，新建築，p. 195，1999. 2
注 48) 坂本一成＋本橋良介：空間を統合するスケールの修辭的・意味的配置，新建築，p. 62，2009. 6
注 49) 船越徹＋ARCOM：横須賀市立横須賀総合高等学校，新建築，p. 124，2003. 4
注 50) 大江匡／PLANTEC：群馬トヨタビル＋イーストパーク，新建築，p. 144，1997. 3
注 51) 妹島和世＋西沢立衛／SANNA：サーペントイン・ギャラリー・パビリオン 2009，新建築，p. 83，2009. 9
注 52) 伊東豊雄：単純明快さへの回帰，新建築，p. 158，1997. 9
注 53) 深野木建築研究所：ルンビニ幼稚園，新建築，pp. 174，2003. 10
注 54) 横河健／横河設計工房：スケッチ オブ テリトリー，新建築，pp. 254，1993. 12
注 55) 大成建設：ガスの科学館，新建築，pp. 244，1986. 5
注 56) 伊東豊雄建築設計事務所：多摩美術大学附属図書館，新建築，pp. 75，2007. 7
注 57) 山本恭弘／堅建築研究所：土佐山田の舎，新建築，pp. 103，2003. 2
注 58) 名古屋市建築局営繕部営繕課 大江宏建築事務所：名古屋能楽堂，新建築，pp. 176，1997. 10

7 結論

7 - 1 各章のまとめ

以下に各章のまとめを記す。

第1章「序論」では、本研究を行う背景と目的及びその意義を示した。また、関連する既往研究を整理した。

第2章「研究の理論と進め方」では、実像と虚像について、白、透明性、間について、多義性についてなど分析を進める上で基盤となる考え方を示した。そして、分析対象資料となる『新建築』の位置づけを行い、実際の分析の進め方と研究の構成を示した。

第3章「建築物の言語描写における〈白〉の多義性」では、建築家の言語描写における〈白〉の多義性について、概念表象・〈白〉の種類・性質・効果の観点から考察を行った。まず、〈白〉の概念表象と種類のカテゴリーを全体の用法として関連性を考察した結果、種類によって描写される〈白〉は大きく、景観の変化を示す〈白〉、空間を融和する〈白〉、事象を抽象化する〈白〉の3つの傾向に整理することができた。また、〈白〉の概念表象と性質においても同様に、様相の印象を示す〈白〉、状態の非日常性を示す〈白〉、面材の意匠性を示す〈白〉の3つの傾向に整理することができた。さらに、〈白〉の種類と効果においても同様に、構想を実現する〈白〉、様態を管理される〈白〉、対照物を調停する〈白〉の3つの傾向に整理することができた。

これらを踏まえて、概念表象・〈白〉の種類・性質・効果の特徴を重ね合わせることによって考察した結果、建築領域における言語描写としての〈白〉の多義性として少なくとも20種の類型が認められることを明らかにした。これらの〈白〉は、抽象化、象徴といった性質をとめない、それを取り巻く環境、それを捉える認識の中において、ときとして主体となり、ときとして客体となり、光との共鳴、自然との対比、構成物の調和、変化のベースとして振る舞い、異なる事象の関係を構築する多義として表出することが明らかとなった。

第4章「建築物の言語描写における透明性の多義性」では、建築家の言語描写における透明性の多義性について、主体・度合い・性質・効果の観点から考察を行った。まず、透明性の主体と度合いのカテゴリーを全体の用法として関連性を考察した結果、度合いによって描写される透明性は大きく、物質的な透明、現象的な透明、システムの不明瞭、可視や不可視の選択や

調整の4つの傾向に整理することができた。また、透明性の主体と性質のカテゴリーを全体の用法として関連性を考察した結果、性質によって描写される透明性は大きく、空間を構成する透明性、存在を操作する透明性、光環境において機能する透明性、社会構造を暗示する透明性の4つの傾向に整理することができた。また、透明性の主体と効果のカテゴリーを全体の用法として関連性を考察した結果、効果によって描写される透明性は大きく、領域をつくる透明性、透明性に内在する感性、活動を変容する透明性、人間の知覚に作用する透明性の4つの傾向に整理することができた。

これらを踏まえて、主体・度合い・性質・効果の特徴を重ね合わせることによって考察した結果、建築領域における言語描写としての透明性の多義性として少なくとも24の類型が認められることを明らかにした。これらの透明性は、接続と分離、即物性と現象性、変化と調和、期待と不安など、両義的側面を合わせもち、透明な主体が空間、存在、光、社会といった事象に介在する際に領域、感性、活動、知覚への抽象化を伴い、多義の一側面として表出することが明らかとなった。

第5章「建築物の言語描写における〈間〉の多義性」では、間の種類・事物・様態・作用の組合せから考察をおこなった。

まず、〈間〉の生じる事物の組合せの傾向を把握するため、事物同士の相関を考察した。間を生み出す状況として67種の分類を得ることができた。

続いて、〈間〉と空間の関係を考察するため、〈間〉が空間に及ぼす効果に関する記述の中から、作用と様態を抽出し、効果について考察を行った。その結果、52種の空間効果の特性を導出した。

以上の、間を生み出す状況、空間効果の特性、間の種類の観点から考察を行った。まず、間の種類と間を生み出す状況のカテゴリーを全体の用法として関連性を考察した結果、人の感性に働く〈間〉、身体を介在する〈間〉、状態を構築する〈間〉といった3つの傾向に整理することができた。また、間の種類と空間効果のカテゴリーを全体の用法として関連性を考察した結果、領域を拡張する〈間〉、環境を取込む〈間〉、印象を創出する〈間〉、自己を確立する〈間〉といった4つの傾向に整理することができた。

これらを踏まえて、間の種類・事物・様態・作用の特徴を重ね合わせることによって考察した結果、建築物の言語描写における〈間〉の多義性として少なくとも19種の類型を導出できた。これら19種の類型は種類、状況、空間効果によって意味付けられているが、さらにそれぞれの役割や性質により特徴づけることができ、居住者の快適性、事物同士の融和、感情の喚起、空間の機能性といった性質に主な意味付けをされていることが明らかとなった。

また、〈間〉が生じる状況の違いに着目すると、建築や都市、自然といったスケールの大きい事物同士の関係から生じる〈間〉は、広範な空間全体の形態や構成における調和を目的として用いられていた。一方で、室や部位といったスケールの小さい事物同士の関係から生じる〈間〉は、限定的な空間における環境性能の向上や、人の行動の誘発を目的として用いられていた。

以上より、設計者は事物同士の関係を考慮する際に、抽象性と具象性の性質に着目し、両義的な側面をもつ〈間〉を適宜使い分けることで空間を構成していることが明らかとなった。

第6章「建築物の言語描写における多義性からみる実像と虚像」では、白、透明性、間をその多義性の観点から横断して考察することにより、「実像」と「虚像」の関係の検討を行った。

まず、白、透明性、間のそれぞれの多義の類型を俯瞰し比較考察した結果、白、透明性、間のそれぞれが、周囲に存在する事象と事象の境界を調整することにより関係をつくりだしたり、あるいは周囲の事象とそれ自身が主体的に関係を結び重なり合うことで事象を抽象化し、雰囲気などを生成するということを述べた。

次に、白、透明性、間のそれぞれがの多義性を通して、媒介となる認識、主体と客体、無と有、虚像の発生プロセス、虚像の固有性の各水準から実像と虚像の関係に関する検討を行った。

媒介となる認識からみる実像と虚像の観点から、白は、視覚を媒介とし、間は、身体性を媒介とし、透明性は、視覚と身体性の両者を媒介としてその多義性から虚像をつくりだしていることを述べた。

主体と客体からみる実像と虚像の観点から、白と透明性は、状況に応じて主体にも客体にもなりえ、いわば両義的性格をもち合わせており、その主客の立ち位置の変化により、揺れ動く虚像をつくりだしていること、その一方で間は、客体的にのみ働き、それをつくりだす周囲の実像、それを介して獲得される事象により、その性格がゆだねられ、その振れ幅により多義をともなった虚像をつくりだしていることを述べた。

無と有からみる実像と虚像の観点から、白は、無であることを主張している有であること、透明性は、無の性質をともなった有であること、間は、事象と事象の関係においてつくりだされる存在であり、それ自体は、無であることを述べた。

虚像の発生プロセスからみる実像と虚像の観点から、白は、捨象という意志により虚像を発生させること、透明性は、両義性により虚像を発生させること、間は、関係性により虚像を発生させることを述べた。

虚像の固有性からみる実像と虚像の観点から、白は、時間の変化、演出性、図と地の関係、合理性といった固有性を有すること、透明性は、情報、図と地の関係、社会性、活動と感情といった固有性を有すること、間は、活動と感情、コミュニティの生成、土着性（日本的）といった固有性を有することを述べた。

7 - 2 実像と虚像

7 - 2 - 1 建築史の中での実像と虚像（原始建築から様式建築、モダニズム、ポストモダニズムまで）

建築のはじまりは、洞窟や巣のようなもので、生活していく上で適した場所を見つけることから始まり、そこに外敵から身を守り、風、雨、寒さ、暑さを防ぐために身の回りで手に入る材料で空間をつくった。まずは出発の時点で、その場所その場所がもつ土着のコンテキストが入り込まざるをえない。岩場だとか、谷間だとか、草原だとかいうような、その土地がもつ性質と、木だとか、石だとか、土だとかいうような、その土地の周辺で手に入る材料、そして雨や暑さや湿気などその土地固有の気候との格闘により、長い年月を経て獲得される形式がある。そこには当人が意識しようとしまいとに関わらず、少なからず固有の物語が紡ぎ出され、虚像が発生することになる。

時代が進むにつれ、唯々その土地のコンテキストと対峙しているだけにとどまらず、土地のコンテキストや長い年月の間に築かれた生活の慣習の中から派生した文化、生きていくということを再認識し人生ということを考えるうえで宗教というものが誕生する。そういった文化や宗教というのは積極的に実像と虚像の関係をういた。建築物の表層に彩色を施したり、物語を描き込んだり、彫刻を彫りこんだりといったような手法で本来の建築物が実像としてもつ性質以上の意味を虚像として求めた。

さらにこの手法は権力表明に利用され、実像と虚像の関係は権力闘争に巻き込まれていくことになる。より巨大に、より天高く、より複雑に、より美しく、建築は神の崇高さを象徴し、宗教関係者、王族、貴族などの権力、財力を世に知らしめる媒体としての役割が求められた。この時代に建築は土地、文化、宗教などの多様さに応じて百花繚乱の虚像を世界中に散りばめることになる。

やがて産業革命がおこると時代は合理性、機能主義を求めはじめる。これまで、長い歴史の中で虚像を練り込み洗練させてつくりあげてきた様式建築を否定し、その装飾性が非合理であるとされた。アドルフ・ロースは、「装飾は罪悪だ」とさえ言い切り、むしろそれらを捨象し装飾性を排除すること自体がプロパガンダとなるような新たな虚像を求めたといってもよいだろう。そこで注目されたのが、「白」と「透明性」である。「白」は無であることを主張する、いわば捨象、抽象化へのプロパガンダをそれ自体の性質として内在しており、「透明性」は無の性質をその実像の中にもなっている。この時代の精神性が「白」、「透明性」のつくりだす虚像を求めた。また、産業革命に遅れてやってくる民主主義においても、これまでの権力を排除し漂白する役割が「白」、「透明性」に求められることとなった。つまり「白」と「透明性」は合理性、モダニズム、民主主義の象徴となることになる。近代建築の父であるル・コルビュジェは「白」を多用し、モダニズム建築の絶対零度を築いたミース・ファン・デル・ローエは「透明性」を多用したことは例に出すまでもないだろう。

やがて、モダニズム建築が世界中に拡散し、「白」と「透明性」のつくりだす虚像が、世界中に散りばめられた百花繚乱の土着の虚像を駆逐していくこととなる。インターナショナル化する社会的状況を追い風にモダニズムが世界中を覆い尽くすのに、そこまでの時間を要さなかった。それは革

命とよべるほどである。ただ、いったん世界中がモダニズムに染まってしまうと、図が地に入れ変わり、主客が反転をおこし、「白」と「透明性」の虚像がもっていた捨象の意味が消失することになった。周囲の状況により挙動する虚像をつくりだす「白」と「透明性」は、虚無感を生み世界中に蔓延させることとなる。この状況をロバート・ヴェンチュリーが「Less is bore」と評したのは有名である。禁欲的なモダニズム時代の反動から、ありとあらゆる虚像がフラットに乱立するポストモダニズムといわれる時代に突入する。例えばそれは、ロケットの形を模し科学技術への信仰を表象したり、流線形の宇宙船を思わせるフューチャリスティックな形態により SF 映画に登場するような輝ける未来の虚像をまとうものであったりした。かと思えば、ギリシャ神殿、数寄屋建築のような過去の建築様式を借用したり、それらを合成させ新たな物語を編集しようとした。建設途中、廃墟などの虚像をつくりだす建築も現れた。ようするに、禁じられていた反動から、おもちゃ箱をぶちやけたように、ありとあらゆる虚像が町に飛び出したのである。しかしそれらは、虚像だけが独り歩きする、実像をおいてきぼりにした、実像と虚像の実験的なゲームでしかなかった。好景気、消費社会の拡大を背景にカラフルでまばゆい虚像が町中を覆いつくし、その雑然とした状況はついには、反動の元凶であったはずの抽象建築（モダニズム）ですらも借用の対象とするまでに至る。ようするに再度、図と地の反転がおこり、雑然とした状況にありモダニズム建築のもつ「白」、「透明性」がつくりだす抽象的虚像が再び意味をもちはじめたのである。ありとあらゆる虚像が出尽くし、それが独り歩きした虚像のゲームでしかなかったことに気づいてしまった今、本質をともなった実像と虚像の関係を時代は求めている。

7 - 2 - 2 日本建築における実像と虚像

日本における建築空間の原点は、4 隅に柱だけが立てられ、そこに生じる空白であった。つまり「間」である。そこにはいわゆる空間の概念だけでなく時間の概念が存在している。それは原初的には神が宿る祭壇を意味した。それ自体は空白ではあるが、無であるがゆえに、存在しうる虚像である。移ろい変わりゆくことを内包し、何かが入り込める余地を日本の建築は必要とした。それゆえに、特定の意味を表象する装飾を嫌い、抽象さ、簡素さが求められた。日本建築の象徴ともいえる伊勢神宮が各社殿の隣に空白の余地を合わせもち、20 年に一度、社殿と余地が取り替わるように建て替えが行われ続けていることはその最たるものだろう。ようするに日本建築は「間」という概念をなくして語ることはできないのである。

以上のことから日本建築はその土着性において抽象という考え方、美意識をもっていたのである。近代に入りブルーノ・タウトが日本に滞在した際に桂離宮を見て、その抽象美に心奪われ、それをモダニズムの美意識と重ね合わせ、世界に紹介したわけだが、土着の次元で抽象性をもちあわせていた日本建築と、様式建築からの脱却のために捨象、抽象化を求めたモダニズム（近代建築）ではその成立過程を大きく異にし、そこでの実像と虚像の役割も大いに異なるのである。ようするに、時代はようやく日本建築に追いついたと言っても過言ではなかろう。

7 - 2 - 3 現代の日本建築における白と透明性と間

前節までに述べたように、「白」、「透明性」と「間」では歴史の中でのたちふるまい、役割が異なる。「白」は無であることを主張する有、つまり捨象というプロパガンダをとまなう虚像ゆえに、モダニズムの象徴として用いられ、「透明性」は主体と客体が同時に存在し、両義性をとまなうという虚像の性質から民主主義の象徴となり、「間」は実像をとまなわない無という性質ゆえに、多種多様な神が存在し、移ろいを大切にしてきた日本建築の象徴となってきたといえる。現代の日本建築が、「白」、「透明性」、「間」を合わせもち、海外から抽象的であると評されているのは、モダニズム建築が「白」と「透明性」に、その実像と虚像の乖離を利用して捨象、抽象化というプロパガンダとしての虚像を求めたのに対して、日本建築においては土着的の性質において抽象の概念をもっており、「白」と「透明性」にプロパガンダとしての役割を求める必要がなく、むしろ実像との乖離のない抽象的、多義的な虚像が、日本古来の「間」と親和し、対立することなく素直に受け止められたからなのではないかと考えられる。つまり「白」、「透明性」と「間」をあわせもつことで、日本建築は近代的革命を経ることなく、現代建築を土着性から切り離すことなく、成立させることができたのである。

7 - 2 - 4 近代以前の秩序形成と神、宗教、妖怪、幽霊

実像と虚像の関係を語るにあたり、考えておかなければならないのは、近代以前にいかにも多種多様な虚像が生み出され、実像と虚像の関係が社会の秩序を形成するのに役立てられていたかという事実である。

なぜ雨が降るのか、なぜ大地が揺れるのか、なぜ作物が実るのか、なぜ火が燃えるのか、そういった説明のできない不可解な事象に人々は虚像をみいだしてきた。

水にも、土にも、木にも、岩にも、火にも、光にも神が宿る、それは水が生命にとって不可欠なもので、土が作物を実らせ、火が獣から身を守ってくれ、光が闇を照らしてくれる。そういった人々の周囲にある説明のしきれない、コントロールのしきれない、もの、こと、現象が生きていくための欲望、願望と結びつき神という虚像を出現させる。

地震により大地が揺れる現象を巨大ナマズが暴れていることによるものであるとしたり、薄暗く、じめつとした、生ぬるい風が吹くような、古ぼけた建物や井戸などに、暗さ、湿度、音、臭い、質感、土地性などの感覚要素があいまって、なんとも説明不可能な状況を生み出し、その現象と伝承などのストーリーが融合し幽霊、妖怪を出現させたのだろう。

第二節でも述べたように、神は空白の間に宿り、幽霊は町はずれの辻、川べりなどの境界に現れ、妖怪は集落や家などの自然との境界が曖昧になるところに現れる。そういった空間がもつ性質に、人の願望、恐怖といった感情や伝承、体験などのストーリーが重なり合い、虚像が生まれている。つまり、無や曖昧な境界、矛盾をはらんだ場所に虚像がつくりだされ、不可解なもの、複雑なもの

を調停しているということができないのではないだろうか。

またこうした虚像が近代以前の社会において秩序を形成し、人、もの、こと、事象の関係を構築してきたのも事実である。宗教は神という虚像を元に物語をつくりあげ、人生の規範を示した。中世にいたっては国家形成と宗教は切っても切り離せない関係になっていたほどである。宗教が国家の上位概念であることを印象づけたカノッサの屈辱は有名である。また妖怪という虚像の存在は、体験、物語を子子孫孫と伝えたり、やってはいけないこと、立ち入ってはいけない場所、川や井戸など水場の危険性、地震や津波の恐怖や対処法などを教え伝える伝承の役割ともなっていた。

7 - 2 - 5 グローバリズム社会の到来による前近代土着文化の限界と終焉

大航海時代、産業革命を経て近代に入ると、交通手段の進歩、活版印刷などの技術革新を後押しにして、それまで独自の文化を築いてきた各地方、各民族といった枠組みを乗り越え、世界が拡大し、交流が活発になる。そうすると、それまで社会の秩序を形成していたはずの虚像が対立をはじめる。唯一絶対であると思っていたはずの神が世界中に乱立していることに気づいてしまう。それまで人、もの、こと、現象の関係をづくりだし、秩序を構築していたはずの虚像が争いの元になってしまったのである。ここに前近代土着文化の限界が露呈してしまう。空白、曖昧、境界だからこそつくりだしえた多義的虚像が、さらに大きな枠組みからみれば多義を失い、特定のアイデンティティを表象する実像になってしまったといえる。近代グローバル社会は、さらなる抽象化、さらなる多義化を求めた。そこに登場したのが「白」と「透明性」であったというわけである。それは自身に土着文化を抱えない無であることにより周囲との関係で多義的にふるまう虚像である。近代は前近代が構築してきた土着的虚像社会からの脱却を目指したといってもいいだろう。

7 - 2 - 6 近代における多義的統合の分化と虚像の解体

近代が土着的虚像に代わり、秩序を構成するための規範として求めたのが科学であり、法である。グローバル化し巨大化した世界において、独自の秩序が乱立しては、社会は、回っていかず、認識、文化、歴史などの個々のバックグラウンドによる差異、挙動を許さない、誰もが同じ解釈を可能にするプラットフォームを必要としたのである。経験と知識にだけ基づき、客観的再現性を担保した体系化された規範である。それは、多義や虚像とは相容れないものであった。近代とは人、もの、こと、現象、とその関係を説明可能にする文化であるということができるだろう。つまり、近代は多義的統合の分化と虚像の解体を行ったのである。

7 - 2 - 7 現代合理主義の脆弱性と新たな虚像

近代は市民社会、民主主義社会を成立させた。これは歴史的にみても革命的、画期的なことではあったが、それと引き換えに、それまで存在していた多種多様な虚像を捨象し奪い去った。人もことも現象も何もかもがフラット化された。

合理主義とは、ある問い立てに対して最適解を与えていくという考えに基づいている。つまり、誰にも、あてはまる客観的な問い立てを必要とするのである。それに加え、前提としていた問い立てがひとたび変わってしまえば、もろくも崩壊してしまう。ここに現代合理主義の脆弱性と限界がある。確かにある時期までは機能していた。さらにいえば前近代を脱却するために通ってこなければならなかった必然的プロセスだったといえるのではないか。誰もが共有できるプラットフォームを築いたという功績は大きい。

けれども、近年その限界が露呈しはじめている。人は誰一人として同じではないし、関係は経験、文化、歴史などのコンテキストにより流動的である。言ってしまうと、人、もの、こと、現象などは全て揺れ動く過渡期の存在なのである。実像として留まっているのではなく、どうしても虚像を派生してしまう。こと、現代社会においては、変化のスピードがますます速くなり、虚像の挙動の幅もますます広がる一方である。合理主義が必要としていた問い立てが成立しない。前提としていた問い立てが変化のスピードゆえに数年で成り立たなくなり、崩壊してしまう。このことは、数十年、数百年という単位で存続していかなければならない建築においては顕著である。日本においては現代合理主義の下に、30年で住宅が建て替えられ続けているのが現状である。

また、近代は、神の不在を宣告した。

それまで虚像がもつ多義性により統合され成立していた事象が近代という幻想の消失とともにバラバラになってしまい拠り所を失ってしまった。社会とは近代合理主義が夢見ていたよりも、複雑でおおいに矛盾をはらんでいたのである。近代により、誰もが共有しうる言語、プラットフォームを手に入れた今、そのプロセスにおいてスポイルされてきてしまった様々な事象を救い上げる新たな虚像が求められているのではないだろうか。

7 - 2 - 8 多義化する建築、つくると生まれるの間

近代により、前近代的な虚像は解体された。地震は地球の表層で地殻の変動によりもたらされるものであると説明され、かつては存在していた妖怪や幽霊も、薄暗さ、湿度、風、物音、建材の経年変化に恐怖心などの心理状況が合わさり、虚像として出現しているのだと説明され、虚像として統合されていたものが、ひとつひとつの物理現象として因数分解された。妖怪や幽霊などを扱った怪談話やホラーをみると、その出現場所として、かつては井戸や縁の下、座敷、風呂、トイレ、障子などの建築空間、建築部位が描かれていた。現代においては、建築

ではなく、テレビや携帯電話、タクシーなどにとってかわられている。もはや現代建築には妖怪や幽霊は宿らなくなっているのである。現代建築は壁、天井、床へとわかりやすく分化され、それまでは、まとまってひとつの体験を与えていた現象も光、温度、湿度、風といった具合に環境因子として物理的に説明され、さらには昨今の建築材料は経年変化を嫌う。こうしてばらばらになってしまった実像は虚像を結ばなくなってしまうのだ。

元来、建築とは多種多様な事象、コンテキストを統合していく行為である。建築によりもう一度、説明によっては不可能な体験性、つまりは多義的虚像を取り戻せないだろうか。頭で理解しきってしまうようなものではなく、それを越えた認識による統合である。

近代合理主義は社会が複雑化し過ぎたがゆえに、その問い立てが成立しなくなったこと、社会の変化のスピードが速くなり過ぎてしまい、最適解を与えたところで、その問い立て自体が無効化してしまうことにより、限界をむかえた。ならば、社会の複雑さに合わせて、そのコンテキストの分だけ問い立てを乱立させればよいのではないか。なにも問題をひとつにまとめあげてしまう必要はない。そうした多種多様なコンテキストを前提とした多種多様な空間を重ね合わせ、建築として統合できないだろうか。さらにひとつの時代に融合させてしまうのではなく、建築に過渡期性をもたせ、つまりは2つ以上の時間軸を内包させ、社会の変化に応じた新陳代謝をおこす。そうしてできた建築は複雑化し矛盾をはらんだ実像の関係を調整し、時間の流れを取り込み、多重人格的群像を描き、虚像をつくりだす。その新たな虚像により、近代にばらばらに分化されてしまった実像を統合し、社会を再構築できるのではないだろうかと考える。合理主義を超えた超合理主義、それは「つくる」と「生まれる」の間を志向することに他ならない。

7 - 3 総括と展望

本論文は、現代日本の建築家による言説を通して、建築物の言語描写における多義性の側面から実像と虚像の関係を論じたものである。

もの、こと、現象、空間などが本来それ自体にもち備えている物理的性質を実像と定義し、そこに人の認識、体験や置かれている状況、慣習、歴史、文化などの社会的背景が介在することにより実像を超えて、派生し、つくりだされる像を虚像と定義した。

実像と虚像の関係を考えるとき、その間には両者の関係をつなぐ抽象という概念が必要となるという観点から、表層の次元として<白>、ものの次元として<透明性>、空間の次元として<間>の3つの次元を設定し、表層、もの、空間のそれぞれの次元から実像と虚像の関係を考察した。

表層、もの、空間の全ての次元で共通する性質として、周囲に存在する事象と事象の境界を調整することにより、接続、分離などの関係をつくりだす、あるいは周囲の事象と白、透明性、間などの抽象性が主体的に関係を結び、融合することで事象のもつ具象性を捨象し、雰囲気などを生成することにより虚像をつくりだすということがわかった。

また各次元からみていくと、表層の次元では、視覚を媒介とし、抽象性、媒質が、状況に応じて主体にも客体にもなりえ、いわば両義的性格をもち合わせており、その主客の立ち位置の変化により、揺れ動く虚像をつくりだしている。白は、捨象という意志により虚像を発生させる。いわば、無であることを主張している有であるといえる。また、時間の変化、演出性、図と地の関係、合理性といった固有性を有することがわかった。

ものの次元では、視覚と身体性の両者を媒介とし、その重ね合わせあるいはねじれにより、抽象性、媒質が、状況に応じて主体にも客体にもなりえ、いわば両義的性格をもち合わせており、その主客の立ち位置の変化により、揺れ動く虚像をつくりだしている。透明性は、両義性により虚像を発生させる。いわば、無の性質をともなった有であるといえる。また、情報、図と地の関係、社会性、活動と感情といった固有性を有することがわかった。

空間の次元では、身体性を媒介とし、抽象性、媒質が、客体的にのみ働き、それをつくりだす周囲の実像、それを介して獲得される事象により、その性格がゆだねられ、その振れ幅により多義をともなった虚像をつくりだしている。間は、関係性により虚像を発生させる。いわば、事象と事象の関係においてつくりだされる存在であり、それ自体は、無であるといえる。また、活動と感情、コミュニティの生成、土着性といった固有性を有することがわかった。

本論文は、物理的性質のみならず、人の認識、体験や置かれている状況、慣習、歴史、文化などの社会的背景をも含めた建築のありようを、実像と虚像という観点から論じるものである。建築物を実像としてだけでなく、虚像を含めて捉える視点を与えるだけでなく、虚像をも含めた建築設計手法の指針になるものと考え。

8 謝辞

本論文をまとめるにあたり、多くの方々の御指導、御助力、御協力をいただきました。これらの方々に心から感謝の意を表します。

本論文をまとめるようにお勧めくださった 名古屋工業大学工学研究科准教授 北川啓介工学博士には、多くの御指導、御助言をいただきました。多大なるお力添えに心から感謝いたします。

学部時代、修士時代を通して長きにわたり御指導を賜りました名古屋工業大学工学研究科教授 堀越哲美工学博士に深く感謝を申し上げます。

本論文につきまして、ご指導をいただきました 名古屋工業大学工学研究科教授 松本直司工学博士、名古屋工業大学工学研究科教授 兼田敏之工学博士、名古屋工業大学工学研究科教授 藤田素弘工学博士に深く感謝を申し上げます。

共に研究を行った、寺田享平氏、小川俊之氏、加藤聖仁氏、山梨岳美氏、大井亮氏に深く感謝の意を表します。また、本論をまとめるにあたり上間鉄平氏、桂川大氏に御尽力いただきましたこと、御礼申し上げます。御協力をいただきました名古屋工業大学工学部北川啓介研究室の皆様に御礼申し上げます。最後になりますが、これまで私を支えてくれた家族、友人、米澤隆建築設計事務所の皆様に感謝致します。いつでも私の言動に多大なる理解を示し、公私にわたり献身的に力になってくれている坂本睦氏に心から感謝いたします。

2014 年吉月吉日